鳥取県教育文化財団調査報告書　50

主要地方道溝口伯太線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡会見町

TURUTAHAKANOUE

鶴田墓ノ上遺跡

TURUTAŌMITIBATA

鶴田大道端遺跡

TURUTANAKAMINEYAMA

鶴田中峯山遺跡

1997

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

鳥取県西部、秀峰大山の西に位置する会見町は、四季折々の美しい景観を眺望することのできる自然豊かな地域です。また、この地域は、古くから遺跡の宝庫としても知られており、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が多数見つかった越敷山遺跡群、西伯耆最大の前方後円墳である三崎殿山古墳、三角縁神獣鏡が出土した普段寺１・２号墳、人物埴輪の出土した後塔山古墳など古代人の生活や当時の人々の活発な交流を物語る貴重な遺跡・遺物が数多く存在しています。

財団法人鳥取県教育文化財団では、平成７年度から鳥取県の委託を受け、主要地方道溝口伯太線の改築工事に伴って、失われる遺跡について記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。平成８年度は会見町の東側を占める越敷台地上に位置する鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡の３遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査においては、縄文時代の落し穴、弥生時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中世や近世の土坑・土壙墓などの遺構や遺物が見つかりました。その結果、これまで不明な点が多かった越敷台地における郷土の先人たちの足跡の一端を明らかにすることができ、郷土の歴史を解明するうえでの貴重な資料を得ることができました。

本書は、この発掘調査の結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめたものです。本書の「記録」が、文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育及び学術研究のために広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

平成９年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　田　渕　康　允

例　言

1．本報告書は、「主要地方道溝口伯太線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委託」に伴い平成８（1996）年度に調査を実施した鵜田墓ノ上遺跡・鵜田大道端遺跡・鵜田中峯山遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。

遺跡の所在地は下記の通りである。

鵜田墓ノ上遺跡：西伯郡会見町鵜田字墓ノ上762、769

鵜田大道端遺跡：西伯郡会見町鵜田字大道端425－１、425－４

鵜田中峯山遺跡：西伯郡会見町鵜田字中峯山384－３、字中屋敷358－１

３遺跡は近接しており、北緯35度20分30秒、東経133度25分付近に位置する。

2．調査地には、株式会社ウエスコに委託して国土座標第Ⅴ系に対応する10m単位のグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で図示しグリッド名とした。方位は国土座標第Ⅴ系に基づく座標北であり、レベルは海抜標高を表す。なお、国土座標およびグリッド名については各遺跡の全体遺構図に記載した。

3．本報告書に掲載の周辺遺跡分布図には国土地理院発行の５万分の１地形図「米子」（平成３年修正版）および「根雨」（平成２年修正版）を使用した。

4．本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は調査員が分担して執筆し、目次に執筆者を記載した。なお、編集は西川が行った。

遺構図の浄写・遺物の実測並びに浄写は鳥取県埋蔵文化財センターで実施した。

遺構・遺物写真は調査員が撮影した。

5．遺構実測は調査員が行ったが、鵜田中峯山遺跡の調査後測量を除く調査前および調査後の地形測量を株式会社ウエスコに委託して行った。

6．鵜田中峯山遺跡のラジコンヘリコプターによる遺構空中写真撮影を、写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。

7．出土した石製品の石材鑑定を鳥取大学教育学部の赤木三郎教授にお願いし、御教示をいただいた。

8．周辺地域の地質について鳥取大学教育学部の岡田昭明助教授に現地指導をいただいた。

9．鵜田中峯山遺跡ＳＫ－36出土の人骨について鳥取大学医学部の井上貴央教授に取り上げおよび鑑定をお願いし、玉稿をいただいた。

10．鵜田大道端遺跡ＳＫ－01および鵜田中峯山遺跡ＳＫ－21の土坑埋土のリン・カルシウム分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

11．出土遺物・図面・写真等は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。

12．現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。（五十音順、敬称略）

新井　宏則　　岡田　龍平

凡　例

1．出土遺物にネーミングした遺跡名は下記の略称を用いた。

鶴田中峯山遺跡：中ミネ

2．本報告書における遺構記号は下記のように表す。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＫ：土坑・土壙墓　　ＳＤ：溝状遺構

ＳＳ：段状遺構　　Ｐ：柱穴・ピット（全体遺構図中では遺構記号「Ｐ」を省略）

ＳＸ：不明遺構

3．本報告書における遺物記号は下記のように表す。

Po：土器・土製品　　S：石製品　　F：鉄製品　　C：古銭

4．遺構図中における表示は下記のように表す。

▦：焼土面　　●：土器・土製品　　▲：石製品　　■：鉄製品

5．遺物実測図中における記号は以下の通りとする。

→：ケズリの方向（砂粒の動き）　├----┤：擦り範囲　　├────┤：敲打範囲

6．遺物観察表における法量の欄の番号は次の通りとする。なお、数値の後についた※は復元値、△は残存値、◎は推定値であることを表す。

①口径　②器高　③底部径　④脚径・高台径　⑤最大長　⑥最大幅　⑦最大厚

7．遺物観察表の備考欄に記載した「清水－１」等の番号は実測者番号である。実測者番号はテープに記したものを実測個体ごとに貼り付けるとともに実測原図にも記載した。

8．発掘調査時における遺構番号と本報告書における遺構番号は基本的には一致するが、下記のものは変更したものである。

鶴田中峯山遺跡

調　査　時	報　告　時
ＳＫ－０７	ＳＢ－０１
ＳＤ－０６	ＳＤ－２５

挿表１　遺構番号対照表

調査参加者

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　発掘調査に至る経緯 ……（西川）　1
　第２節　調査の経過と方法 ……（西川）　1
　第３節　調査体制 ……（西川）　3
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 ……（宮石）　4
　第２節　歴史的環境 ……（宮石）　5
第３章　鶏田墓ノ上遺跡の調査
　第１節　土坑 ……（西川）　11
　第２節　まとめ ……（西川）　19
第４章　鶏田大道端遺跡の調査
　第１節　掘立柱建物跡 ……（宮石）　23
　第２節　土坑 ……（宮石）　24
　第３節　溝状遺構 ……（宮石）　26
　第４節　ピット ……（宮石）　26
　第５節　まとめ ……（宮石）　27
第５章　鶏田中峯山遺跡の調査
　第１節　竪穴住居跡 ……（西川）　35
　第２節　掘立柱建物跡 ……（西川）　39
　第３節　土坑・土壙墓 ……（西川・宮石）　41
　第４節　溝状遺構 ……（宮石）　63
　第５節　段状遺構 ……（西川）　84
　第６節　窯状遺構 ……（西川）　85
　第７節　集石遺構 ……（西川）　87
　第８節　不明遺構 ……（宮石）　88
　第９節　ピット ……（西川）　90
　第10節　遺構外の遺物 ……（西川）　90
　第11節　まとめ ……（西川）　96

附論１　鶏田大道端遺跡ＳＫ－01の遺体埋葬の可能性……　パリノ・サーヴェイ株式会社　107
　　２　鶏田中峯山遺跡ＳＫ－21のリン・カルシウム分析……　パリノ・サーヴェイ株式会社　109
　　３　鶏田中峯山遺跡から検出された人骨について……　井上貴央　111

挿図目次

挿図１　調査地位置図 …… 2
挿図２　遺跡位置図 …… 4
挿図３　周辺遺跡分布図 …… 7

鶴田墓ノ上遺跡

挿図４　鶴田墓ノ上遺跡調査前地形測量図 …… 9
挿図５　鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図 …… 10
挿図６　ＳＫ－０１遺構図 …… 11
挿図７　ＳＫ－０２遺構図 …… 12
挿図８　ＳＫ－０３遺構図 …… 13
挿図９　ＳＫ－０４遺構図 …… 14
挿図10　ＳＫ－０５遺構図 …… 15
挿図11　ＳＫ－０６遺構図 …… 16
挿図12　ＳＫ－０７遺構図 …… 17
挿図13　ＳＫ－０８遺構図 …… 19

鶴田大道端遺跡

挿図14　鶴田大道端遺跡調査前地形測量図 …… 21
挿図15　鶴田大道端遺跡全体遺構図 …… 22
挿図16　ＳＢ－０１遺構図 …… 23
挿図17　ＳＢ－０２遺構図 …… 24
挿図18　ＳＫ－０１遺構図 …… 24
挿図19　ＳＫ－０２遺構図 …… 25
挿図20　ＳＫ－０３遺構図 …… 25
挿図21　ＳＫ－０４遺構図 …… 26
挿図22　ＳＤ－０１遺構図 …… 26
挿図23　南壁東西土層断面図 …… 27

鶴田中峯山遺跡

挿図24　鶴田中峯山遺跡調査前地形測量図 …… 31・32
挿図25　鶴田中峯山遺跡全体遺構図 …… 33・34
挿図26　ＳＩ－０１遺物実測図 …… 35
挿図27　ＳＩ－０１遺構図 …… 36
挿図28　ＳＩ－０２遺構図 …… 37
挿図29　ＳＩ－０２遺物実測図 …… 38
挿図30　ＳＢ－０１遺構図 …… 39
挿図31　ＳＢ－０２遺構図 …… 40
挿図32　ＳＢ－０３遺構図 …… 41
挿図33　ＳＫ－０１遺構図 …… 42
挿図34　ＳＫ－０２遺構図 …… 42
挿図35　ＳＫ－０３遺構図 …… 43
挿図36　ＳＫ－０４遺構図 …… 43
挿図37　ＳＫ－０５遺構図 …… 44
挿図38　ＳＫ－０６遺構図 …… 45
挿図39　ＳＫ－０７遺構図 …… 45
挿図40　ＳＫ－０８遺構図 …… 46
挿図41　ＳＫ－０９遺構図 …… 47
挿図42　ＳＫ－０９遺物実測図 …… 47
挿図43　ＳＫ－１０遺構図 …… 48
挿図44　ＳＫ－１１遺構図 …… 48
挿図45　ＳＫ－１１遺物実測図 …… 48
挿図46　ＳＫ－１２遺構図 …… 49
挿図47　ＳＫ－１２遺物実測図 …… 49
挿図48　ＳＫ－１３遺構図 …… 50
挿図49　ＳＫ－１４遺構図 …… 50
挿図50　ＳＫ－１５遺構図 …… 51
挿図51　ＳＫ－１６遺構図 …… 51
挿図52　ＳＫ－１７遺構図 …… 52
挿図53　ＳＫ－１８遺構図 …… 52
挿図54　ＳＫ－１９遺構図 …… 52
挿図55　ＳＫ－２０遺構図 …… 53
挿図56　ＳＫ－２０遺物実測図 …… 53
挿図57　ＳＫ－２１遺構図 …… 54
挿図58　ＳＫ－２１遺物実測図 …… 54
挿図59　ＳＫ－２２遺構図 …… 55
挿図60　ＳＫ－２３遺構図 …… 55
挿図61　ＳＫ－２４遺構図 …… 56
挿図62　ＳＫ－２４遺物実測図 …… 56
挿図63　ＳＫ－２５遺構図 …… 56
挿図64　ＳＫ－２５遺物実測図 …… 56
挿図65　ＳＫ－２６遺構図 …… 57
挿図66　ＳＫ－２７遺構図 …… 57
挿図67　ＳＫ－２８遺構図 …… 58
挿図68　ＳＫ－２９遺構図 …… 58
挿図69　ＳＫ－３０遺構図 …… 58
挿図70　ＳＫ－３１遺構図 …… 59
挿図71　ＳＫ－３２遺構図 …… 59
挿図72　ＳＫ－３３遺構図 …… 60

挿図73　ＳＫ－３４遺構図 …… 60
挿図74　ＳＫ－３５遺構図 …… 61
挿図75　ＳＫ－３６遺構図 …… 62
挿図76　ＳＫ－３７遺構図 …… 63
挿図77　ＳＫ－３７遺物実測図 …… 63
挿図78　ＳＤ－０１遺物実測図 …… 64
挿図79　ＳＤ－０２遺物実測図 …… 64
挿図80　ＳＤ－０１・０２・０３・０４・０５・０７遺構図 …… 65・66
挿図81　ＳＤ－０６・０８・０９・１０遺構図 … 69・70
挿図82　ＳＤ－１１遺構図 …… 72
挿図83　ＳＤ－１３遺物実測図 …… 72
挿図84　ＳＤ－１２遺構図 …… 73・74
挿図85　ＳＤ－１３遺構図 …… 73・74
挿図86　ＳＤ－１５遺構図 …… 73・74
挿図87　ＳＤ－１４遺構図 …… 75
挿図88　ＳＤ－１５遺物実測図 …… 75
挿図89　ＳＤ－１６遺構図 …… 75
挿図90　ＳＤ－１７遺構図 …… 76
挿図91　ＳＤ－１８・１９・２０・２１遺構図 ……77・78
挿図92　ＳＤ－１８遺物実測図 …… 79
挿図93　ＳＤ－２０遺物実測図 …… 80
挿図94　ＳＤ－２２遺構図 …… 80
挿図95　ＳＤ－２３遺構図 …… 81
挿図96　ＳＤ－２４遺構図 …… 81
挿図97　ＳＤ－２５遺構図 …… 81
挿図98　ＳＳ－０１遺物実測図 …… 83
挿図99　ＳＳ－０１遺構図 …… 84
挿図100　ＳＳ－０２遺構図 …… 85
挿図101　ＳＳ－０２遺物実測図 …… 85
挿図102　窯状遺構遺構図 …… 86
挿図103　窯状遺構遺物実測図 …… 87
挿図104　集石遺構遺構図 …… 87
挿図105　ＳＸ－０１遺構図 …… 89
挿図106　Ｐ103遺構図 …… 90
挿図107　Ｐ103遺物実測図 …… 90
挿図108　ピット位置図 …… 91・92
挿図109　遺構外出土遺物実測図（１） … 93
挿図110　遺構外出土遺物実測図（２） … 94
挿図111　遺構外出土遺物実測図（３） … 95

挿表目次

挿表１　遺構番号対照表 …… 凡例

鶴田墓ノ上遺跡

挿表２　土坑一覧表 …… 20

鶴田大道端遺跡

挿表３　掘立柱建物跡一覧表 …… 27
挿表４　土坑一覧表 …… 28
挿表５　ピット一覧表 …… 28

鶴田中峯山遺跡

挿表６　竪穴住居跡一覧表 …… 97
挿表７　掘立柱建物跡一覧表 …… 97
挿表８　土坑・土壙墓一覧表 …… 98
挿表９　溝状遺構一覧表 …… 99
挿表10　ピット一覧表 …… 99
挿表11　土器・土製品観察表 ……102
挿表12　石製品観察表 ……106
挿表13　鉄製品観察表 ……106

図版目次

鶴田墓ノ上遺跡

図版１　調査後全景（南より）
ＳＫ－０１土層断面（北より）
ＳＫ－０３土層断面（南西より）
ＳＫ－０４土層断面（西より）
図版２　ＳＫ－０５底面ピット断面（西より）
ＳＫ－０６土層断面（南より）
ＳＫ－０７土層断面（西より）
ＳＫ－０７底面ピット断面（西より）

鶴田大道端遺跡

図版３　調査後全景（西より）
ＳＢ－０１完掘状況（北より）
ＳＢ－０２完掘状況（東より）
ＳＫ－０１完掘状況（東より）
ＳＫ－０２完掘状況（南東より）
ＳＫ－０２土層断面（南東より）
図版４　ＳＫ－０３完掘状況（北より）
ＳＫ－０４完掘状況（東より）
ＳＤ－０１完掘状況（南より）
ＳＤ－０１土層断面（南東より）

鶴田中峯山遺跡

図版５　調査後全景（南より）
ＳＩ－０１完掘状況（北東より）
ＳＩ－０２完掘状況（北東より）
図版６　ＳＢ－０１完掘状況（南より）
ＳＢ－０２完掘状況（東より）
ＳＢ－０３完掘状況（南東より）
図版７　ＳＫ－０５土層断面（南西より）
ＳＫ－０８土層断面（西より）
ＳＫ－０９土層断面（南より）
ＳＫ－０９土器出土状況（南より）
図版８　ＳＫ－１２土器出土状況（南より）
ＳＫ－２０鉄鎌出土状況（南東より）
ＳＫ－２１礫検出状況（北西より）
ＳＫ－２１土器出土状況（西より）
図版９　ＳＫ－３５人骨片出土状況（南より）
ＳＫ－３６人骨出土状況（南より）
ＳＫ－３７鉄鍋出土状況（南より）
図版10　溝状遺構検出状況（南西より）
ＳＤ－０１土器出土状況（西より）
ＳＤ－１５土層断面（南より）
図版11　ＳＳ－０１穴３土層断面（北東より）
ＳＳ－０１穴５土層断面（北東より）
ＳＳ－０２完掘状況（西より）
図版12　窯状遺構土層断面（東より）
窯状遺構完掘状況（東より）
ＳＸ－０１・ＳＤ－１８土層断面（南より）
Ｐ103石斧出土状況（東より）
図版13　ＳＩ－０１出土遺物
ＳＩ－０２出土遺物
ＳＫ－０９出土遺物
ＳＫ－１１出土遺物
ＳＫ－１２出土遺物
ＳＫ－２０出土遺物
図版14　ＳＫ－２１出土遺物
ＳＫ－２４出土遺物
ＳＫ－２５出土遺物
ＳＫ－３７出土遺物
ＳＤ－０１出土遺物
図版15　ＳＤ－０２出土遺物
ＳＤ－１３出土遺物
ＳＤ－１５出土遺物
ＳＤ－１８出土遺物
ＳＤ－２０出土遺物
ＳＳ－０１出土遺物
ＳＳ－０２出土遺物
図版16　窯状遺構出土遺物
Ｐ103出土遺物
遺構外出土遺物（１）
図版17　遺構外出土遺物（２）
図版18　遺構外出土遺物（３）

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

鳥取県では住民の生活環境の向上のため順次道路改良工事を行っているが、その一環として主要地方道溝口伯太線の道路改築工事が実施されることになった。このうち、西伯郡会見町鵜田地域周辺には、会見町の越敷山遺跡や鵜田合清水遺跡などの遺跡が点在しており、道路工事に先立って予定地内の遺跡・遺構の有無を確認する必要性が生じた。

平成５～７年度にかけて会見町教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、いくつかのトレンチから土坑などの遺構が出土し、遺跡の存在が確認された。そこで、鳥取県土木部道路課および鳥取県米子土木事務所は、鳥取県教育委員会と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査の委託をした。西部埋蔵文化財溝口伯太調査事務所が発掘調査を担当することとなり、鵜田墓ノ上遺跡・鵜田大道端遺跡・鵜田中峯山遺跡の３遺跡を調査することとなった。

第２節　調査の経過と方法

調査地は鵜田墓ノ上遺跡・鵜田大道端遺跡・鵜田中峯山遺跡の３遺跡である。調査は平成８年度の単年度実施である。

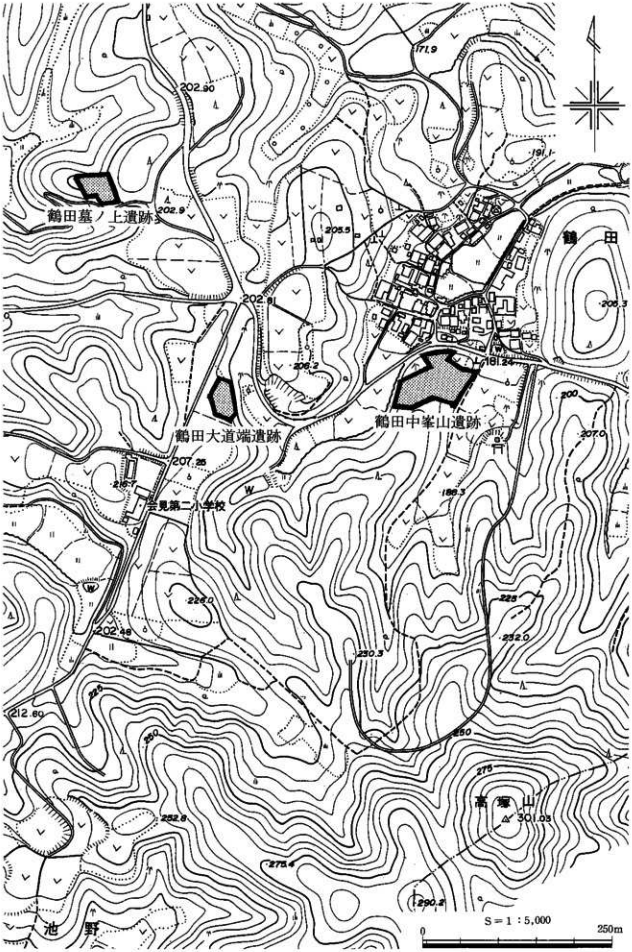
鵜田墓ノ上遺跡の調査は、調査前地形測量終了後の４月４日から重機による表土剝ぎを開始した。作業員は４月８日から稼働を開始した。表土剝ぎ終了後、国土座標第Ｖ系に対応する10ｍグリッドを設定するための基準杭を打った。検出した遺構は落し穴と考えられる土坑８基である。土坑の調査では断面の観察を最優先に考え、最初に土坑の半分を掘り上げて平面図を取り、土坑の半分を破壊することになるが掘り上げ部分を掘り拡げて断面観察に充分なスペースを確保し、断面図・写真を取ったのち土坑の残り半分を完掘した。そのため、最終的な土坑完掘写真は本来の土坑の半分となったが、土坑を破壊しない調査では、不十分なものと成らざるを得ない底面ピットを含めた埋土の堆積状態について、より多くの情報を得ることが出来た。その後、調査後地形測量を実施し、調査後の全体写真を６月３日に撮影して調査を終了した。

鵜田大道端遺跡の調査は、調査前の地形測量を実施したのち、４月９日から重機による表土剝ぎを開始し、表土剝ぎ終了後、国土座標第Ｖ系に対応する10ｍグリッドを設定するための基準杭を打った。作業員は４月18日から稼働を開始した。検出した遺構は掘立柱建物跡２棟と土坑４基と溝状遺構１条およびピットである。その後、調査後地形測量を実施し、調査後の全体写真を６月３日に撮影して、調査を終了した。

鵜田中峯山遺跡の調査は、調査前の地形測量を実施したのち、５月13日から調査地の境界部分に沿って土層確認を目的としてトレンチを設定して掘り下げを開始した。５月17日からは重機による表土剝ぎも開始し、表土剝ぎ終了後には国土座標第Ｖ系に対応する10ｍグリッドを設定した。検出した遺構は建て替えの認められる竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡３棟、土坑・土壙墓37基、溝状遺構25条、段状遺構２基、窯状遺構１基、集石遺構１、ピットである。

調査地の全体写真は９月３日にラジコンヘリコプターを使用して撮影し、９月27日には、地元の方々を対象に現地見学会を実施した。

調査は、10月１日に鳥取大学医学部の井上貴央教授にお願いしてＳＫ－３６で出土した人骨の取り上げを実施し、全ての調査を終了した。


鶴田墓ノ上遺跡
鶴田
鶴田大道端遺跡
鶴田中峯山遺跡
三見第二小学校
高塚山
△301.05
池野
S＝1：5,000
0
250m

挿図1　調査地位置図

第3節　調査体制

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田渕康允（鳥取県教育長）
常務理事	森田哲彦（鳥取県教育次長）
事務局長	岩本武夫

財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター

所長	宮谷正信（鳥取県教育委員会文化課長）
次長	八木谷　昇
調整係長	久保顕二朗（鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長）
調査員	亀井照人
	小谷修一
庶務係主任事務職員	矢部美恵
主任事務職員	橋崎康春

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財講口伯太調査事務所

所長	後藤篤治
主任調査員	西川　徹
調査員	宮石雄士
整理員	杉田千津子

○調査指導　鳥取県教育委員会文化課　鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　会見町教育委員会　会見町鶴田部落

主な発掘作業従事者　（敬称略、五十音順）

秋里登志子	安藤伸一	生田忠徳	入江龍三	入沢沢子	遠藤　傳
木下恒代	小谷敏子	澤田昭義	澤田末子	柴田才知	杉原　功
妹尾貴美江	田中重子	田邊藤一	西脇りよ	野口勝子	野口キヨノ
野口辰枝	野口文恵	野口ほなみ	野口百合子	秦　美香	東　都枝
干村澄子	松下和枝	三上興蔵	山崎　博	山下　操	山科牧子
山中敏朗					

整理作業従事者　（敬称略、五十音順）

表　明美	清水房子	厨子彰子	南條孝子

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取県

鳥取県は、本州の西部、中国地方の北東部に位置する。東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県とそれぞれ接し、北は日本海に面している。中国地方は、標高1200mを越える山々を擁する中国山地を隔てて、瀬戸内海に面する山陽地方と、日本海に面する山陰地方に分けられ、特に冬季の気候環境に大きな違いがみられる。晴れの日が多く雪のほとんど降らない山陽地方に対し、山陰地方では、どんよりとした曇り空が続き雪がかなり積もる。鳥取県は、このような山陰地方に属している。

鳥取県の県域は、東西126km、南北61.85km、面積3,506.96㎢で、日本全体の約１％を占める。県内は、鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に大きく分けられる。各地域とも地勢は山がちであり、山地が県総面積の86.3％を占める。それぞれの地域には、県下を代表する三大河川である千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）が流れ、その下流域には、鳥取平野（東部）、倉吉・北条・羽合平野（中部）、米子平野（西部）が発達している。各平野の海岸線には、全国的にも有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

人々の生活領域は、山間の谷奥平野と海岸に開けた沖積平野に展開している。鳥取平野には、江戸時代に鳥取池田藩三十二万五千石の城下町として発展し、現在県庁所在地である鳥取市が位置する。天神川中流域には、かつての律令時代には「伯耆国」の国府が置かれていた倉吉市が位置している。米子平野には、「山陰の商都」と呼ばれ商業の町として発展してきた米子市が位置し、現在も交通の要所として発展している。米子市の北西に延びる弓が浜半島の突端部には、国内有数の漁業基地である境港市が位置している。

現在鳥取県は、前述した４市を中心として39市町村により構成されている。人口は、615,408人（平成８年12月１日現在）と47都道府県で最少であるが、自然の多い美しい景観を残している。

会見町

会見町は、鳥取県の最西端にある西伯郡の西部に位置し、東は岸本町、西は西伯町、南は日野郡溝口町、北は米子市に接している。東・西・南の三方を、手間山・滝ケ谷山・栗津山・高塚山・越敷山などの標高200～300m級の低い山地に囲まれ、傾斜が緩やかな東部は果樹園や畑地が多い。南部の山々を源とする小松谷川や同川支流

挿図２　遺跡位置図

の朝鍋川が町の中央部を北流して沖積平野を形成し、おもに水田として利用されている。現在当町の基幹産業は農業であり、特に富有柿は富有の里として町の名を県内外に知らしめている。そして商工業の振興策がはかられてきていると同時に、岸本町・溝口町にまたがる南東部の県営フラワーパーク（平成11年開園予定）を核とした観光振興策がはかれ、それに伴い道路整備が急がれている。現在主要道路は町内北部で交錯しているが、道路整備完了後にはさらに周辺市町村との交通の利便性は高まるであろう。そして諸木・天万地区には住宅用地が造成されており、さらに米子市近郊の住宅地区としての役割を果たしていくことが期待されている。同町は、面積30.95㎢、人口は4,062人（平成９年１月１日現在）である。

調査地域

調査地域は、県道溝口伯太線沿いの会見町と溝口町の町境付近の高塚山北東麓で、日野川左岸の台地上に位置している。

鵜田墓ノ上遺跡は標高200m付近に、鵜田大道端遺跡は標高200m付近に、鵜田中峯山遺跡は標高190m付近に位置する。

第２節　歴史的環境

旧石器時代　会見町域に限らず、鳥取県内には旧石器時代の遺構とされるものは確認されていないが、大山山麓一帯を中心としていくつかの旧石器が発見されている。淀江町小波出土の東山・杉久保型系統の黒曜石製ナイフ型石器、米子市泉中峰遺跡出土の玉髓製ナイフ型石器、溝口町長山馬籠遺跡(65)出土の細石刃様の石器などが発見されている。旧石器時代～縄文時代草創期とされる有舌尖頭器は、黒曜石製のものが淀江町中西尾から、サヌカイト製のものが米子市奈喜良遺跡・会見町諸木遺跡（２）・岸本町貝田原遺跡(52)・江府町山神脇遺跡などでも発見されている。

縄文時代　鳥取県内から草創期の土器は発見されていない。しかし、大山山麓の縁辺部で有舌尖頭器が出土していることを考えると、今後この時代の遺構・遺物が大山山麓を中心に発見される可能性は高い。

早期になると大山山麓を中心に押型文土器を伴う遺跡が発見されている。米子市の上福万遺跡では多くの土抗や配石墓と考えられる集石が発見されている。土器や石器も多く出土しており、早期の拠点的な遺跡となっている。尾高御建山遺跡や泉前田遺跡からも若干の押型文土器が出土している。また、溝口町の井後草里遺跡では県内では珍しい撚糸文を施した尖り底の深鉢が出土した。

前期になると遺跡も増えてくる。前期から中期を中心とする米子市の目久美遺跡からはドングリを蓄えた多くの貯蔵穴が検出されている。溝口町の長山馬籠遺跡(65)では多くの土抗や集石とともに県内では出土例の少ない竪穴住居跡が検出されており、近接する下山南通遺跡(61)からも土抗や集石が見つかった。

中期の遺跡としては岸本町の林ケ原遺跡(56)で遺体を土器片で覆った土壙墓が見つかっている。

後・晩期になると再び遺跡の数も増えてくる。会見町では田住地区の圃場整備に際して晩期の土器に伴って山陰地方で唯一の人面土器が出土しており、口朝金遺跡(14)では多くの後・晩期の土器とともに完形に近い注口土器が出土している。溝口町では井後草里遺跡から貯蔵穴や炉跡が見つかっている。調査地の周辺地域では、溝口町の字代横平遺跡(77)で貯蔵穴が検出され、三部野遺跡(79)では突帯文土器が出土している。また、この時期の狩猟用の落し穴と考えられている土抗が青木遺跡・越敷山遺跡群(13)をはじめ小町第１遺跡(44)・田住松尾平遺跡(10)・鵜田荒神ノ峯遺跡(25)等の丘陵上の遺跡で数多く検出されている。

弥生時代　弥生時代になると遺跡の数も多くなる。

前期の遺跡には、米子市の目久美遺跡や会見町の諸木遺跡（２）・口朝金遺跡(14)が挙げられる。目久美遺跡は前期から中期にかけての低湿地遺跡であり、３層の水田跡と多くの木製農具が見つかった。口朝金遺跡(14)でも水田跡が検出され、その構造が近年までの谷間水田と同じであったことが注目される。諸木遺跡（２）では全体が明らかではないが幅１～２ｍの溝による環濠らしき遺構が検出された。またこの時期の環濠は天王原遺跡(18)・宮尾遺跡でも検出されている。

中期には米子市の青木遺跡や福市遺跡、会見町の天王原遺跡(18)・越敷山遺跡群(13)、岸本町の貝田原遺跡(52)・林ケ原遺跡(56)、溝口町の下山南通遺跡(61)・長山馬籠遺跡(65)などが現れる。青木遺跡・福市遺跡は後期以降も続く大規模集落である。天王原遺跡(18)や越敷山遺跡群(13)では多くの竪穴住居跡や土坑が見つかった。貝田原遺跡(52)・林ケ原遺跡(56)・下山南通遺跡(61)・長山馬籠遺跡(65)などでも数棟から十数棟の竪穴住居跡などが検出されている。会見町にはこのほかにも宮前遺跡（３）・浅井土居敷遺跡（４）・鵜田合清水遺跡(28)などの集落遺跡がある。

後期には米子市の池ノ内遺跡・尾高浅山遺跡・日下寺山遺跡などがある。池ノ内遺跡からは古墳時代後期までの５面の水田層が検出された。尾高浅山遺跡は一部に三重の環濠がめぐる集落と四隅突出型墳丘墓が近接して存在する遺跡である。また日下寺山遺跡でも、環濠をもつ集落と四隅突出型墳丘墓を含む弥生から古墳時代の墳墓群が近接している。会見町でも朝金小チャ遺跡(16)で四隅突出型墳丘墓と考えられる遺構が検出されている。

古墳時代　会見町域における前期古墳の様相は明確でない。

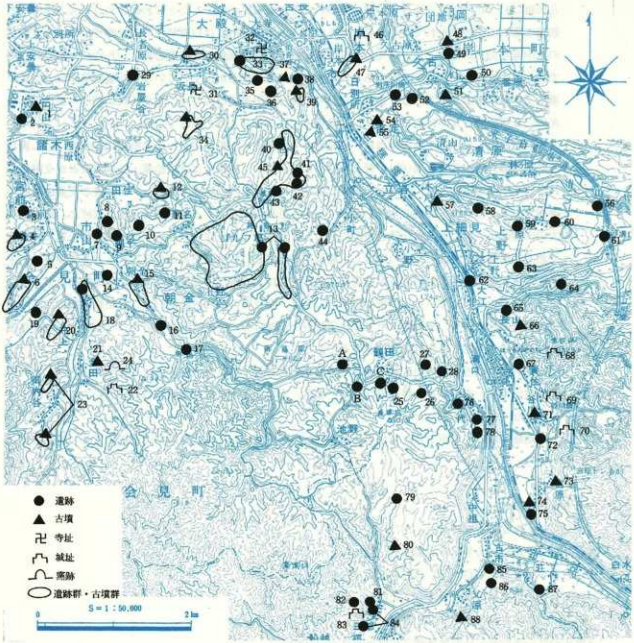
前期古墳としては会見町の普段寺１・２号墳が特筆される。普段寺１号墳は墳長約23mの小型の前方後方墳である。正式な調査は行われていないが三角縁唐草文帯二神二獣鏡が出土したことが知られている。また、１辺約21mの方墳である普段寺２号墳からも三角縁四神四獣鏡が出土しており、両古墳とも規模はあまり大きくないが、その被葬者は西伯耆において大きな勢力を持った首長であった事がわかる。

中期になると会見町では三崎殿山古墳・後塔山古墳（１）・浅井11号墳（４）などが、岸本町では吉定１号墳(55)などが築造される。三崎殿山古墳は全長約108mを測り、県下でも屈指の規模を誇る前方後円墳である。埋葬主体などは不明であるが円筒埴輪が採集されている。後塔山古墳（１）は全長約55mの前方後円墳である。埋葬主体などは不明であるが円筒埴輪や２個体の人物埴輪などが出土している。浅井11号墳（４）は全長約40mの前方後円墳であり、後円部から画文帯環状乳四神四獣鏡が出土している。吉定１号墳(55)は径約10mの円墳である。左片袖式の横穴式石室は割石小口積みであり、横穴式石室受容期を考えるうえで重要な古墳である。

後期になると多くの群集墳が形成される。会見町の朝金古墳群(15)・井上古墳群(20)・田住古墳群(12)・高塚古墳群（６）・御内谷古墳群(23)・金田古墳群(21)、岸本町の長者原古墳群(30)・坂長古墳群(34)・越敷山古墳群(45)・岸本古墳群(47)、溝口町の宮原神社古墳群(74)・長山古墳群(66)などである。これらの古墳群に属する古墳は径が10m前後の小規模なものがほとんどであり、６～７世紀にかけて築造されたと考えられる。

歴史時代　律令制の施行によって、現在の鳥取県域は西側の伯耆国と東側の因幡国という２つの国に編成される。伯耆国は６郡よりなるが、現在の会見町域は会見郡に該当する。会見郡衙は、圃場整備に伴って調査が行われ大型の掘立柱建物群と炭化米が見つかった岸本町の長者屋敷遺跡(29)であろうと考えられている。

白鳳時代になると寺院の建立が始まる。会見町内でこの時期の寺院跡は見つかっていないが、金田



A．鵜田墓ノ上遺跡
B．鵜田大道端遺跡
C．鵜田中峯山遺跡
1．後塔山古墳
2．諸木遺跡
3．宮前遺跡
4．浅井古墳群
5．浅井上居敷遺跡
6．高郷古墳群
7．田住第８遺跡
8．田住楯川遺跡
9．朝金第２遺跡
10．田住松尾平遺跡
11．田住滝山遺跡
12．田住古墳群
13．越敷山遺跡群
14．口朝金遺跡
15．朝金古墳群
16．朝金小寺ヤ遺跡
17．朝金天田遺跡
18．天王原遺跡
19．高部根小松遺跡
20．井上古墳群
21．金田古墳群
22．小松城
23．御内谷古墳群
24．金田瓦窯跡
25．鵜田荒神ノ峯遺跡
26．鵜田諸ケ谷遺跡
27．鵜田東山遺跡
28．鵜田合清水遺跡
29．長者屋敷遺跡
30．長者原古墳群
31．坂中廃寺
32．大寺廃寺
33．越敷ケ丘遺跡
34．坂長古墳群
35．坂長宮田ノ上遺跡
36．坂長第５遺跡
37．大寺原古墳群
38．越敷野原遺跡
39．越敷野原古墳群
40．坂長佛谷遺跡
41．小町越敷野原第２遺跡
42．小町越敷野原第１遺跡
43．小町石橋ノ上遺跡
44．小町第１遺跡
45．越敷山古墳群
46．岸本要害
47．岸本古墳群
48．長塚原古墳群
49．久古北田山遺跡
50．番原第１遺跡
51．久古古墳群
52．貝田原遺跡
53．久古第３遺跡
54．口別所古墳群
55．吉定古墳群
56．林ケ原遺跡
57．大平古墳群
58．大平ル原遺跡
59．大平原第１遺跡
60．大平原第２遺跡
61．下山南遺遺跡
62．上野貝塚遺跡
63．竹原遺跡
64．川平遺跡
65．長山馬瀧遺跡
66．長山古墳群
67．長山第２遺跡
68．鬼住山城
69．矢倉要害
70．谷川城
71．谷川居敷古墳
72．谷川遺跡
73．宮原屋敷古墳
74．宮原神社古墳群
75．宮原遺跡
76．宇代寺中遺跡
77．宇代横平遺跡
78．代遺跡
79．三部野遺跡
80．中ノ平古墳群
81．中山遺跡
82．長鑑寺谷遺跡
83．野上城
84．三部道の下遺跡
85．下大奈瀬遺跡
86．海蔵寺遺跡
87．長瀬の前遺跡
88．父原古墳群

挿図３　周辺遺跡分布図

瓦窯跡(24)でかつて大寺廃寺(32)創建時の軒丸瓦と軒平瓦が出土したと言われており、大寺廃寺(32)創建に際して瓦が焼かれていたものと考えられる。岸本町内には白鳳時代の大寺廃寺(32)、奈良時代の坂中廃寺(31)がある。大寺廃寺(32)の伽藍配置は変形の法起寺式で塔心礎はいわゆる三重孔の心礎であり、山陰地方では唯一の例である。なお、全国で2例しか出土していない石製鴟尾が残っており重要文化財に指定されている。また、会見町の朝金天田遺跡(17)では、奈良時代に遡る可能性がある瓦塔（瓦製塔婆）片が出土しており、山陰地方では2例目と考えられている。

中世城館としては、米子市尾高城、会見町の手間要害・小松城(22)、岸本町の岸本要害(46)、溝口町の谷川城(70)・矢倉要害(69)・野上城(83)・福島城・二部城・吉寺生松城・外構城などが文献に現れる。米子市尾高地域は山陰道と山陽側に抜ける日野道との分岐点に位置し、西伯耆の交通・流通の要衝であったため、尾高城の争奪をかけて尼子・毛利両氏がいくどもの激戦を繰り広げた。尾高城は大山山麓の入り組んだ谷と丘陵を巧みに利用し、空堀と土塁で守られた8つの主要な郭を連ねる構造である。尾高城が里城であるのに対し、籠城用の山城として手間要害が挙げられる。手間要害は、手間山全体に展開する複数の郭群から構成される非常に大規模な中世城郭であり、戦略的拠点であったことが明らかになっている。中世の居館としては、会見町の浅井居館群(5)、天王原居館群(18)の一端が調査されており、また溝口町では、宇代寺中遺跡(76)で中世段階と考えられる庇付きの大型の掘立柱建物跡が検出され注目されるところである。

江戸時代になると、吉川広家によって築城が始められていた米子城を中村一忠が完成させ、1601年米子城に中村一忠が移ると尾高城は廃城となる。その後、米子城は鳥取藩の支城として存続したが、明治になって廃城となった。

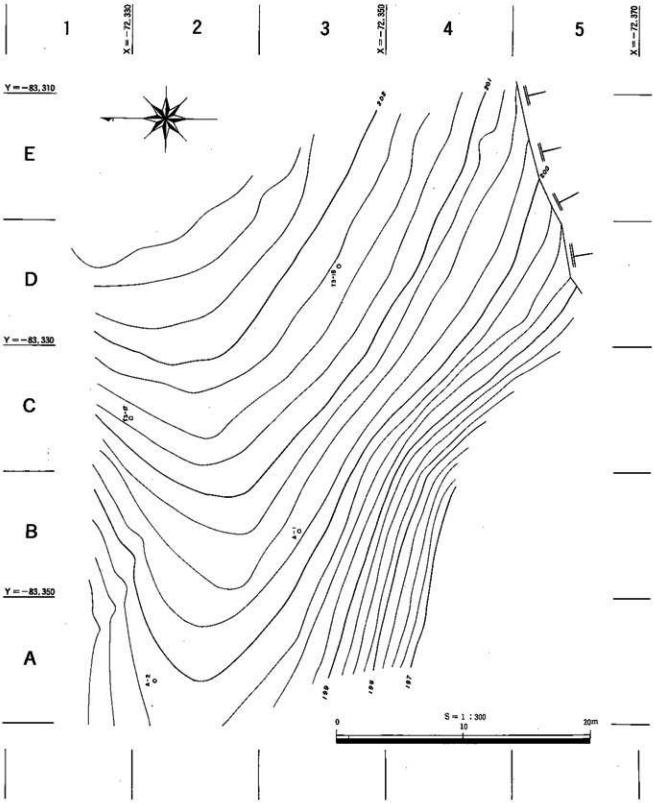
本地域周辺は、明治9年に島根県に編入されたが、明治14年には鳥取県に再編入されて現在に至っている。

（参考文献）

『会見町誌』会見町教育委員会　1973
『会見町誌　続編』会見町教育委員会　1995
『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1988
『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1987
『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター　1986
『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1989
『下山南通遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団　1986
『鵜田東山遺跡・鵜田合清水遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団　1995
『鵜田荒神ノ峯遺跡・鵜田堤ケ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇代寺中遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団　1996
『小町第1遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団　1996
『口朝金遺跡』会見町教育委員会　1988
『手間要害発掘調査報告書II』会見町教育委員会　1991
『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1993
『越敷山遺跡群1～3』会見町教育委員会・岸本町教育委員会　1992・1994
『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1996
『朝金天田遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1996
『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会　1989
『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会　1990
『代遺跡』溝口町教育委員会　1993

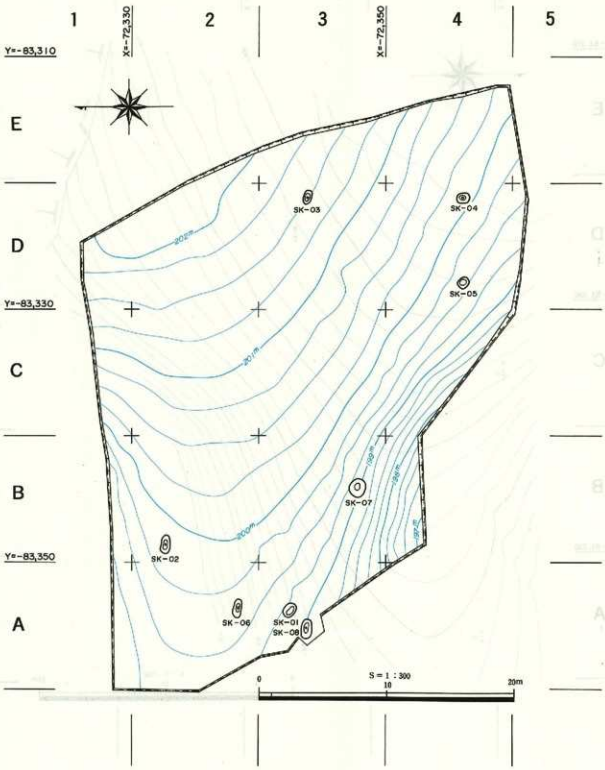
鶴田墓ノ上遺跡

第３章　鶴田墓ノ上遺跡の調査



挿図４　鶴田墓ノ上遺跡調査前地形測量図

鶴田墓ノ上遺跡は、平野部に向けて急な崖となる標高190m前後の台地状地形の西端付近にあたり、浸食によって形成された尾根状地形の頂部に位置する。検出した遺構は、縄文時代の落し穴と考えられる土坑8基である。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。



挿図5　鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図

第１節　土坑

ＳＫ－０１（挿図６　図版１）

位　置　土坑は調査地の西端近く、Ａ－３グリッド北寄りの標高199.2m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。

本遺構の北側約４mにＳＫ－０６、南西側約１mにＳＫ－０８が位置する。

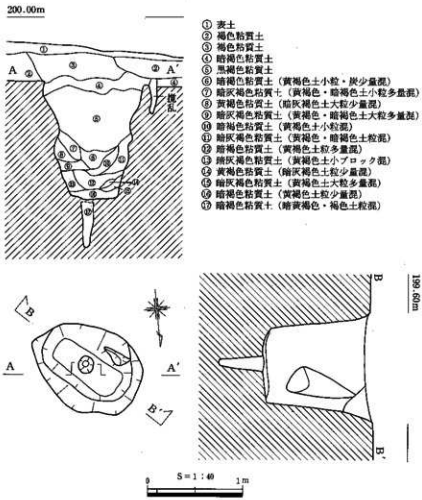
本遺構は平成７年度に会見町教育委員会が行なった試掘調査におけるトレンチ26から検出された土坑（ＳＫ－０１）[註1]と同じ土坑である。

形　態　会見町教育委員会が実施した試掘調査においては、土坑を半裁掘り下げして底面・底面ピットまで検出したように報告[註(1)]されている（会見町報告書　挿図８）。しかし、調査の結果掘り下げは不十分であることが判明した。

平面形は検出面が楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。しかし、検出面は埋土中に地山土が多く認められることから土坑肩部の土が崩落したため楕円形状になったのであり、本来の平面形は隅丸長方形を呈していたと考えられる。規模は、検出面で長軸1.18m×0.93m、短軸0.78m×0.30m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.25mを測る。

底面の中央からピットを検出した。その規模は検出面で長軸0.18m×短軸0.16m、深さ0.47mを測る。

埋　土　土坑の埋土を④～⑰層の14層に分層した。このうち、⑥層以下は地山土の粒を多少とも含む層であり、



挿図６　ＳＫ－01遺構図

特に⑧層は地山土が崩落したと考えられる層である。

埋土に枕状跡を認めることは出来なかった。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑のなかで遺物等から時期の判明した土坑は縄文時代後・晩期に位置付けられている[註(2)]ことから、同様に縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

註

(1)　「主要地方道溝口伯太線付け替え工事に伴う発掘調査」『町内遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1996

(2)　稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』1993

尾高御建山遺跡のＳＫ－39・77内出土の炭化物の炭素14年代測定結果では縄文時代後期後半に相当する値が得られている。

山田　治「尾高御建山遺跡２区の液体シンチレーションＣ14年代測定結果」

山田　治「尾高御建山遺跡３区の液体シンチレーションＣ14年代測定結果」

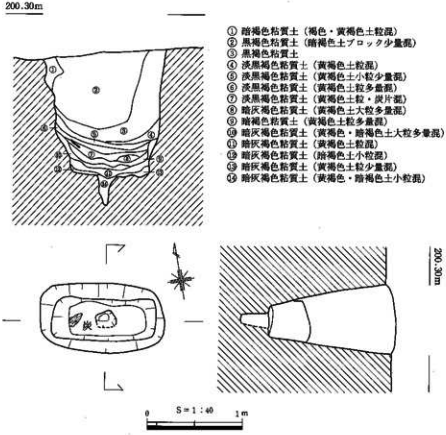
『尾高御建山遺跡　尾高古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団　1994

ＳＫ－０２（挿図７）

位　置　土坑は調査地北西側、Ｂ－２グリッド北西寄りの標高199.9m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南西側約７ｍにＳＫ－０６が位置する。



挿図７　ＳＫ－02遺構図

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.32m×短軸0.75m、底面で長軸0.87m×短軸0.33mで、短軸側はかなり狭い。残存する部分での底面までの最大の深さは1.36mを測る。

底面の中央からピットを検出した。残存部の平面形はいびつな楕円形状で、その規模は検出面で長軸0.21m×残存短軸0.13m、深さ0.31mを測る。

埋　土　埋土を14層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑭層を除く13層は上・中・下の３つのブロックに大別出来る。上層ブロックは②・③層からなり、「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の粒をほとんど含まない。中層ブロックには淡黒褐色系の土に地山土の粒が若干混じる。下層ブロックは暗灰褐色系の土に地山土の粒が大きめのものも含め多量に混じるものである。各ブロック間の地山土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えてよく、土坑掘り上げ直後は乾燥が始まるのに伴い崩落量が多く、乾燥が進行し壁面が安定するに伴い崩落量は減少していくと考えられる。よって、各ブロック間の堆積にはブロック内での堆積に比較して大きな時間差が存在したことが考えられる。

⑦層中から樹皮状の炭化物が出土した。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－０３（挿図８　図版１）

位　置　土坑は調査地東側、Ｄ－３グリッド東寄りの標高201.5m付近に位置する。

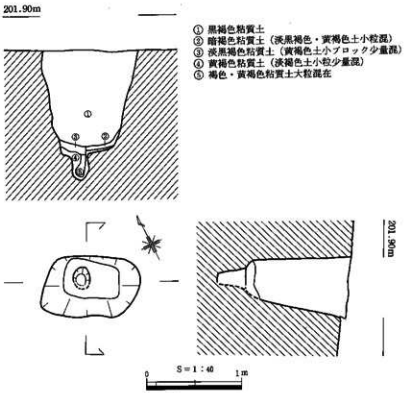
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約12mにＳＫ－０４が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、検出面ではややいびつになっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.97m×短軸0.65m、底面で長軸0.55m×短軸0.40m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.11mを測る。

底面の西寄りからピットを検出した。残存部の平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.18m×残存短軸0.17m、深さ0.31mを測る。

埋　土　埋土を５層に分層した。このうち、底面ピットの埋土を除く①～③層は大きく①層と②・③層に区別できるが、②・③層を合わせてもその土量



挿図８　ＳＫ－03遺構図

はわずかで、含まれる地山土の粒の量も多くなく、その違いは小さい。よって、両者にＳＫ－０２で考えた時間差の存在を考えるのは難しいであろう。

埋土に杭痕跡が認められた。⑤層が杭の痕跡を示すと考えられ、土坑底面にやや大きめの底面ピットを掘った後、杭を地山土とほぼ類似した④層の土によって固定したことが分かる。④層の土は土坑底面にも一部及んでおり、杭の固定を高めている。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－０４（挿図９　図版１）

位　置　土坑は調査地南東側、Ｄ－４グリッド東寄りの標高200.1m付近に位置する。

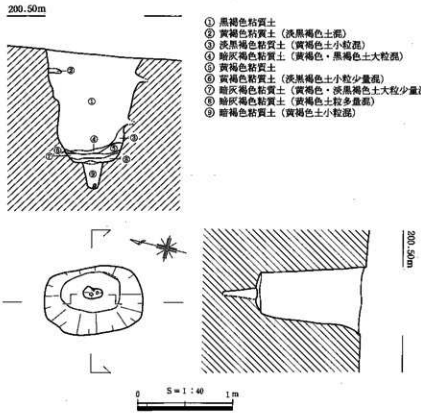
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北側約12mにＳＫ－０３が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.03m×短軸0.71m、底面で長軸0.61m×短軸0.40m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.20mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は括れた楕円形状で、その規模は検出面で長軸0.21m×短軸0.12m、深さ0.28mを測る。

埋　土　埋土を９層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑨層を除く８層は上・中・下の３つのブロックに大別出来る。上層ブロックは①層で「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の粒をほとんど含まない。中層ブロックは崩落土である⑤層を含む③～⑦層で暗褐色系の土に地山土の粒が若干混じるも



挿図９　ＳＫ－04遺構図

の。下層ブロックは灰褐色系の土に地山土の粒がきわめて多量に混じるものである。各ブロック間の地山土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えられ、各ブロック間の堆積にはブロック内での堆積に比較して大きな堆積停止期間が存在したことが推測される。

底面ピット内の埋土に杭痕跡と考えられるものが認められた。土色では区別が付かなかったが、ピットの底に残る３つの窪みから続くしまりの悪い部分がやや放射状に開きながらピットの壁に沿って上方に伸びていた。これは土層確認のため断ち割った西側にさらに存在した可能性もある。これより、大きめの底面ピットを掘り下げた後に径３cm前後の３本以上の杭を放射状に設置し、⑤層の土で杭を固定したことが分かる。同様の底面ピットが田住松尾平遺跡Ｂ区ＳＫ－１・７[註(1)]他で報告されている。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

註

（1）『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1996

ＳＫ－０５（挿図10　図版２）

位　置　土坑は調査地南東側、Ｄ－４グリッド西寄りの標高199.6m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。

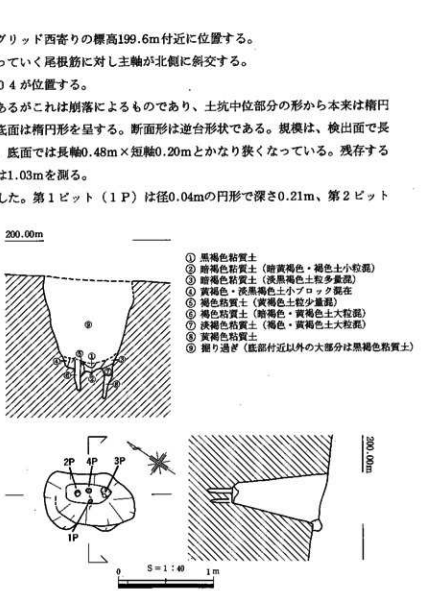
本遺構の東側約６mにＳＫ－０４が位置する。

形　態　平面形は、検出面は不整形であるがこれは崩落によるものであり、土坑中位部分の形から本来は楕円形であったことが推測される。底面は楕円形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.99m×短軸0.52mであるが、底面では長軸0.48m×短軸0.20mとかなり狭くなっている。残存する部分での底面までの最大の深さは1.03mを測る。

底面から４つのピットを検出した。第１ピット（１Ｐ）は径0.04mの円形で深さ0.21m、第２ピット（２Ｐ）は径0.06mの円形で深さ0.20m、第３ピット（３Ｐ）は長軸0.10m×短軸0.07mの楕円形状で深さ0.32m、第４ピット（４Ｐ）は径0.05mの円形で深さ0.25mを測る。

埋　土　埋土を８層に分層した。⑨部分は掘り過ぎのため土色は確実ではないが、掘り下げ時の観察では底部付近を除く大部分は黒褐色粘質土であった。①層は黒褐色粘質土で⑨部分につながる可能性が強いが、②・④・⑥・⑦層は黄褐色系土の粒が目立つもので、③層は暗褐色系の強い土である。

埋土に杭痕跡が認められた。⑥層が第２ピットの杭痕跡を示



挿図10　ＳＫ－05遺構図

し、ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。⑤層は第２ピットの杭を固定するために人為的に使われた可能性が考えられる。⑦・⑧層部分が第３ピットの杭痕跡を示す。ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。掃図中には記載できなかったが、第１ピットの埋土は上下２層に分かれ、上層は褐色粘質土（黄褐色土大粒混）、下層は黄褐色粘質土である。やはり、杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがわれた。第４ピットの埋土については充分な土色観察が出来なかったが⑥層に類似するものであり、他のピットと同じく杭を直接土坑底面に打ち込んでいると考えられるものである。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。

性　格　　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－０６（挿図11　図版２）

位　置　　土坑は調査地西側、Ａ－２グリッド南寄りの標高199.6m付近に位置する。

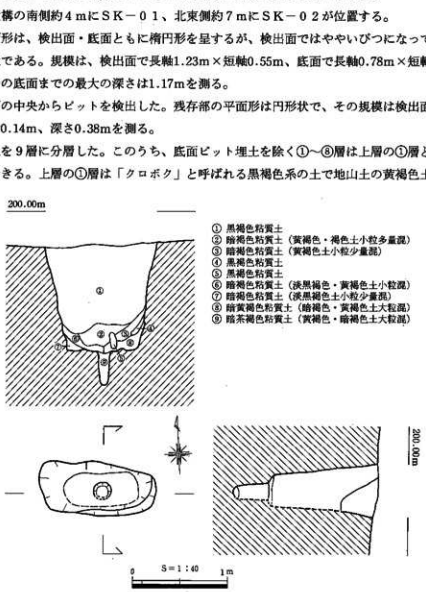
土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約４mにＳＫ－０１、北東側約７mにＳＫ－０２が位置する。

形　態　　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈するが、検出面ではややいびつになっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.23m×短軸0.55m、底面で長軸0.78m×短軸0.34m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.17mを測る。

底面の中央からピットを検出した。残存部の平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.18m×残存短軸0.14m、深さ0.38mを測る。

埋　土　　埋土を９層に分層した。このうち、底面ピット埋土を除く①～⑥層は上層の①層と下層の②～⑥層に大別できる。上層の①層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含



挿図11　ＳＫ－06遺構図

まないもの。下層の②～⑧層は暗褐色系の土に地山土の粒が混じるものである。このうち、④・⑤層は①層と同質なもの、⑧層は黄褐色土が多量に含まれるものであり、古く堆積したものほど黄褐色土が含まれる比率が高まる傾向が認められる。この地山土の黄褐色土粒の多寡は土坑壁面からの崩落量に由来すると考えられ、②～⑧層の堆積は比較的連続して進行したが、①層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが推測される。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

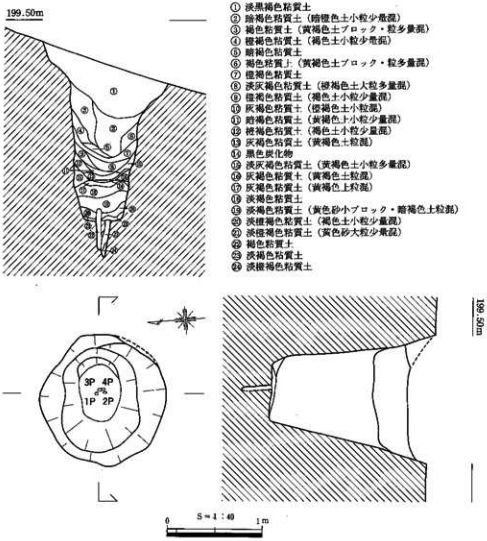
ＳＫ－０７（挿図12　図版２）

位　置　土坑は調査地南西側、Ｂ－３グリッド南寄りの標高199.2ｍ付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が北側に斜交する。

本遺構の北西側約11ｍにＳＫ－０１・０８が位置する。

形　態　平面形は、検出面は円形、底面では楕円形を呈する。検出面形は土坑肩部が崩落した結果と考えられ、本来は底面形と同じ楕円形状であったと推測される。断面形は上部が開いた漏斗状である。規模は、検



挿図12　ＳＫ－07遺構図

出面で長軸1.40m×短軸1.34m、底面で長軸0.60m×短軸0.43m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.92mを測る。

底面の中央から集中する4つのピットを検出した。各ピットの平面形は楕円形状であり、その規模は第1ピット（1P）が径約0.04mで深さ0.30m、第2ピット（2P）も径約0.04mで深さ0.35m、第3ピット（3P）は径約0.04mの円形状で深さ約0.32m、第4ピット（4P）は長軸0.04m×短軸0.03mの楕円形状で深さは0.30m前後を測る。なお、底面ピット杭は土層の杭痕跡や底面ピットの軸方向から上方がやや開き気味であったと考えられる。

埋　土　埋土を24層に分層した。このうち、底面ピット埋土の㉒～㉔層を除く21層は上から第1～第4の4つのブロックに大別出来る。第1ブロックは①～⑥層で「クロボク」に由来すると考えられる土が中心となるものである。第2ブロックは土坑肩部の地山崩落土と考えられる⑦～⑨層である。第3ブロックは褐色系の土に地山土の粒が混じった⑩～⑲層である。第4ブロックは第2ブロックと同じく地山土に由来すると考えられ、ほとんど褐色系の土が混じらない⑳・㉑層である。これらの各ブロックの土質の違いから土坑の堆積過程を復元するならば、土坑外からは土砂の流入がほとんどなく、壁体の剥離土・粒で第4ブロックが形成され、徐々に流入を始めた遺構外の土と壁体剥離土・粒が混ざり第3ブロックを形成した。その後、⑫層で始まっていた土坑肩部の崩落が起こり、短期間に第2ブロックが形成された。そして、④層のような小規模な崩落もあったが壁体は安定状態となり、土坑外の土の流入が進行した結果第1ブロックが形成されたと考えられる。これより、第2ブロックと第3ブロックは連続する可能性が高いが、第1ブロックと第2ブロック間・第3ブロックと第4ブロック間の堆積開始には時間的な非連続が考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。㉒層が第1ピットの杭痕跡を示し、ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。㉓・㉔層が第2ピットの杭痕跡を示す。ピットの規模と埋土から杭を直接土坑底面に打ち込んでいることがうかがえる。第3・第4ピットについては充分な土層・土色観察が出来なかったが、褐色系の土であり共に杭を直接土坑底面に打ち込んでいるようである。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－０８（挿図13）

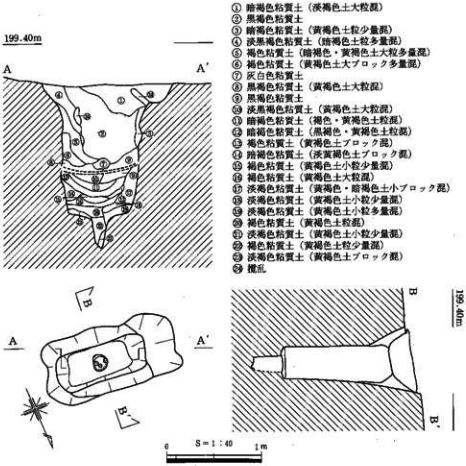
位　置　土坑は調査地西端、Ａ－３グリッド中央の標高199.0m付近に位置する。

土坑は東から西側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北東側約１mにＳＫ－０１が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は上部が開く漏斗状である。検出面では土坑肩部の西側部分が木根による攪乱で、東側部分は崩落によって本来の形とは変形していると考えられるが土坑中位付近から推測して形態は隅丸長方形として良かろう。規模は、検出面で長軸1.40m×短軸0.71m、底面で長軸0.66m×短軸0.33m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.45mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.17m×短軸0.15m、深さ0.30mを測る。底面ピット内の底面に３つの小穴を検出した。その規模は西側から順に径５cm深さ３cm、径４cm深さ２cm、径５cm深さ５cmであった。鶴田荒神ノ峯遺跡ＳＫ－０２のような底面ピット掘り下げ時の工具痕の可能性[註(1)]を否定は出来ないが、底面に比較的深く明瞭に小穴が残ることから、底面ピット内に設置された杭に由来する痕跡と考えられる。



挿図13　SK－08遺構図

埋　土　　埋土を24層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱土を除く②～㉑層は、②～④層の第１ブロック、⑤～⑦層の第２ブロック、⑧～㉑層の第３ブロックに大別できる。第１ブロックは「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの、第２ブロックは地山土の崩落に由来する黄褐色土の多いもの、第３ブロックは褐色系の土に地山土の粒が混じるものである。第３ブロックでは下層のものほど色調が薄く地山土粒が多い傾向が認められるがその差は小さく、比較的短期間に堆積が進行したことが考えられる。そして、土坑肩部が崩落して第２ブロックが形成された後は壁体が安定し、「クロボク」の流入が進んだものと考えられる。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。

性　格　　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

註

（1）『鷲田荒神ノ峯遺跡・鷲田堤ケ谷遺跡・字代横平遺跡・字代寺中遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 1996

第２節　まとめ

鷲田墓ノ上遺跡からは８基の落し穴と考えられる土坑が検出された。いずれの土坑も遺物が出土していないため厳密な時期比定はできないが、形態および埋土に類似性が認められる他の遺跡の例から縄文時代後・晩期の土坑と推測される。鳥取県内には縄文時代前期の土坑とされているもの[1]もあるが、鷲田墓ノ上遺跡周辺では明確に時期が縄文時代前期に遡る落し穴と考えられる土坑は検出されていないため、その可能性は否定できないものの

現時点では除外して考えることとする。

調査地はわずかな面積であるため土坑の配列関係をつかむことは容易ではないが、先学の研究を参考にしながら若干の考察を加えてみたい。

挿図５が鶴田墓ノ上遺跡全体遺構図である。遺構配置をみると大きく二つのグループに分けられそうである。１つは土坑の主軸が等高線に直交するもので、ＳＫ－０２・０４が該当する。ＳＫ－０２は尾根状地形の頂部に位置しており、主軸が等高線に直交すると言うよりも尾根筋に平行すると考えた方がより正しいであろう。２つめは土坑の主軸が等高線に平行するものであり、ＳＫ－０２・０４を除く６基がそれに該当する。

土坑の形態は、検出時の平面形態で分類されている例が多いようであるが、土坑上部の平面形は埋土の観察から土坑壁面の崩落があったことが推測される例も多く、厳密な形態分類の資料とするには問題がある。しかし、土坑の中位ないしは底面の形態は崩落等の影響をほとんど受けていないと考えても良いようであり、形態分類の資料としてはこの部分を対象として行うべきであろう。

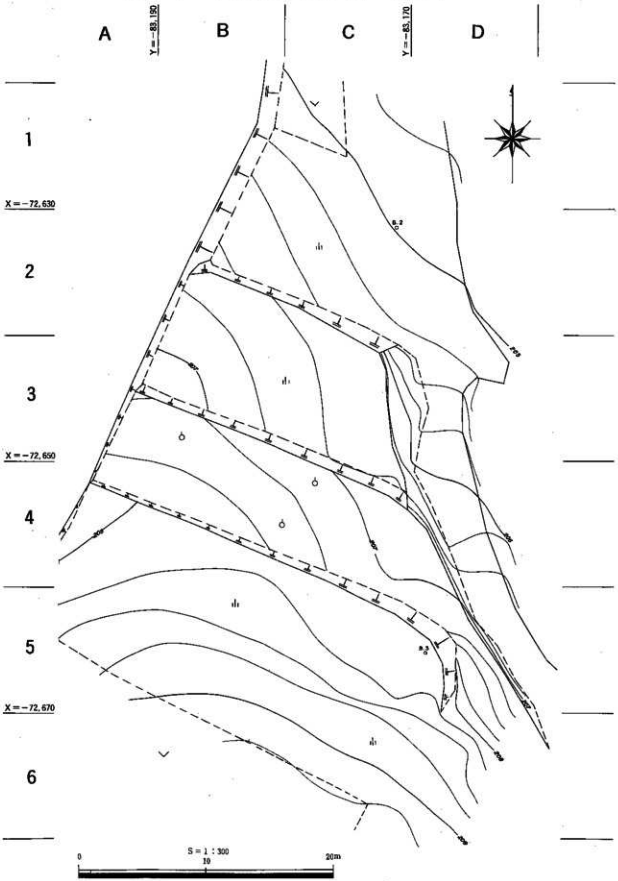
また、埋土の堆積状態を検討する重要性は別の性格が与えられている土坑の場合となんら変わることがない。しかし、落し穴とされる土坑は平面規模に比較して深さがあるため、土層観察は容易ではない。特に幅の狭い長軸を半截して断面の土層・土色を詳細に観察することはほぼ不可能と言わざるを得ず、そのような方法で得られた結果に対しても信頼性に疑問が生じる。しかし、各遺構の報告中でも若干触れたが、底部付近の土層堆積状態は土坑の埋没に関して重要な情報を持っていると考えられる。そこで、筆者の関与する調査においては土坑半截後に半截部分の平面形を測量し、その後に半截部分側を掘り拡げて十分な土層観察用のスペースを確保する手法を採用している。この手法では、完掘する以前に土坑の一部を破壊することになるが、検出面からでは手が届かないことの多い土坑底面を細心の注意を払って掘り下げることができる。さらに、「底面ピット」と呼んでいる土坑の底部中央部に存在することが多いピットの土層観察ができることは重要な意義を持つ。底面ピットの存在はこの種の土坑が落し穴と結論付けられた１つの要素でもあり、当初からその存在が注目されていたもの[2]である。鳥取県内では底部の中央部分に径10～15cm程度の１つの底面ピットが存在する例が多く、複数の底面ピットが存在する例は少ないと認識されてきた。しかし、土坑を断ち割り底面ピットの埋土ならびに形態を詳細に検討することによって、１つの底面ピット内に複数の杭を設置している例も存在することが明らかになってきた[3]。これまでは、１つの底面ピットに１つの杭が設置されていたと考えられてきたが、必ずしもそうではないことが明らかになったのである。杭のこのような設置方法は、土坑の重要な分類要素と為りうるものであり、今後これらの点についてより慎重な調査が行われることを期待したい。

註（１）『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会　1992
（２）『霧ケ丘』霧ケ丘調査団　1973
（３）『田佐松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1995
＊　参考とした報告書・文献については割愛させていただいた。

挿表２　土坑一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸－短軸)cm 検出面	規模(長軸－短軸)cm 底面	深さ(cm)	長軸方向	遺物	備考
SK－01	6	1	A－3	隅丸長方形	118－93	78－30	125	N－48°－W		落し穴
SK－02	7		B－2	隅丸長方形	132－75	87－33	136	N－80°－W		落し穴
SK－03	8	1	D－3	隅丸長方形	97－65	55－40	111	N－55°－W		落し穴
SK－04	9	1	D－4	楕円形	103－71	61－40	120	N－13°－W		落し穴
SK－05	10	2	D－4	不整形	99－52	48－20	103	N－22°－W		落し穴
SK－06	11	2	A－2	いびつな楕円形	123－55	78－34	117	N－86°－W		落し穴
SK－07	12	2	B－3	円形	140－134	60－43	192	N－86°－W		落し穴
SK－08	13		A－3	隅丸長方形	140－71	66－33	145	N－85°－W		落し穴

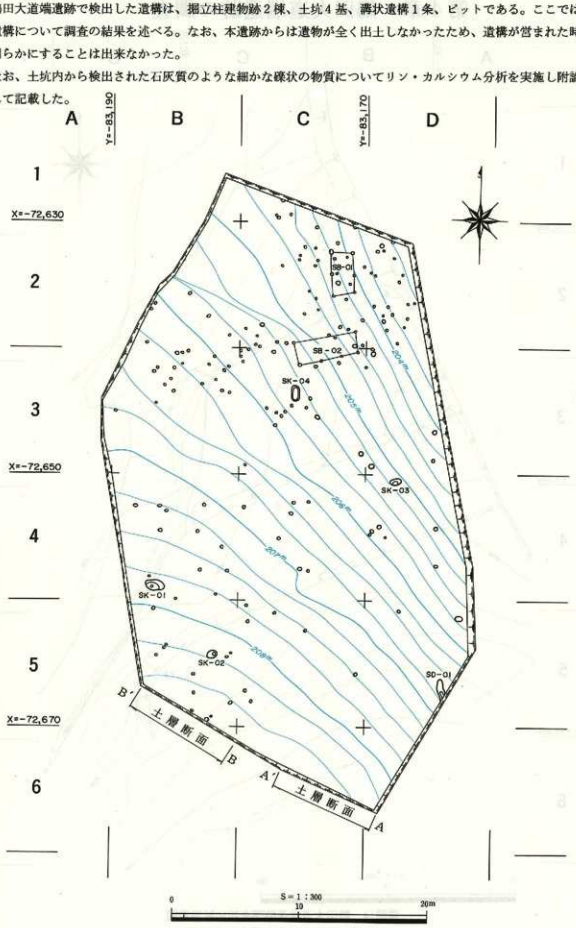
鶴田大道端遺跡



挿図14　鶴田大道端遺跡調査前地形測量図

鶴田大道端遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物跡２棟、土坑４基、溝状遺構１条、ピットである。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。なお、本遺跡からは遺物が全く出土しなかったため、遺構が営まれた時期を明らかにすることは出来なかった。

なお、土坑内から検出された石灰質のような細かな礫状の物質についてリン・カルシウム分析を実施し附論１として記載した。



挿図15　鶴田大道端遺跡全体遺構図

第１節　掘立柱建物跡

今回の調査で確認できた掘立柱建物跡は２棟であった。調査地内には多数のピットが存在しており、その中には掘立柱建物跡の柱穴となるものも含まれていると考えられるが、削平等により対応するピットが見られなかった。ここでは確実に確認できたもののみ報告する。

ＳＢ－０１（挿図16　図版３）

位　置　調査地の北東部、Ｃ－２グリッドの北東寄りで、北東側に向かって地形が下がっていく緩斜面途中の標高203.7m～204.5m付近に位置する。本遺構の南側約３mには主軸がふれるもののＳＢ－０２が位置する。

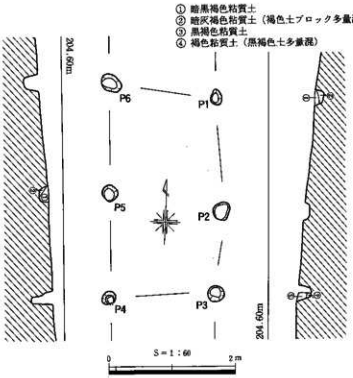
形　態　桁行２間・3.10m～3.43m、梁行１間・1.66m～1.70mを測る。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。柱穴は６個で、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（24×18－15）㎝、Ｐ２（30×26－10）㎝、Ｐ３（26×26－24）㎝、Ｐ４（24×20－34）㎝、Ｐ５（26×24－15）㎝、Ｐ６（36×27－25）㎝を測る。

柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順にＰ６－Ｐ１間まで1.82m、1.28m、1.66m、1.67m、1.76m、1.70mである。

埋　土　観察が出来た柱穴の埋土を４層に分層した。黒褐色系の埋土が基本である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　不明である。



挿図16　SB－01遺構図

ＳＢ－０２（挿図17　図版３）

位　置　調査地の北東部、Ｃ－２・３グリッドにまたがり、北東側に向けて地形が下がっていく緩斜面途中の標高204.5m～205.3m付近に位置する。本遺構の北側約３mには主軸がふれるもののＳＢ－０１が位置する。

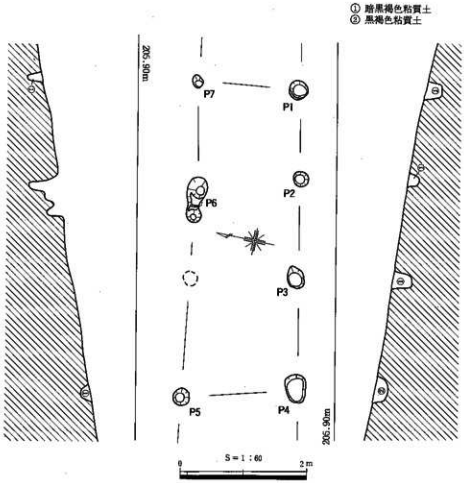
形　態　桁行３間・4.80m～5.00m、梁行１間・1.63m～1.86mを測る。主軸方向はＮ－78°－Ｅである。柱穴は７個あり、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（31×31－30）㎝、Ｐ２（25×24－20）㎝、Ｐ３（38×26－32）㎝、Ｐ４（46×34－26）㎝、Ｐ５（27×26－18）㎝、Ｐ６（50×32－47）㎝、Ｐ７（20×16－25）㎝を測る。

柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２間から順にＰ７－Ｐ１間まで1.40m、1.60m、1.80m、1.86m、3.32m、1.68m、1.63mである。

埋　土　Ｐ４およびＰ６以外の埋土は暗黒褐色粘質土、Ｐ４の埋土は黒褐色粘質土で、それぞれ単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　不明である。



挿図17　SB－02遺構図

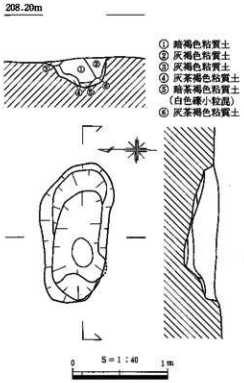
第2節　土坑

SK－01（挿図18　図版3）

位　置　調査地の南西部、B－4グリッドの南側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高207.7m付近に位置する。

形　態　平面形は、検出面が隅丸長方形、底面は不整形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は、検出面で長軸1.43m×短軸0.64m、深さ0.22mを測り、東西両方向から0.22m～0.28mの幅で緩やかなテラス部を設け、さらに長軸0.95m×短軸0.46m、底面で長軸0.30m×短軸0.21m、深さ0.11m～0.15m掘り込んでいる。検出面より、残存する部分の底面までの最大の深さは0.37mを測る。

埋　土　埋土は6層に分層できる。基本となる土は暗褐色粘質土及び灰褐色粘質土である。底面付近の埋土中に石灰質のような細かな礫状の物質が①層下部及び⑤層から検出された。この物質の含有密度はそれほ



挿図18　SK－01遺構図

ど高くはない。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　不明である。

その他　底面付近から検出された石灰質のような細かな碎状の物質について、土抗内に動物遺体が埋められていた可能性が考えられたため、①層下部及び⑤層からサンプルを採取し、リン・カルシウム分析を行った。詳細は附論１に譲るが、残念ながら当初考えていた可能性は低いという結果が出た。

ＳＫ－０２（挿図19　図版３）

位　置　調査地の南西部、Ｂ－５グリッドの東側にあり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高208.2m付近に位置する。

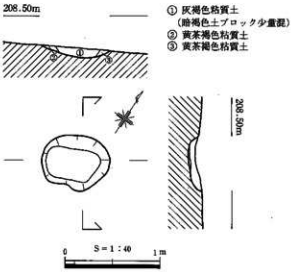
形　態　平面形は、検出面が楕円形、底面はいびつな隅丸方形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.72m×短軸0.52m、底面で長軸0.55m×短軸0.33m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.15mを測る。

埋　土　埋土は３層に分層できる。基本となる土は灰褐色粘質土である。埋土には流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　不明である。



挿図19　ＳＫ－02遺構図

ＳＫ－０３（挿図20　図版４）

位　置　調査地の東部、Ｄ－４グリッドの北西側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高205.2m付近に位置する。

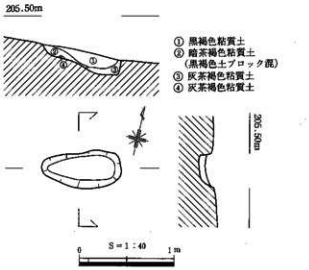
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈するが、底面はやや不整である。断面形はいびつな逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.85m×短軸0.35m、底面で長軸0.75m×短軸0.25m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.35mを測る。

埋　土　埋土は４層に分層できる。基本となる土は黒褐色粘質土である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　不明である。



挿図20　ＳＫ－03遺構図

ＳＫ－０４（挿図21　図版４）

位　置　調査地の中央部北側、Ｃ－３グリッドの中央北寄り、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく丘陵上の標高205.6m付近に位置する。北側約２mにはＳＢ－０２がある。

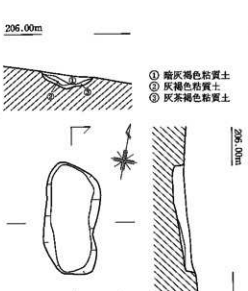
形　態　平面形は、検出面・底面ともにいびつな隅丸長方形を呈し、断面形はいびつな逆台形状である。規模は、検出面で長軸1.18m×短軸0.53m、底面で長軸1.13m×短軸0.38m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.25mを測る。

埋　土　埋土は３層に分層できる。基本となる土は灰褐色系の土である。埋土には流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　不明である。



挿図21　SK－04遺構図

第３節　溝状遺構

今回の調査で検出できた溝状遺構は１条であった。

ＳＤ－０１（挿図22　図版４）

位　置　調査地の南東部、Ｄ－５グリッドの南東側にあり、緩やかに北東側に向けて地形が下がっていく標高206.7m付近に位置する。

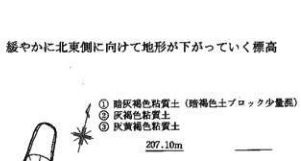
形　態　溝の形態は不整形であり、南東側は調査地外に続いている。検出規模は、全長1.52m、幅は0.30m～0.56m、深さは残存部で最大0.25mを測る。溝の走向はＮ－46°－WからＮ－Ｓ方向に屈曲する。

埋　土　埋土は３層に分層できる。堆積状況から、流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　不明である。



挿図22　SD－01遺構図

第４節　ピット

調査地内より総計154個のピットを検出した。全体的に調査地内に点在しているものの、その多くがＢ－４グリッドの北東部から地形が下がる方向に沿って群をなすように集中して存在している。

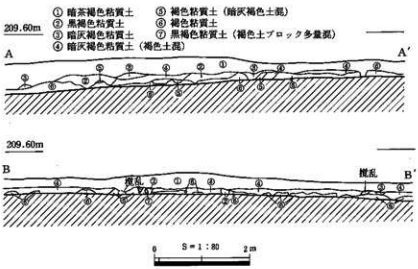
ピットの規模は比較的小さいものが多く、最大のもので径42cmのものから、最小のもので径12cmを測る。概ね径20cm前後である。ピットの埋土はすべて単層で、その多くが暗黒褐色粘質土ないしは暗褐色粘質土である。柱根を持つものはなかった。

検出できた多数のピットの内、いくつかは掘立柱建物跡の柱穴として報告した。そのほかにも掘立柱建物に伴うピットが含まれていることも考えられるが、互いに対応するピットが見られず、今回の調査で確認できたのは掘立柱建物跡２棟にとどまった。

ピット内より遺物は出土しなかった。

第５節　まとめ

鶴田大道端遺跡は、会見町と溝口町の町境にそびえる高塚山（標高301.0m）の裾野で、小高い丘陵が形成されている緩やかな傾斜をもつ尾根上に立地する遺跡である。今回の調査では、掘立柱建物跡２棟、土坑４基、溝状遺構１条、ピットの存在が確認できたが、遺物は全く出土しなかった。よってそれぞれの遺構の時期は特定できないが、これらは埋土の性質から時間差が存在する可能性が考えられる。



挿図23　南壁東西土層断面図

掘立柱建物跡およびピット、そしてＳＫ－０３は黒褐色系の埋土を基本としており、ＳＫ－０１・０２・０４及びＳＤ－０１は暗褐色土あるいは灰褐色土系の埋土が基本である。

調査地の南壁東西土層断面図（挿図23）を見ると、①層はしまりの悪い暗茶褐色粘質土であり、鶴田周辺で見られる黒褐色粘質土は部分的にしか認められない。調査開始以前、本遺跡一帯は畑地として利用されており、これが耕土であることがわかる。しかし、調査地北側の土層断面は挿図に入れていないが、その断面状況は上から耕土、客土、黒褐色粘質土という様相を呈している。すなわち調査地内も周辺の例にもれず、黒褐色粘質土が畑地造成以前に堆積[註(1)]していたことが窺える。ＳＫ－０１・０２・０４はいわゆる地山と考えられる層まで掘り下げた後に、さらにサブトレンチを設定し検出した。これらは埋土に黒褐色系の土を含んでおらず、そして各遺構は黒褐色粘質土をもつものともたないものに二分されることから、本遺跡の場合、黒褐色系の埋土をもつ遺構よりも暗褐色土あるいは灰褐色土系の埋土をもつ遺構の方が時期が遡ると考えられる。以上のことは、情報が限られているためその可能性が指摘できるということにとどめざるをえない。

註

（１）本遺跡から南西約100mの地点で、同じ丘陵上に池野中峯山遺跡が位置する。この遺跡の土層断面は本遺跡と類似した断面状況を呈している。

『池野中峯山遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会　1993

挿表３　掘立柱建物跡一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	桁×梁（間）	規模（桁）（m）		規模（梁）（m）		主軸方向	遺物	時期
SB−01	16	3	C−2	2×1	3.4	3.1	1.7	1.6	N−10°−W		
SB−02	17	3	C−2・3	3×1	5.0	4.8	1.8	1.6	N−78°−E		

挿表 4　土坑一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸－短軸)cm 検出面	規模(長軸－短軸)cm 底面	深さ(cm)	長軸方向	遺物	備考
SK－01	18	3	B－4	隅丸長方形	143－64	95－46	37	N－88°－E		
SK－02	19	3	B－5	楕円形	72－52	55－33	15	N－57°－E		
SK－03	20	4	D－4	楕円形	85－35	75－25	35	N－76°－E		
SK－04	21	4	C－3	隅丸長方形	118－53	113－38	25	N－10°－W		

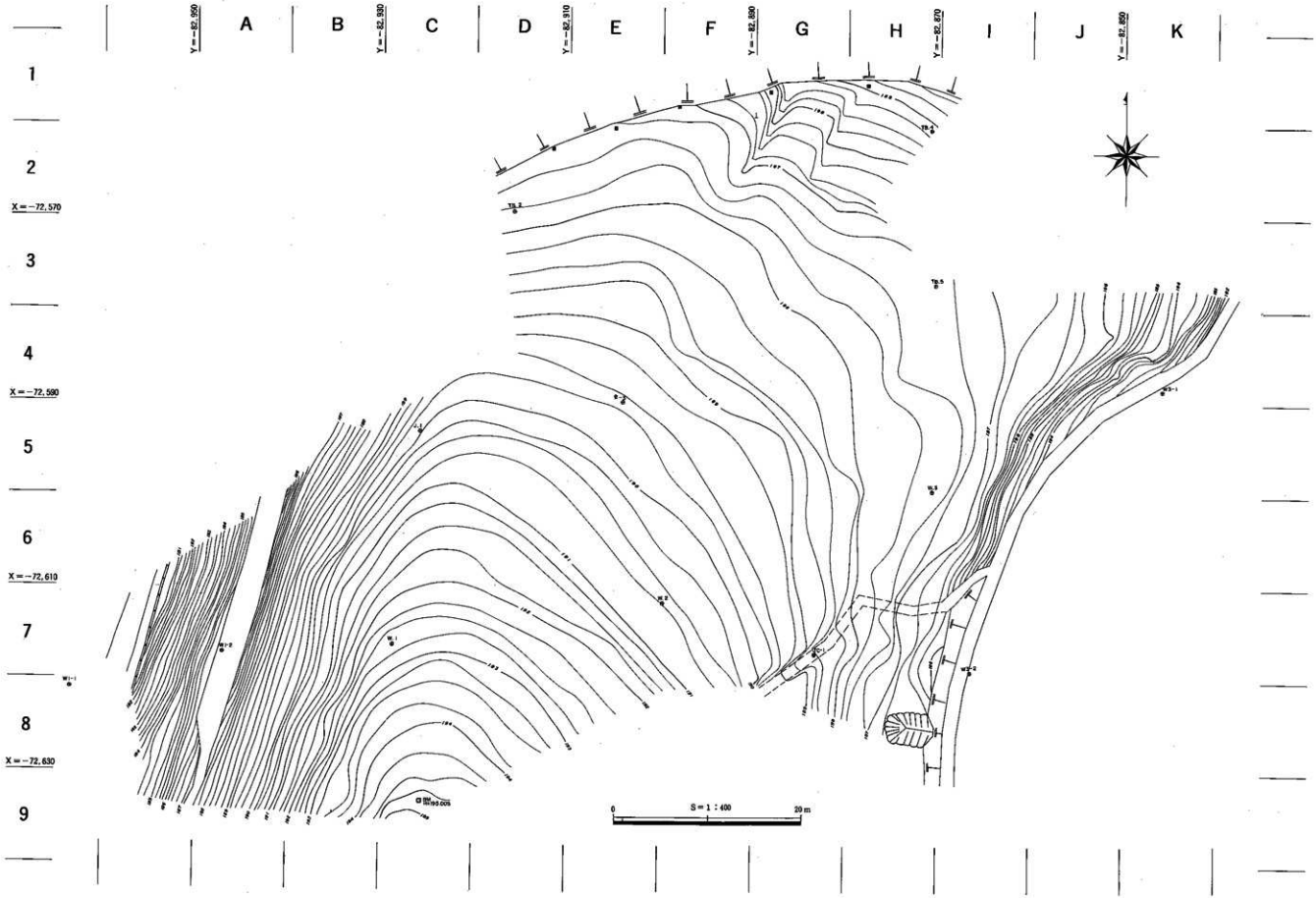
挿表 5　ピット一覧表

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土色・土質	柱根有無	備考
1	B－2	22×16－18	1	暗灰褐色粘質土	×	
2	B－2	17×16－24	1	暗褐色粘質土（褐色土小粒多量混）	×	
3	B－2	19×18－27	1	暗黒褐色粘質土	×	
4	B－2	13×13－14	1	暗褐色粘質土	×	
5	B－2	18×11－17	1	暗褐色粘質土	×	
6	B－2	17×14－31	1	暗黒褐色粘質土	×	
7	B－3	18×13－17	1	暗褐色粘質土	×	
8	B－3	13×13－16	1	暗褐色粘質土	×	
9	B－3	19×17－21	1	暗褐色粘質土	×	
10	B－3	19×18－14	1	暗褐色粘質土（褐色土ブロック少量混）	×	
11	B－3	22×17－17	1	暗褐色粘質土	×	
12	B－3	18×16－10	1	暗黒褐色粘質土	×	
13	B－3	12×12－13	1	暗褐色粘質土	×	
14	B－3	17×15－14	1	暗褐色粘質土	×	
15	B－3	19×16－15	1	暗褐色粘質土	×	
16	B－3	18×16－23	1	暗褐色粘質土	×	
17	B－3	15×13－11	1	暗褐色粘質土	×	
18	B－3	17×14－9	1	暗褐色粘質土	×	
19	B－3	14×13－15	1	暗褐色粘質土	×	
20	B－3	16×14－10	1	暗褐色粘質土	×	
21	B－3	20×15－19	1	暗黒褐色粘質土	×	
22	B－3	14×13－9	1	暗褐色粘質土	×	
23	B－3	17×13－11	1	暗褐色粘質土	×	
24	B－3	14×13－12	1	暗褐色粘質土	×	
25	B－3	16×14－10	1	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
26	B－3	12×12－14	1	暗褐色粘質土	×	
27	B－3	14×12－11	1	暗褐色粘質土	×	
28	B－3	24×18－18	1	暗黒褐色粘質土	×	
29	B－4	16×12－15	1	暗褐色粘質土	×	
30	B－4	19×17－15	1	暗褐色粘質土	×	
31	B－4	19×16－15	1	暗褐色粘質土	×	
32	B－4	16×15－9	1	暗黒褐色粘質土	×	
33	B－4	24×21－19	1	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
34	B－4	26×14－14	1	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
35	B－4	20×19－14	1	暗黒褐色粘質土	×	
36	B－4	15×12－17	1	暗黒褐色粘質土	×	
37	B－4	21×19－20	1	暗褐色粘質土	×	
38	B－4	30×27－34	1	暗黒褐色粘質土	×	
39	B－4	20×18－23	1	暗黒褐色粘質土	×	
40	B－4	15×14－18	1	暗褐色粘質土	×	
41	B－5	16×16－8	1	暗褐色粘質土	×	
42	B－5	16×15－9	1	暗黒褐色粘質土	×	

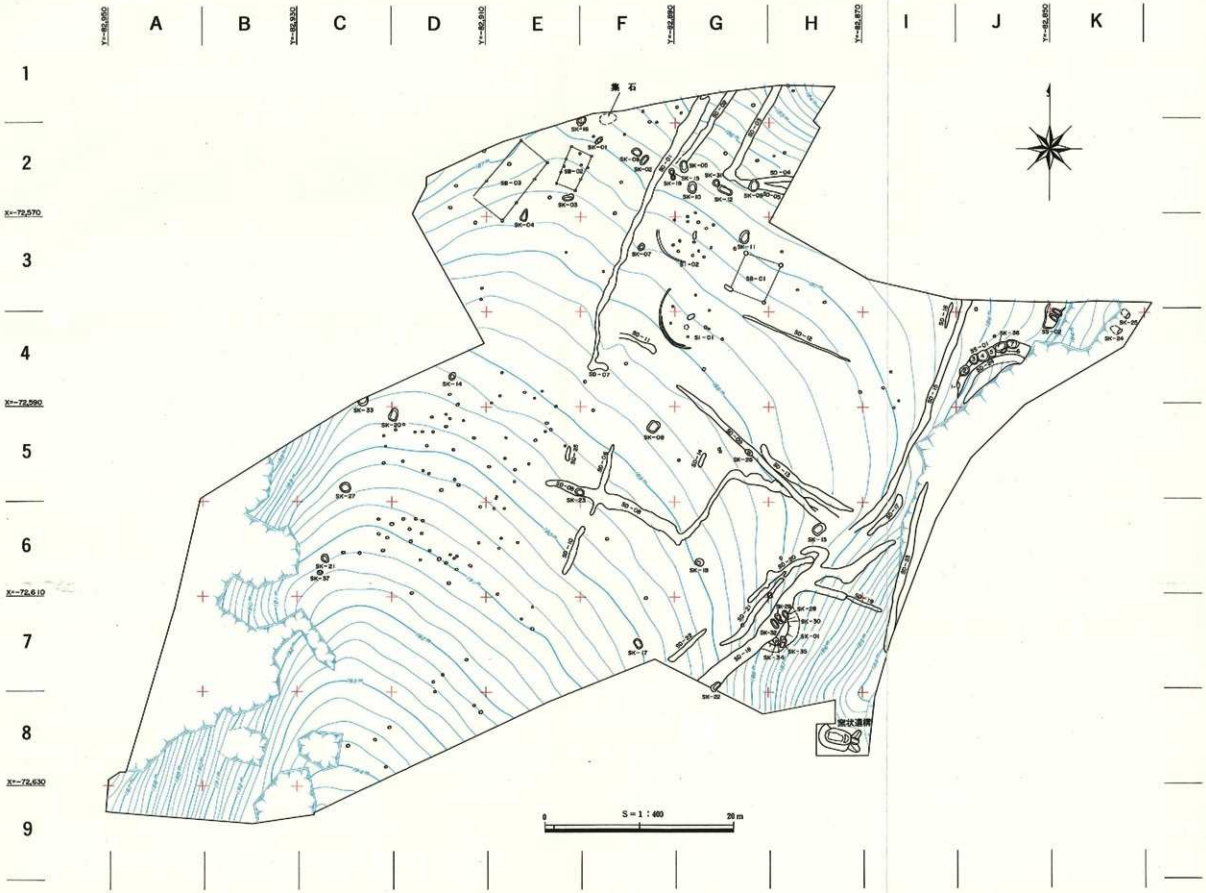
柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土　色・土　質	柱根 有無	備考
43	B－5	14×13－14	1	暗黒褐色粘質土	×	
44	B－5	17×16－18	1	暗黒褐色粘質土	×	
45	B－5	14×13－20	1	暗黒褐色粘質土	×	
46	B－5	20×16－10	1	暗黒褐色粘質土（暗褐色土混）	×	
47	B－5	29×19－16	1	暗黒褐色粘質土（褐色土小粒少量混）	×	
48	B－5	22×18－23	1	暗黒褐色粘質土（褐色土ブロック少量混）	×	
49	B－5	19×16－18	1	暗黒褐色粘質土	×	
50	B－5	14× 7 －14	1	暗褐色粘質土	×	
51	B－5	15×13－10	1	暗黒褐色粘質土	×	
52	B－5	19×11－15	1	暗黒褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
53	C－1	26×22－22	1	暗褐色粘質土	×	
54	C－1	23×20－13	1	暗褐色粘質土	×	
55	C－1	23×17－16	1	暗褐色粘質土	×	
56	C－1	18×16－21	1	暗黒褐色粘質土	×	
57	C－2	35×32－20	1	黒褐色粘質土	×	
58	C－2	28×21－20	1	暗褐色粘質土	×	
59	C－2	20×16－19	1	暗褐色粘質土	×	
60	C－2	19×16－13	1	暗褐色粘質土	×	
61	C－2	23×15－20	1	暗褐色粘質土	×	
62	C－2	19×15－20	1	暗黒褐色粘質土	×	
63	C－2	17×16－22	1	暗褐色粘質土（褐色土大ブロック混）	×	
64	C－2	33×21－30	1	暗黒褐色粘質土	×	
65	C－2	27×20－26	1	暗黒褐色粘質土	×	
66	C－2	20×19－24	1	暗褐色粘質土	×	
67	C－2	18×15－10	1	暗灰褐色粘質土	×	
68	C－2	28×23－19	1	暗褐色粘質土	×	
69	C－2	25×19－22	1	暗黒褐色粘質土	×	
70	C－2	19×17－15	1	暗褐色粘質土	×	
71	C－2	33×25－39	1	黒褐色粘質土	×	
72	C－2	22×17－22	1	暗褐色粘質土	×	
73	C－2	21×20－18	1	黒褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
74	C－2	15×13－11	1	暗灰褐色粘質土	×	
75	C－2	22×19－22	1	黒褐色粘質土	×	
76	C－2	23×18－17	1	暗褐色粘質土	×	
77	C－2	16×14－14	1	暗黒褐色粘質土（褐色土大ブロック混）	×	
78	C－2	20×19－16	1	暗黒褐色粘質土	×	
79	C－2	31×25－25	1	暗灰褐色粘質土	×	
80	C－2	24×22－34	1	黒褐色粘質土	×	
81	C－2	17×16－18	1	暗灰褐色粘質土	×	
82	C－2	16×12－11	1	暗黒褐色粘質土	×	
83	C－2	21×21－15	1	暗黒褐色粘質土	×	
84	C－2	22×20－28	1	黒褐色粘質土	×	
85	C－2	24×18－16	1	暗黒褐色粘質土	×	
86	C－2	19×18－16	1	暗灰褐色粘質土	×	
87	C－2	26×23－26	1	暗灰褐色粘質土	×	
88	C－2	33×29－51	1	暗黒褐色粘質土	×	
89	C－2	34×33－40	1	黒褐色粘質土	×	
90	C－3	16×15－15	1	暗黒褐色粘質土	×	
91	C－3	22×21－23	1	暗黒褐色粘質土	×	
92	C－3	30×26－20	1	暗灰褐色粘質土	×	
93	C－3	14×11－19	1	暗黒褐色粘質土	×	
94	C－3	30×20－27	1	黒褐色粘質土（褐色土ブロック多量混）	×	
95	C－3	29×26－25	1	暗黒褐色粘質土	×	
96	C－3	18×13－19	1	暗褐色粘質土	×	
97	C－3	21×17－21	1	黒褐色粘質土	×	
98	C－3	22×19－13	1	暗褐色粘質土	×	

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土　色・土　質	柱根有無	備考
99	C－3	18×13－18	1	暗黒褐色粘質土	×	
100	C－3	15×15－16	1	暗灰褐色粘質土	×	
101	C－3	23×17－27	1	暗褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
102	C－3	29×21－32	1	黒褐色粘質土（褐色土混）	×	
103	C－3	17×16－20	1	暗灰褐色粘質土	×	
104	C－3	41×31－32	1	黒褐色粘質土	×	
105	C－3	33×26－25	1	黒褐色粘質土	×	
106	C－3	31×27－28	1	黒褐色粘質土	×	
107	C－3	13×13－17	1	暗黒褐色粘質土	×	
108	C－4	16×14－20	1	暗黒褐色粘質土	×	
109	C－4	14×13－16	1	暗黒褐色粘質土	×	
110	C－4	22×19－15	1	暗黒褐色粘質土（褐色土小粒少量混）	×	
111	C－4	26×15－20	1	暗黒褐色粘質土	×	
112	C－4	23×20－23	1	暗黒褐色粘質土	×	
113	C－4	24×19－82	1	暗黒褐色粘質土	×	
114	C－4	19×16－20	1	暗褐色粘質土（褐色土小粒少量混）	×	
115	C－5	23×20－23	1	暗黒褐色粘質土（褐色土少量混）	×	
116	C－5	18×14－21	1	暗黒褐色粘質土（茶褐色土混）	×	
117	C－5	18×16－22	1	暗黒褐色粘質土	×	
118	C－5	16×14－14	1	暗褐色粘質土	×	
119	C－5	22×20－17	1	暗褐色粘質土	×	
120	C－5	20×12－21	1	暗黒褐色粘質土（褐色土大ブロック混）	×	
121	C－5	20×14－14	1	暗黒褐色粘質土（褐色土ブロック少量混）	×	
122	D－2	25×16－19	1	黒褐色粘質土	×	
123	D－2	28×21－17	1	黒褐色粘質土	×	
124	D－2	24×23－21	1	黒褐色粘質土	×	
125	D－2	24×21－32	1	黒褐色粘質土	×	
126	D－2	27×21－17	1	暗黒褐色粘質土	×	
127	D－2	24×21－24	1	暗褐色粘質土	×	
128	D－2	19×16－19	1	暗褐色粘質土	×	
129	D－2	19×18－11	1	暗褐色粘質土	×	
130	D－2	19×15－18	1	暗褐色粘質土	×	
131	D－2	16×14－13	1	暗褐色粘質土	×	
132	D－2	19×18－28	1	黒褐色粘質土	×	
133	D－2	22×16－20	1	暗褐色粘質土	×	
134	D－2	20×17－27	1	暗褐色粘質土	×	
135	D－2	29×20－27	1	暗黒褐色粘質土	×	
136	D－2	24×21－18	1	暗黒褐色粘質土	×	
137	D－2	32×28－39	1	暗黒褐色粘質土	×	
138	D－2	20×17－22	1	暗褐色粘質土	×	
139	D－2	23×19－21	1	暗黒褐色粘質土	×	
140	D－2	26×22－31	1	黒褐色粘質土	×	
141	D－2	23×20－22	1	暗褐色粘質土	×	
142	D－3	31×21－30	1	暗黒褐色粘質土	×	
143	D－3	32×28－16	1	黒褐色粘質土（褐色土ブロック多量混）	×	
144	D－3	23×20－15	1	暗褐色粘質土	×	
145	D－3	22×21－18	1	暗灰褐色粘質土	×	
146	D－3	34×23－30	1	黒褐色粘質土（褐色土ブロック混）	×	
147	D－4	31×24－30	1	黒褐色粘質土	×	
148	D－4	35×29－11	1	暗褐色粘質土	×	
149	D－4	18×15－21	1	暗黒褐色粘質土	×	
150	D－4	14×12－17	1	暗黒褐色粘質土	×	
151	D－4	22×15－17	1	暗黒褐色粘質土	×	
152	D－4	21×18－23	1	黒褐色粘質土	×	
153	D－4	28×20－15	1	暗黒褐色粘質土	×	
154	D－4	42×39－16	1	暗黒褐色粘質土	×	

鶴田中峯山遺跡



挿図24　鶴田中峯山遺跡調査前地形測量図



挿図25　鶴田中峯山遺跡全体遺構図

第５章　鶴田中峯山遺跡の調査

鶴田中峯山遺跡は、高塚山から放射状に伸びる尾根の１つに位置する遺跡である。河川により形成された平野部に向けて急な崖が続く標高190m前後の台地状地形の上にあり、浸食によって形成された尾根状地形の尾根節上に位置する。検出した遺構は、縄文時代の落し穴と考えられる土坑、弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、中・近世段階の土坑・土壙墓、溝状遺構、段状遺構、窯状遺構、集石遺構、ピットである。ここでは、各遺構について調査の結果を述べる。

第１節　竪穴住居跡

ＳＩ－０１（挿図26・27　図版５・13）

位　置　調査地のやや北寄り、Ｇ－４グリッドの北西部を中心とし、標高188.0m付近に位置する。

本遺構の北側約３mにＳＩ－０２、北東側約２mにＳＢ－０１が位置する。

建て替え　ＳＩ－０１には少なくとも１度の建て替えが認められる。建て替え後をＳＩ－０１Ａ、建て替え前をＳＩ－０１Ｂとした。

ＳＩ－０１Ａ

形　態　遺存状態は悪く、本来は全周していたと考えられる壁溝は西側部分でのみ検出できた。残存する壁溝から平面形は円形であったと推測される。残存部では主柱穴の端から壁溝の外側肩部までは約1.1mである。これを壁溝の遺存していない東側に適用して住居跡の規模を求めると、東西・南北方向ともに径約6.8mとなり、床面積は推定で36.2m²である。壁体はほとんど残っておらず、最も遺存状態の良い南西部で高さ８cmである。

壁溝は断面形が「Ｕ」字状を呈し、幅７～15cm、深さ３～５cmを測る。

主柱穴はＰ１～Ｐ６の６個あり、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（24×23－54）cm、Ｐ２（28×22－53）cm、Ｐ３（26×21－54）cm、Ｐ４（23×20－84）cm、Ｐ５（24×23－54）cm、Ｐ６（30×24－67）cmを測る。主柱穴は外傾して掘り込まれており、特にＰ１・Ｐ２などでその特徴が読みとれる。埋土は６個ともほぼ同じで黒褐色かやや薄い淡黒褐色の土である。

主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２から順にＰ６－Ｐ１まで2.1m・1.9m・2.3m・2.3m・1.7m・2.6mであり、対角線上に位置するＰ１－Ｐ４・Ｐ２－Ｐ５・Ｐ３－Ｐ６のそれぞれの距離は4.3m・4.2m・4.4mを測る。

中央ピットは６個の主柱穴のほぼ中央に位置するＰ７である。平面形は長方形状の不整形を呈し、その規模は（72×47－10）cmである。埋土は主柱穴埋土と共通する淡黒褐色の土である。

中央ピットの南西約60cmの位置から径約40cmの円形の焼土面を検出した。

挿図26
ＳＩ－01遺物実測図

埋　土　遺存した住居跡埋土を柱穴埋土を除いて３層に分層したが、③層は後述するＳＩ－０１Ｂの壁溝埋土であり、ＳＩ－０１Ａに伴う埋土は①・②層である。

遺　物　弥生土器の底部Po１を含む若干の土器片と石の破片が出土した。石は割れた破片であり、その表面は平滑で擦り面があるようにも見えるが明確ではない。

時　期　出土したPo１や土器は弥生土器であるが、時期を特定するにはいたらない。

ＳＩ－０１Ｂ

形　態　ＳＩ－０１Ｂは、拡張してＳＩ－０１Ａに建て替えられたと推測されるため礎体は遺存していないが壁溝が一部検出できた。壁溝はＳＩ－０１Ａの壁溝の内側約20cmに同心円を描くように位置している。断面形は浅い「Ｕ」字状を呈し、幅８～13cm、深さ４～５cmを測る。

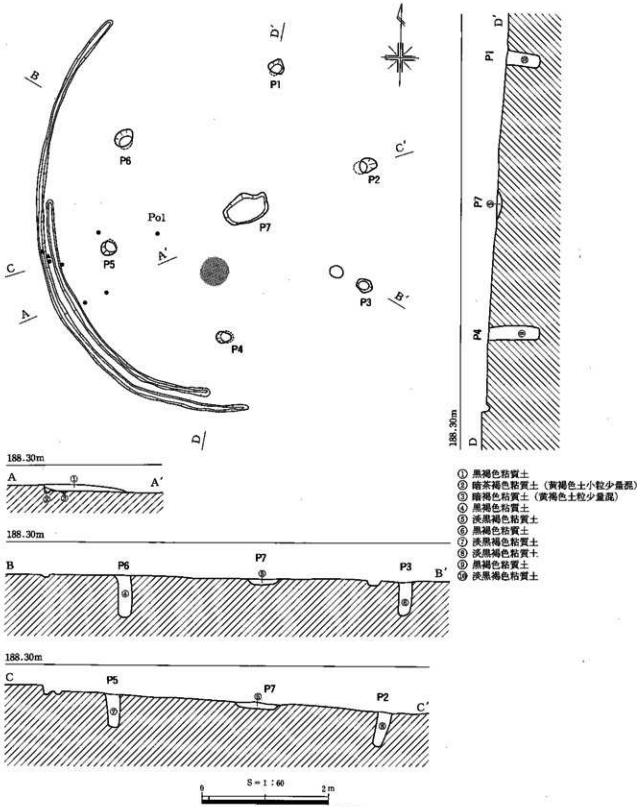
ＳＩ－０１Ｂに伴うと考えられる主柱穴は検出できなかったため、ＳＩ－０１ＡにおけるＰ１～Ｐ６

の主柱穴はＳＩ－０１Ｂの主柱穴を再使用したものと推測される。

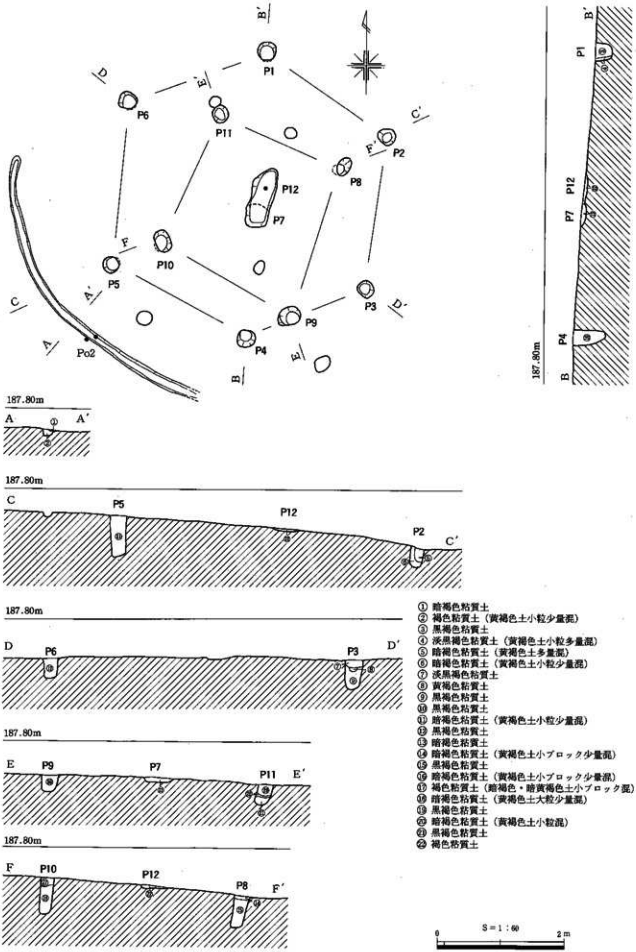
埋　土　　ＳＩ－０１Ｂに伴う埋土は、壁溝埋土の③層のみである。

遺　物　　ＳＩ－０１Ｂに伴う遺物は検出出来なかった。

時　期　　ＳＩ－０１Ａに建て替える前の住居跡と考えられるので弥生時代のものと推測されるが、時期の特定は出来ない。



挿図27　SI－01遺構図



挿図28　SI－02遺構図

ＳＩ－０２（挿図28・29　図版５・13）

位　置　調査地の北寄り、Ｇ－３グリッドの西部を中心とし、標高187.3m付近に位置する。

本遺構の南側約３mにＳＩ－０１、南東側約４mにＳＢ－０１が位置する。

建て替え　ＳＩ－０２には少なくとも１度の建て替えが認められる。建て替え後をＳＩ－０２Ａ、建て替え前をＳＩ－０２Ｂとした。

ＳＩ－０２Ａ

形　態　遺存状態は悪く、本来は全周していたと考えられる壁溝は南西側部分でのみ検出され、全体の約４分の１程度が遺存していたにすぎない。残存する壁溝から平面形は円形であったと推測される。残存部では主柱穴の端から壁溝の外側肩部までは約1.0mである。これを壁溝の遺存していない東側に適用して住居跡の規模を求めると、東西約7.1m、南北約6.8mであった。床面積は推定で37.8㎡である。壁体は全く残っていない。

壁溝は断面形が角張った「Ｕ」字状を呈し、幅９～18㎝、深さ７～11㎝を測る。

主柱穴はＰ１～Ｐ６の６個あり、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（30×28－26）㎝、Ｐ２（27×25－38）㎝、Ｐ３（27×25－50）㎝、Ｐ４（30×29－54）㎝、Ｐ５（28×26－67）㎝、Ｐ６（30×28－33）㎝を測る。主柱穴は直立するかやや外傾気味に掘り込まれている。埋土はＰ２・Ｐ５が暗褐色の土、残る４個は黒褐色かやや薄い淡黒褐色の土である。

主柱穴間距離はＰ１－Ｐ２から順にＰ６－Ｐ１まで2.4m・2.4m・2.1m・2.4m・2.6m・2.3mであり、対角線上に位置するＰ１－Ｐ４・Ｐ２－Ｐ５・Ｐ３－Ｐ６のそれぞれの距離は4.5m・4.8m・4.8mを測る。

中央ピットは６個の主柱穴のほぼ中央に位置するＰ７である。隅丸方形状を呈し、その規模は（36×34－10）㎝である。埋土は暗褐色の土である。検出時には後述するＳＩ－０２Ｂの中央ピットと切り合っていたため、明確な形態を確認することは出来なかった。

床面にはＳＩ－０１のように焼土面の存在が予想されたが、検出面からは検出が出来なかった。

埋　土　遺存した住居跡埋土を柱穴埋土を除いて２層に分層したが、②層は壁溝埋土であるためＳＩ－０２Ａに伴う埋土は①層のみである。なお住居跡床面は削平を受けている可能性があり、①層は攪乱土の可能性も残る。

遺　物　弥生土器の甕口縁部Po２が壁溝近くから出土した。

時　期　出土したPo２から弥生時代中期中葉と考えられる。

挿図29　SI－02遺物実測図

ＳＩ－０２Ｂ

形　態　ＳＩ－０２Ｂに伴うと考えられる遺構は、主柱穴と中央ピットである。検出された壁溝については、主柱穴からの距離が離れすぎるためＳＩ－０２Ａに伴うものと考えた。

ＳＩ－０２Ｂに伴うと考えられる主柱穴はＰ８～Ｐ11の４個が検出できた。それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ８（30×22－52）㎝、Ｐ９（39×28－29）㎝、Ｐ10（34×24－57）㎝、Ｐ11（27×23－33）㎝を測る。主柱穴はＰ８は外傾、Ｐ９・10は内傾して掘り込まれている。埋土はＰ９が暗褐色土、Ｐ10は褐色土と暗褐色土の２層、Ｐ８・11は黒褐色土の上に褐色土ないし暗褐色土の層が存在するもので、黒褐色土の単純層を呈するものはなかった。

主柱穴間距離はＰ８－Ｐ９から順にＰ11－Ｐ８まで2.4m・2.4m・2.2m・2.1mであり、対角線上に位置するＰ８－Ｐ10・Ｐ９－Ｐ11のそれぞれの距離は3.1m・3.4mを測る。

中央ピットは４個の主柱穴の中央北寄りに位置するＰ12である。南側をＰ７に切られており、残存部分は不定形を呈する。その規模は（62以上×39－７）㎝である。埋土は褐色土である。

埋　土　ＳＩ－０２Ｂに伴う埋土は、ピット埋土以外は検出が出来なかった。

遺　物　中央ピットのＰ12埋土中から土器小片が出土したが、図化は出来なかった。

時　期　ＳＩ－０２Ａに建て替える前の住居跡と考えられるので弥生時代中期中葉頃のものと推測されるが、出土した土器片から時期の特定は出来ない。

第２節　掘立柱建物跡

ＳＢ－０１（挿図30　図版６）

位　置　調査地の北寄り、Ｇ－３グリッドの南東部を中心とし、標高187.3m付近に位置する。

本遺構の北側約１mにＳＫ－１１、西側約４mにＳＩ－０２が位置する。

形　態　桁行１間4.3m、梁行１間3.9mの掘立柱建物跡である。柱穴は４個を検出し、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（40×38－64）cm、Ｐ２（44×31－59）cm、Ｐ３（41×35－80）cm、Ｐ４（99×44－63）cmを測るが、Ｐ３は上部が木の根によって攪乱を受けていたため上部では計測しておらず、本来は長軸・短軸ともこの計測値よりも大きかった可能性が高い。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２から順にＰ４－Ｐ１まで3.9m・4.3m・3.8m・4.1mである。柱穴は直立に掘り込まれている。Ｐ４は特異な形態を呈するが断面観察では攪乱ではなく、柱が倒れたとき柱穴の西側を破壊した痕跡と考えられる。そのため、Ｐ４の柱は東側に倒れたと推測される。

主軸はＮ－24°－Ｅである。

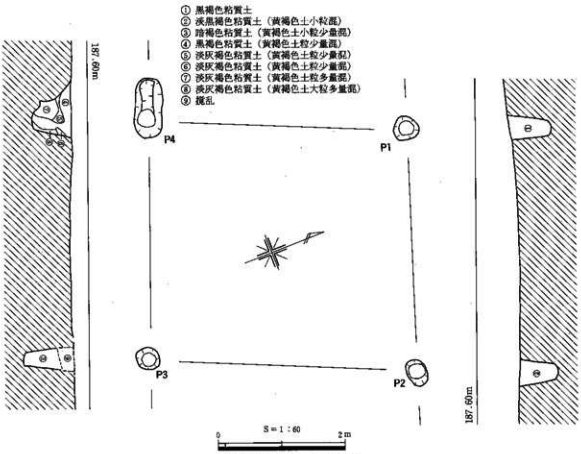
調査地内から検出した柱穴は４個であるが、北側は調査地外であるために不明であり、ＳＢ－０１がさらに北側に続く可能性もある。

埋　土　埋土はＰ１～Ｐ３がそれぞれ単独の埋土、Ｐ４は５層に分層される不定な埋土である。

遺　物　Ｐ４埋土中から４点の土器の破片が出土しているが、図化には出来なかった。

性　格　柱穴は４個とも径・深さが大きいうえに柱穴間距離も広く、特別な建物であった可能性が考えられる。

時　期　出土した土器片から弥生時代の建物跡と推測されるが、時期の特定は出来ない。



挿図30　SB－01遺構図

ＳＢ－０２（挿図31　図版６）

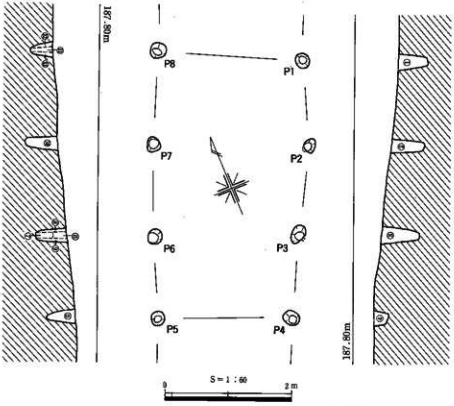
位　置　調査地の北端、Ｅ－２グリッドの東部を中心とし、標高187.4m付近に位置する。
本遺構の南側約１mにＳＫ－０３、西側約２mにＳＢ－０３が位置する。

形　態　桁行３間4.2m、梁行１間2.3mの掘立柱建物跡である。柱穴は８個で、それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（25×20－51）cm、Ｐ２（23×18－54）cm、Ｐ３（31×21－62）cm、Ｐ４（26×22－24）cm、Ｐ５（24×21－46）cm、Ｐ６（26×21－50）cm、Ｐ７（24×23－53）cm、Ｐ８（26×24－38）cmを測る。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２から順にＰ８－Ｐ１まで1.4m・1.4m・1.3m・2.1m・1.3m・1.5m・1.4m・2.3mである。柱穴はほぼ直立に掘り込まれている。
主軸はＮ－19°－Ｅである。

埋　土　埋土にはＰ６とＰ８に柱痕跡を示す層が存在した。他の柱穴はそれぞれ単独の埋土であった。

遺　物　Ｐ１・４・６・８の各埋土中から弥生土器と考えられる破片が出土しているが、図化は出来なかった。

時　期　出土した土器片から弥生時代の建物跡と推測されるが、時期の特定は出来ない。

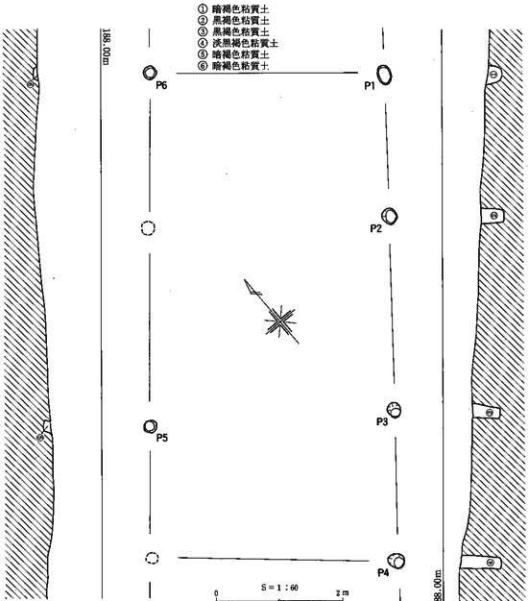


挿図31　ＳＢ－02遺構図

ＳＢ－０３（挿図32　図版６）

位　置　調査地の北端、Ｅ－２グリッドの南西部を中心とし、標高187.7m付近に位置する。
本遺構の南東側約１mにＳＫ－０４、東側約２mにＳＢ－０２が位置する。

形　態　桁行３間7.7m、梁行１間3.7mの掘立柱建物跡である。柱穴は、攪乱のために無くなったと考えられる２個を除く６個を検出した。それぞれの規模（長軸×短軸－深さ）は、Ｐ１（30×20－23）cm、Ｐ２（26×23－38）cm、Ｐ３（24×21－44）cm、Ｐ４（26×23－62）cm、Ｐ５（22×18－13）cm、Ｐ６（21×20－９）cmを測る。柱穴間距離は、Ｐ１－Ｐ２から順にＰ３－Ｐ４まで2.2m・3.1m・2.4m、Ｐ５－Ｐ６は5.6m、Ｐ６－Ｐ１は3.7mである。柱穴はほぼ直立に掘り込まれているが、Ｐ３・４は北向きにやや内傾している。



挿図32　SB－03遺構図

主軸はN－40°－Eである。

埋　土　柱穴の埋土はいずれも単独の埋土で、暗褐色土か黒褐色土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできない。

第3節　土坑・土壙墓

ＳＫ－０１（挿図33）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｆ－２グリッド北西隅の標高186.9m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北西側約３mにＳＫ－１６、南西側約２mにＳＢ－０２が位置する。

形　態　平面形は、検出面は楕円形、底面は隅丸長方形を呈し、断面形はＵ字状である。規模は、検出面で長軸0.90m×短軸0.41m、底面で長軸0.45m×短軸0.25m、残存する部分の底面までの最大の深さは0.75mを測る。この土坑は底面が狭く、底部と壁部分の境界が明確ではないという特徴が認められる。

底面から３つのピットを検出した。第１ピット（１Ｐ）は長軸0.15m×残存部の短軸0.06mの楕円形

状で深さ0.20m、第２ピット（２Ｐ）は長軸0.14m×残存部の短軸0.06mの円形状で深さ0.18m、第３ピット（３Ｐ）は長軸0.10m×短軸0.08mの楕円形を呈するが深さは不明である。

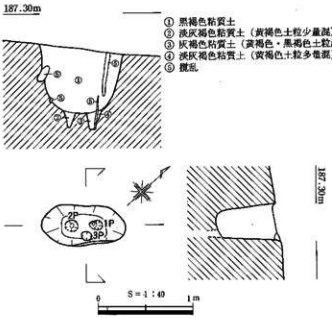
埋　土　　埋土を５層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱上を除く土坑埋土は「クロボク」と呼ばれる黒褐色粘質土の①層のみである。底面に壁体から剥落した地山土・粒が見られないことから、土坑掘り下げ終了後すぐに土坑が埋まったことが考えられる。

埋土に杭痕跡を認めることは出来なかった。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。

性　格　　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落し穴と考える。

時　期　　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。



挿図33　ＳＫ－01遺構図

ＳＫ－０２（挿図34）

位　置　　土坑は調査地の北端近く、Ｆ－２グリッド東寄りの標高186.9m付近に位置する。

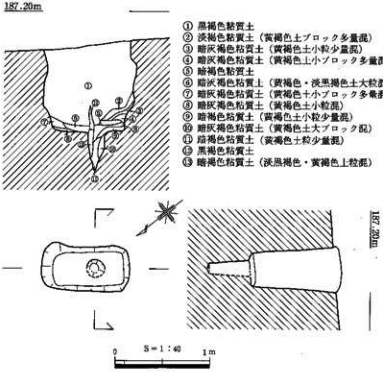
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北西側約１mにＳＫ－０９、東側約４mにはＳＫ－０５が位置する。

形　態　　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.95m×短軸0.47m、底面で長軸0.75m×短軸0.36m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.97mを測る。

底面の中央やや南西寄りからピットを検出した。平面形は円形状で、その規模は検出面で長軸0.19m×残存する部分での短軸0.11m、深さ0.42mを測る。

埋　土　　埋土を13層に分層した。このうち、底面ピットの埋土を除く①～⑨層は上層の①層と下層の②～⑨層に大別できる。上層の



挿図34　ＳＫ－02遺構図

①層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土で地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの。下層の②～⑨層は褐色系の土に黄褐色の地山土が多く混じるものである。この地山土は土坑壁体からの崩落に由来すると考えられ、②～⑨層の堆積は比較的連続して進行したが、②層堆積後には壁体の状態が安定して剝落が停止していることから、①層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが推測される。

埋土に杭痕跡が認められた。⑬・⑬層が杭痕跡を示しており、底面ピット掘り下げ後杭を設置し埋め戻して固定したことが分かる。ピットの規模に比べ杭痕跡が小さ過ぎ、その位置が一方に寄っていることから、断面には表れていないが底面ピットの中に複数の杭が設置されていた可能性も考えられる。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－０３（挿図35）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｅ－２グリッド南東隅の標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に下っていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交する。

本遺構の北側約１mにＳＢ－０２、西側約４mにＳＫ－０４が位置する。

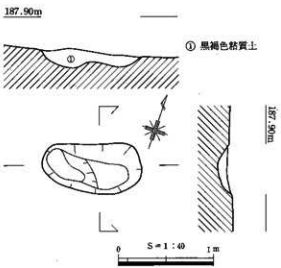
形　態　平面形は、検出面は不整な楕円形、底面は不整形を呈し、断面形は長軸方向では中央部が高くなる緩やかなW字状、短軸方向では皿状である。規模は、検出面で長軸1.07m×短軸0.54m、底面で長軸0.90m×短軸0.25m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.20mを測る。

埋　土　埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図35　SK－03遺構図

ＳＫ－０４（挿図36）

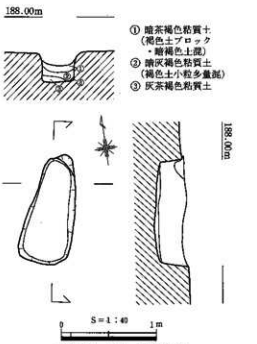
位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｅ－２・３グリッドにまたがる標高187.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の西側約１mにＳＢ－０３、東側約４mにＳＫ－０３が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長台形を呈し、断面形は方形状である。規模は、検出面で長軸1.14m×短軸0.54m、底面で長軸1.07m×短軸0.48m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.32mを測る。

埋　土　埋土は残存部を３層に分層した。黒褐色系の土は認め



挿図36　SK－04遺構図

られなかった。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑形態から土壙墓と推測する。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。

ＳＫ－０５（挿図37　図版７）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｇ－２グリッド西側の標高186.7m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

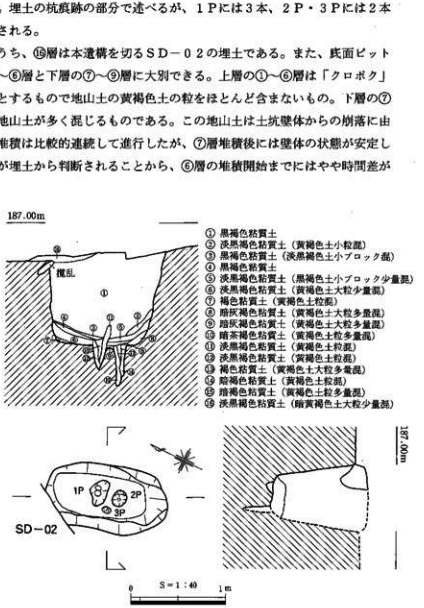
本遺構を切ってＳＤ－０２、西側約１mにＳＫ－１５・１９が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.30m×短軸0.70m、底面で長軸1.00m×短軸0.45m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.02mを測る。

底面の中央部分から３つのピットを検出した。第１ピット（１Ｐ）は長軸0.30m×短軸0.18mの不整形である。底部には２つの穴があり深さ0.31mと0.27mを測る。第２ピット（２Ｐ）は長軸0.17m×短軸0.15mの円形で深さ0.40mを測る。第３ピット（３Ｐ）は長軸0.11m×残存する部分の短軸が0.03mの楕円形状で深さ0.29mを測る。埋土の杭痕跡の部分で述べるが、１Ｐには３本、２Ｐ・３Ｐには２本ずつ杭が設置されていたと推測される。

埋　土　埋土を16層に分層した。このうち、⑯層は本遺構を切るＳＤ－０２の埋土である。また、底面ピット埋土を除く①～⑨層は上層の①～⑥層と下層の⑦～⑨層に大別できる。上層の①～⑥層は「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土を中心とするもので地山土の黄褐色土の粒をほとんど含まないもの。下層の⑦～⑨層は褐色系の土に黄褐色の地山土が多く混じるものである。この地山土は土坑壁体からの崩落に由来すると考えられ、⑦～⑨層の堆積は比較的連続して進行したが、⑦層堆積後には壁体の状態が安定して剥落がほぼ停止していることが埋土から判断されることから、⑥層の堆積開始までにはやや時間差が存在したことが考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。⑪・⑫層が１Ｐの杭痕跡を示しており、さらにその東側にも壁面に沿うようにピット底に向けて杭痕跡を示す淡黒褐色土が続いていた。よって、底面ピット掘り下げ後壁面に沿うように３本の杭を放射状に設置し、⑯層の土で埋め戻して固定したことが分かる。２Ｐでは⑭・⑮層が杭痕跡を示しており、底面ピット掘り下げ後壁面に沿うように２本の杭を設置し、⑮層の土で埋め戻して固定したことが分かる。３Ｐの埋土は褐色粘質土（黄褐色土粒多量混）で、埋土に杭痕跡を認めることはで



挿図37　SK－05遺構図

きなかったが、完掘すると南と北の壁面に沿って底部にのびる２本の杭痕跡を確認できた。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから、落し穴と考える。

時　期　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、ＳＤ－０２に切られていることからそれ以前の遺構であり、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

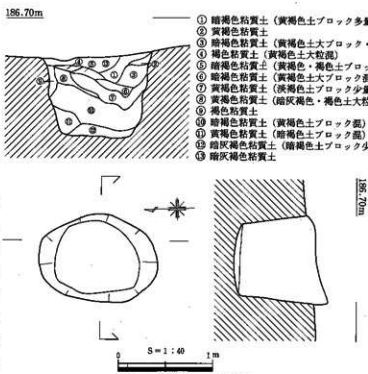
ＳＫ－０６（挿図38）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｇ－２グリッド南東寄りの標高186.3ｍ付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

ＳＤ－０５が本遺構を切り、西側約２ｍにＳＫ－１２が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は方形状である。規模は、検出面で長軸1.27ｍ×短軸0.93ｍ、底面で長軸0.91ｍ×短軸0.78ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.92ｍを測る。



挿図38　ＳＫ－06遺構図

埋　土　埋土を13層に分層した。⑬層はＳＤ－０５の埋土である。①～⑫層には黒褐色系の土は認められず、多くの層に地山土のブロックが多量に含まれる。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　土坑形態から土壙墓と推測する。

時　期　ＳＤ－０５に切られることからそれ以前の遺構であるが、時期の特定は出来ない。

ＳＫ－０７（挿図39）

位　置　土坑は調査地の北寄り、Ｆ－３グリッド北東寄りの標高187.5ｍ付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の西側約１ｍにＳＤ－０１、東側約２ｍにＳＩ－０２が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は漏斗状である。規模は、検出面で長軸0.65ｍ×短軸0.52ｍ、底面で長軸0.50ｍ×短軸0.38ｍ、残存する部分の底面までの最大の深さは0.31ｍを測る。

埋　土　埋土を２層に分層した。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

挿図39　ＳＫ－07遺構図

性　格　　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　　時期を推測する判断材料がなく不明である。

ＳＫ－０８（挿図40　図版７）

位　置　　土坑は調査地の中央部、Ｆ－５グリッド北東隅の標高188.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北東側約５mにＳＤ－０９、南西側約４mにＳＤ－０６が位置する。

形　態　　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、検出面は北東隅が土坑肩部崩落のためやや不整になっている。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.14m×短軸0.87m、底面では長軸0.92m×短軸0.64m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.07mを測る。

底面の中央からピットを検出した。平面形は楕円形で、その規模は検出面で長軸0.15m×残存部の短軸0.13m、深さ0.37mを測る。

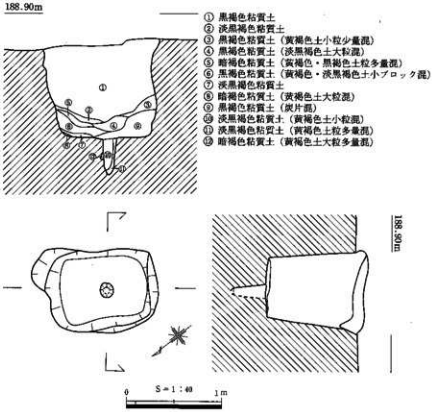
埋　土　　埋土を12層に分層した。このうち、底面ピット埋土の⑩～⑫層を除く９層は、土坑壁体崩落土の⑤層を除くと「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の上が主体で、地山土の粒をほとんど含んでいないことから、土坑掘り下げ後すぐに堆積が進んだことが推測される。

埋土に杭痕跡が認められた。⑩層が杭の痕跡を示すと考えられ、土坑底面にやや大きめの底面ピットを掘った後、杭を⑪層の土によって固定したことが推測される。⑫層は底面ピット掘り下げ時に出来たものであろう。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。

性　格　　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。

時　期　　遺物が出土していないため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。



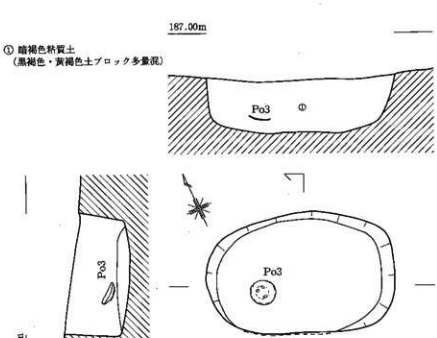
挿図40　ＳＫ－08遺構図

ＳＫ－０９（挿図41・42　図版７・13）

位　置　　土坑は調査地の北端近く、Ｆ－２グリッド北寄りの標高186.8m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けてドっていく尾根筋に対し主軸が直交する。

本遺構の南東側約１mにＳＫ－０２、西側約４mにＳＫ－０１が位置する。



挿図41　SK－09遺構図

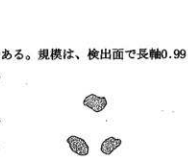
形　態　　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.99m×短軸0.63m、底面で長軸0.87m×短軸0.61m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.35mを測る。

埋　土　　埋土は単層で暗褐色粘質土が中心となるものであるが、黒褐色土や黄褐色土のブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻されたことが推測される。

遺　物　　土坑の底面より８cm程度浮いた位置から内面を上に向けた肥前陶器の皿Po３が出土した。

性　格　　形態・埋土から土壙墓と考える。

時　期　　出土遺物から17世紀前半と推測する。



挿図42　SK－09遺物実測図

ＳＫ－１０（挿図43）

位　置　　土坑は調査地の北端近く、Ｇ－２グリッド南西寄りの標高186.8m付近に位置する。
　　土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。
　　本遺構の北側約１mにＳＫ－０５、東側約２mにＳＫ－１２・３１が位置する。

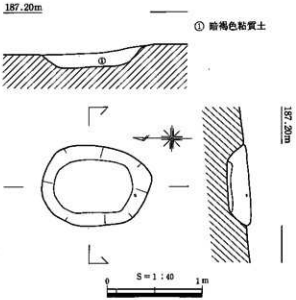
形　態　　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.16m×短軸0.86m、底面で長軸0.84m×短軸0.56m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.25mを測る。

埋　土　　埋土は暗褐色粘質土の単層である。

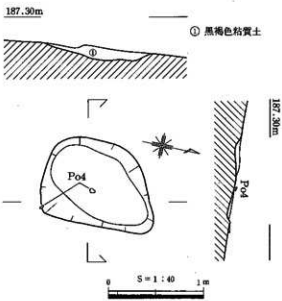
遺　物　　土坑の検出面近くから土器片が出土したが、小片のため図化は出来なかった。

性　格　　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　　出土した土器片は弥生土器と考えられるが、土坑自体の時期を表すとは考えにくいものであり、時期の特定は出来ない。



挿図43　SK－10遺構図



挿図44　SK－11遺構図

SK－11（挿図44・45　図版13）

位　置　土坑は調査地の北寄り、G－3グリッド北東隅の標高187.0m付近に位置する。
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。
本遺構の南側約1mにSB－01、西側約2mにSI－02が位置する。

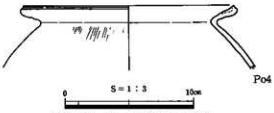
形　態　本遺構は現代の植林のため改変を受けており、平面形は、検出面が不整形、底面はやや不整な楕円形を呈し、残存部の断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.34m×短軸0.99m、底面で長軸1.17m×短軸0.65m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.20mを測る。

埋　土　埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　植林のため原位置を動いたと考えられる甕Po4が出土した。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　出土した土器より弥生時代中期中葉のものと推測する。



挿図45　SK－11遺物実測図

SK－12（挿図46・47　図版8・13）

位　置　土坑は調査地の北端近く、G－2グリッド南側の標高186.6m付近に位置する。
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が直交する。
本遺構の北西側にSK－31、西側約3mにSK－10が位置する。

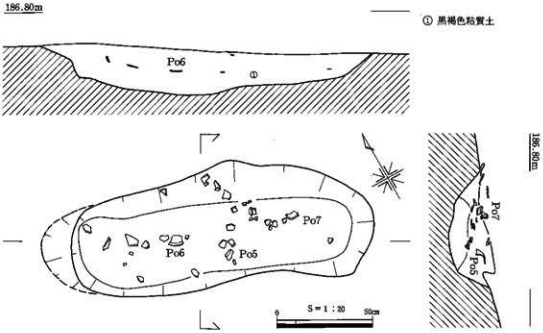
形　態　平面形は、検出面はやや不整な楕円形、底面はやや不整な隅丸長方形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸1.77m×短軸0.57m、底面で長軸1.45m×短軸0.36m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.29mを測る。

埋　土　埋土は黒褐色粘質土の単層である。

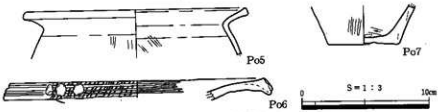
遺　物　土坑の中位以上を中心に土器片が出土した。土器はいずれも流れ込みと考えられる。このうち、甕Po5・壺Po6・底部Po7を図化した。

性　格　形態・埋土・遺物からでは性格の判断は出来ない。

時　期　出土した土器より弥生時代中期中葉のものと推測する。



挿図46　SK－12遺構図



挿図47　SK－12遺物実測図

SK－13（挿図48）

位　置　土坑は調査地の東寄り、H－6グリッド北寄りの標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の北側1mにSD－08・09、東側約3mにSD－15が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈するが、底面は中央部がやや括れる。断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.28m×短軸0.95m、底面で長軸0.94m×括れた部分での短軸0.62m、残存する部分での底面までの最大の深さは1.08mを測る。

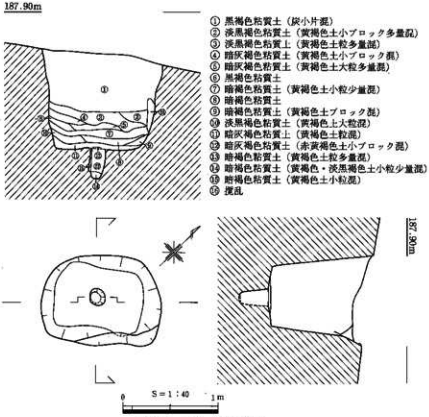
底面の中央からピットを検出した。平面形は径0.17mの円形で、深さは0.32mを測る。

埋　土　埋土を16層に分層した。このうち、底面ピット埋土・攪乱土の⑬～⑯層を除く12層は、「クロボク」と呼ばれる黒褐色系の土が主体で地山土の粒をほとんど含んでいない上層の①層と、地山土の黄褐色土粒が混じる下層の②～⑫層に大別できる。下層に多く含まれる地山土粒は土坑壁体の剥離土に由来すると推測されるもので、下層の堆積後に①層が堆積を開始した時には地山土がほとんど含まれていないことからここに時間差の存在が考えられる。

埋土に杭痕跡が認められた。⑬・⑭層が杭の痕跡を示していると考えられ、⑮層は杭固定のための埋め土であろう。⑮層下の段はピットを2段状にすることで杭の固定を補強したものであろう。これより、用いられた杭は径が10cmを越える太いものであった可能性がある。

遺　物　土坑を半載した時点で底面近くから土器胴部片が1点出土したが、完掘掘り下げ時に紛失した。

性　格　土坑の形態・埋土と底面ピットが存在することから落し穴と考える。



挿図48　SK－13遺構図

時　期　土器の検討が出来なかったため時期の特定はできないが、落し穴と考えられている形態・埋土の類似する同様の土坑を参考にして縄文時代後・晩期段階のものと推測する。

ＳＫ－１４（挿図49）

位　置　土坑は調査地の北西端、Ｄ－４グリッド南西寄りの標高189.2m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構の南西側約７mにＳＫ－２０、西側約９mにＳＫ－３３が位置する。

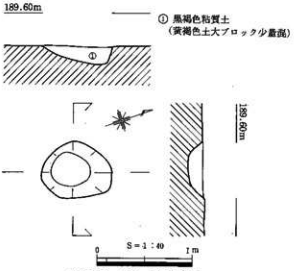
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.74m×短軸0.60m、底面で長軸0.40m×短軸0.34m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.19mを測る。

埋　土　埋土は黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図49　SK－14遺構図

ＳＫ－１５（挿図50）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｆ－２グリッド東端の標高186.7m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構は南側がＳＫ－１９を切り、東側約１ｍにＳＫ－０５が位置する。

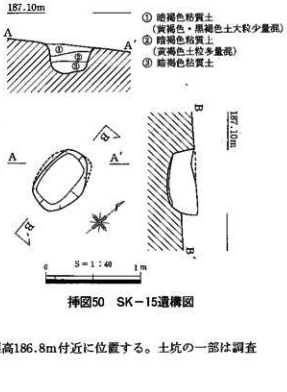
形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.68ｍ×短軸0.50ｍ、底面で長軸0.55ｍ×短軸0.32ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.32ｍを測る。

埋　土　土坑北西端の埋土を３層に分層した。いずれも暗褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　ＳＫ－１９を切ることからそれ以降の遺構であるが、時期の特定は出来ない。



挿図50　ＳＫ－15遺構図

ＳＫ－１６（挿図51）

位　置　土坑は調査地の北端、Ｆ－２グリッド北西交点部の標高186.8ｍ付近に位置する。土坑の一部は調査地外に続く。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構の南側約３ｍにＳＢ－０２、南東側約３ｍにＳＫ－０１が位置する。

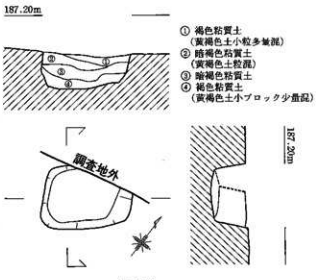
形　態　調査部分の平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.95ｍ×短軸0.68ｍ、底面で長軸0.73ｍ×短軸0.56ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.40ｍを測る。土坑東側底部は木の根の攪乱を受ける。

埋　土　埋土を４層に分層した。いずれも褐色・暗褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図51　ＳＫ－16遺構図

ＳＫ－１７（挿図52）

位　置　土坑は調査地の南端、Ｆ－７グリッド中央の標高190.0ｍ付近に位置する。

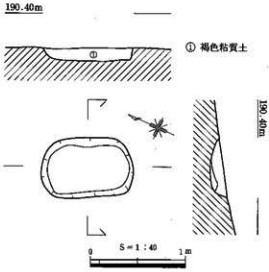
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北東側約10ｍにＳＫ－１８、東側約４ｍにＳＤ－２２が位置する。

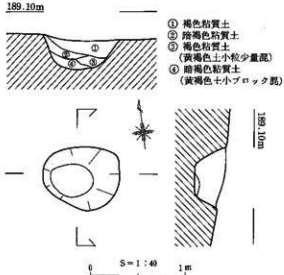
形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸0.97ｍ×短軸0.64ｍ、底面で長軸0.87ｍ×短軸0.48ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14ｍを測る。

埋　土　埋土は褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。



挿図52　SK－17遺構図



挿図53　SK－18遺構図

性　格　　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　　時期を推測する判断材料がなく不明である。

SK－18（挿図53）

位　置　　土坑は調査地の南寄り、G－6グリッド南西寄りの標高188.9m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北側約3mにSD－08、東側約7mにSD－20が位置する。

形　態　　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.81m×短軸0.68m、底面で長軸0.45m×短軸0.35m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.38mを測る。土坑南側底部が木の根の撹乱を受ける。

埋　土　　埋土を4層に分層した。いずれも褐色・暗褐色系の土であり、④層には地山土ブロックが混じる。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。

性　格　　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　　時期を推測する判断材料がなく不明である。

SK－19（挿図54）

位　置　　土坑は調査地の北端、F－2グリッド東端の標高186.8m付近に位置する。

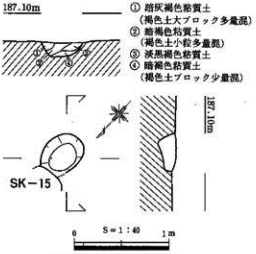
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構は北側がSK－15に切られる。

形　態　　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸0.50m×短軸0.39m、底面で長軸0.33m×短軸0.24m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.16mを測る。

埋　土　　埋土を4層に分層した。

遺　物　　遺物の出土は認められなかった。



挿図54　SK－19遺構図

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　ＳＫ－１５に切られることからそれ以前の遺構であるが、時期の特定はできない。

ＳＫ－２０（挿図55・56　図版８・13）

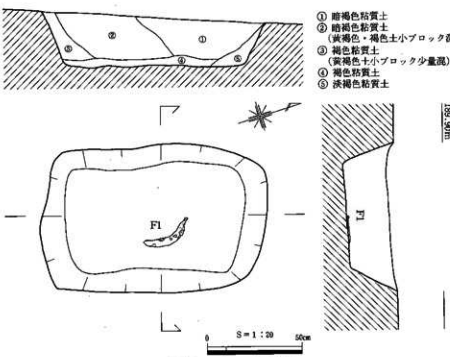
位　置　調査地の北西端近く、Ｃ－５グリッド北東隅からＤ－５グリッドに跨る標高189.7m付近に位置する。土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がやや西側に斜交する。

本遺構は北東側約７mにＳＫ－１４、南西側約８mにＳＫ－２７が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸1.19m×短軸0.80m、底面で長軸0.94m×短軸0.57m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.30mを測る。

埋　土　埋土を５層に分層した。いずれも褐色系の土である。

遺　物　土坑の底部から鉄製の鎌が出土した。柄部は残っていないが、茎部に残った木質から装着角度が推定

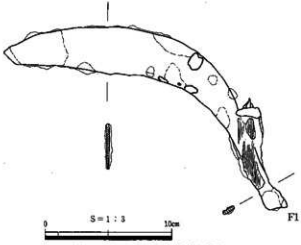


挿図55　ＳＫ－20遺構図

できき、約125度である。柄部の長さは土坑規模から30cm程度であったことが推測される。

性　格　土坑は形が整い丁寧な掘り下げである。また、遺跡の所在する鶴田部落には埋葬に際して墓に魔除けの鎌と箒を立てる習俗が存在していたという。[註(1)] 本遺構例は土坑底部から出土しており、立てたものではないが同じ目的で使用されたことが推測される。よって、本遺構は土壙墓と推測する。

時　期　時期の特定は出来ないが、出土した鉄鎌から中・近世段階の遺構と推測する。



挿図56　ＳＫ－20遺物実測図

註　（1）野口誠一『郷土史　鶴田村』　1989

ＳＫ－２１（挿図57・58　図版８・14）

位　置　土坑は調査地の西端近く、Ｃ－６グリッド南西寄りの標高191.3m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は北東側約７mにＳＫ－２７、南側約１mにＳＫ－３７が位置する。

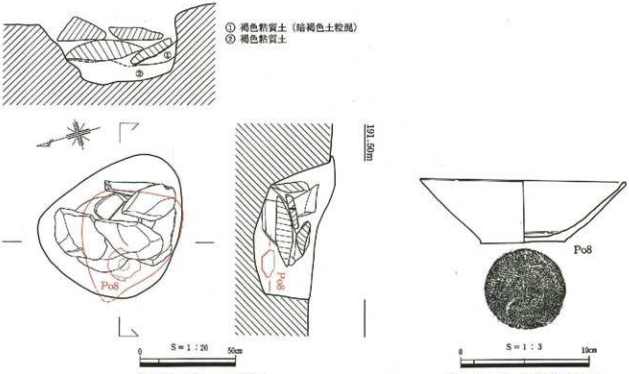
形　態　平面形は、検出面・底面ともに隅丸三角形を呈し、断面形は不整な逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.81m×短軸0.68m、底面で長軸0.61m×短軸0.52m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.43mを測る。検出面と底面ではその３つの隅の位置が振れていることが注目される。

埋　土　埋土の下層残存部を２層に分層した。上部については土坑内の礫のために充分な土層観察ができなかったため不明としたが、①・②層のような褐色系の土であった。

遺　物　土坑底部から土師質土器碗Po８が出土した。Po８の東側矢部は埋められた時には無かったものと考えられる。また、土坑中央から東側にかけては30～40cm程度の礫が７個埋められていた。このうち東端の１つのみが直立して埋められ、南端の１つのみが東西方向に長軸を持っていた。

性　格　底面に土器があり、礫が土坑を覆うような状態で埋められていたことから土壙墓ではないかと推測し、埋土のリン・カルシウム分析を実施した。詳細は附論２に譲るが、分析結果では遺体を埋葬した可能性はほぼ否定された。そのため、土坑の直接的な性格は不明であるが祭祀的な性格を持っていることは間違いなかろう。

時　期　底面から出土したPo８から10世紀代の土坑と推測する。



挿図57　SK－21遺構図　　挿図58　SK－21遺物実測図

ＳＫ－２２（挿図59）

位　置　土坑は調査地の南端、Ｇ－７グリッド南端からＧ－８グリッドにまたがる標高188.8m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ平行する。

本遺構はＳＤ－１８と切りあうが、ＳＤ－１８の掘り下げ後に検出したためにその切り合い関係は不明である。ＳＤ－１８の東側肩部に沿うように位置する。

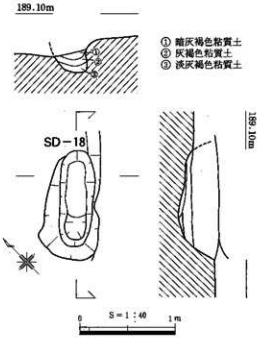
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で残存部の長軸1.17m×短軸0.59m、底面で長軸0.84m×短軸0.22m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.42mを測る。

埋　土　埋土を３層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　本遺構とＳＤ－１８との切り合い関係が不明であるため、他に時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図59　SK－22遺構図

ＳＫ－２３（挿図60）

位　置　土坑は調査地の中央、Ｅ－５グリッド南東隅からＦ－５グリッドに跨る標高189.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は上部にあるＳＤ－０８に切られる。

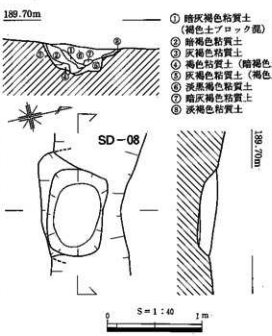
形　態　平面形は、検出面についてはＳＤ－０８に切られているため残存部がわずかであり不明確であるが、ほぼ隅丸長方形状であろう。底面は現状では楕円形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸1.10m×短軸0.64m、底面で長軸0.66m×短軸0.48m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.35mを測る。

埋　土　埋土を８層に分層したが、⑥～⑧層はＳＤ－０８の埋土であり、上坑埋土は①～⑤層の５層である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　本遺構はＳＤ－０８に切られていることからそれ以前の遺構であるが時期の特定はできない。



挿図60　SK－23遺構図

ＳＫ－２４（挿図61・62　図版14）

位　置　土坑は調査地の東端、Ｋ－４グリッド北東寄りの標高183.0m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対して主軸がほぼ直交し、東側の谷に面して開口する。

本遺構は北東側約２mにＳＫ－２５、西側約６mにＳＳ－０２が位置する。

形　態　本遺構は横穴状に掘り込まれたものである。平面形は隅丸長方形状を呈し、断面形は楕円形状である。

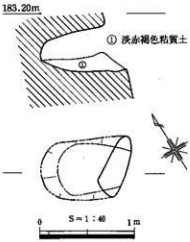
規模は、平面形は長軸0.96m×短軸0.65m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.45mを測る。

埋　土　埋土は淡赤褐色粘質土の単層である。堆積は流れ込みによるものである。

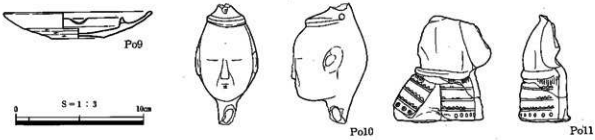
遺　物　陶磁器類の破片が多く出土した。図化したPo９・Po10・Po11などの土器・土製品は投げ込まれたような出土状態であった。Po10は地元で「泥天神」と呼ばれる土人形の頭部である。

性　格　断定は出来ないが、当初はいも穴などの目的で作られた後にゴミ穴として使われたのであろう。

時　期　出土した土器は近世～近・現代のものであるが、土坑に本来伴うものとは考え難く、時期の特定は出来ない。



挿図61　SK－24遺構図



挿図62　SK－24遺物実測図

ＳＫ－２５（挿図63・64　図版14）

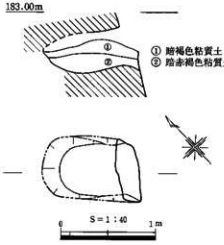
位　置　土坑は調査地の東端、Ｋ－４グリッド北東隅の標高182.8m付近に位置する。
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交し、東側の谷に面して開口する。
本遺構は南西側約２mにＳＫ－２４、西側約７mにＳＳ－０２が位置する。

形　態　本遺構は横穴状に掘り込まれたものである。平面形は隅丸長方形状を呈し、断面形は楕円形状である。
規模は、平面形は長軸1.04m×短軸0.68m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.42mを測る。

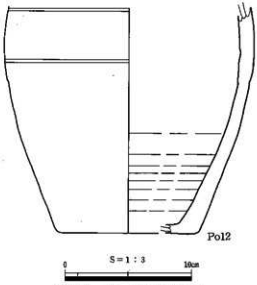
埋　土　埋土を２層に分層した。流れ込みによる堆積である。

遺　物　陶磁器類の破片が多く出土した。Po12などの土器は投げ込まれたような出土状態であった。

性　格　断定は出来ないが、当初はいも穴などの目的で作られた後にゴミ穴として使われたのであろう。



挿図63　SK－25遺構図



挿図64　SK－25遺物実測図

時　期　出土した土器は近世～近・現代のものであるが、土坑に本来伴うものとは考え難く、時期の特定は出来ないが、同様の形態を呈するＳＫ－２４が近接して位置することから、同時期の遺構と推測される。

ＳＫ－２６（挿図65）

位　置　土坑は調査地の東寄り、Ｇ－５グリッド東寄りの標高188.0m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はＳＤ－０９と切り合うが、ＳＤ－０９の掘り下げ後に検出したためにその切り合い関係は不明である。ＳＤ－０９の南側肩部に沿うように位置する。

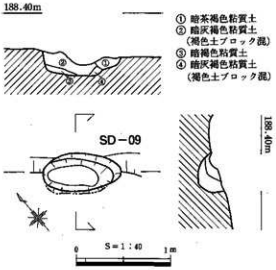
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆台形状である。規模は、検出面で残存部の長軸0.83m×短軸0.41m、底面で長軸0.54m×短軸0.21m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.28mを測る。

埋　土　埋土を４層に分層した。②・④層には褐色土ブロックが混じる。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図65　ＳＫ－26遺構図

ＳＫ－２７（挿図66）

位　置　土坑は調査地の西寄り、Ｃ－５グリッド南端の標高190.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構の北側約９mにＳＫ－３３、南側約７mにＳＫ－２１が位置する。

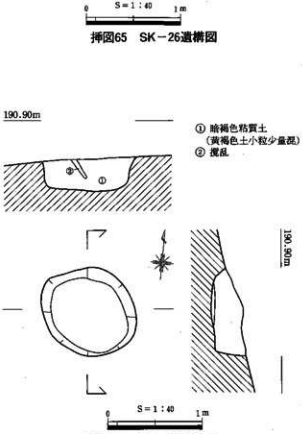
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は長方形状である。規模は、検出面で長軸1.08m×短軸0.90m、底面で長軸0.90m×短軸0.71m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.36mを測る。

埋　土　埋土は木の根攪乱の②層を除くと暗褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図66　ＳＫ－27遺構図

ＳＫ－２８（挿図67・105）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド北西隅の標高187.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はＳＤ－１８に上部を切られ、ＳＸ－０１を切る。南西側約１ｍにはＳＫ－２９・３０が位置する。

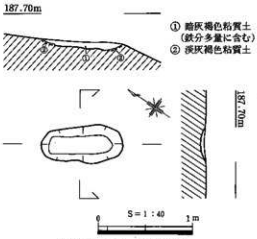
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.88ｍ×短軸0.40ｍ、底面で長軸0.67ｍ×短軸0.18ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14ｍを測る。

埋　土　埋土を２層に分層した。②層は薄く貼り付けられたような状態であった。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　詳細は第８節に譲るが、ＳＤ－１８に上部を切られていることからＳＤ－１８形成以前の遺構である。



挿図67　ＳＫ－28遺構図

ＳＫ－２９（挿図68・105）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド北西隅の標高187.5ｍ付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は切り合い関係が不明なＳＸ－０１盛土除去後の検出で、ＳＤ－１８に上部を切られ、南側のＳＫ－３０と切り合う。北東側約１ｍにはＳＫ－２８が位置する。

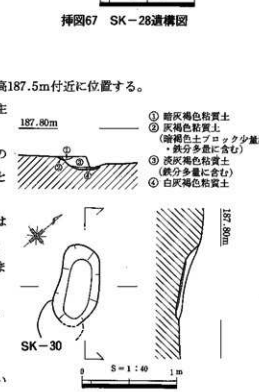
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.86ｍ×短軸0.46ｍ、底面で長軸0.63ｍ×短軸0.25ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.23ｍを測る。

埋　土　埋土を４層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　詳細は第８節に譲るが、ＳＤ－１８に上部を切られていることからＳＤ－１８形成以前の遺構である。



挿図68　ＳＫ－29遺構図

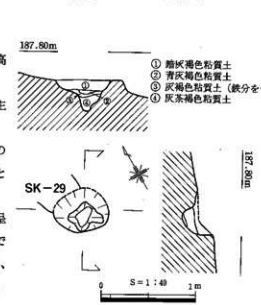
ＳＫ－３０（挿図69・105）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド北西隅の標高187.5ｍ付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構は切り合い関係が不明なＳＸ－０１盛土除去後の検出で、ＳＤ－１８に上部を切られ、北側のＳＫ－２９と切り合う。西側約１ｍにＳＫ－３２が位置する。

形　態　平面形は、検出面は残存部が円形状、底面は不定形を呈する。断面形も不定形である。規模は、検出面の残存部で長軸0.59ｍ×短軸0.47ｍ、底面で長軸0.23ｍ×短軸0.13ｍ、残存する部分での底面までの最大の深さは0.33ｍを測る。



挿図69　ＳＫ－30遺構図

埋　土　埋土を４層に分層した。いずれも灰褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　詳細については第８節に譲るが、ＳＤ－１８に上部を切られていることからＳＤ－１８形成以前の遺構である。

ＳＫ－３１（挿図70）

位　置　土坑は調査地の北端近く、Ｇ－２グリッド中央の標高186.6m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構の南東側にＳＫ－１２、西側約２mにＳＫ－１０が位置する。

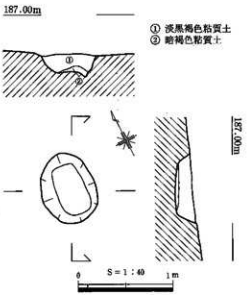
形　態　平面形は、検出面は楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形状である。規模は、検出面で長軸0.75m×短軸0.57m、底面で長軸0.55m×短軸0.31m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.24mを測る。

埋　土　埋土を２層に分層した。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図70　ＳＫ－31遺構図

ＳＫ－３２（挿図71・105）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド北西隅の標高187.5m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はＳＸ－０１を切った後その上部にはさらにＳＸ－０１に伴う盛土を施す。ＳＤ－１８には上部を切られる。北東側約１mにはＳＫ－２９・３０が位置する。

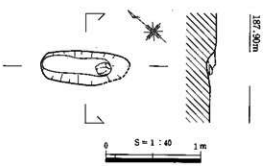
形　態　平面形は、検出面・底面ともに楕円形を呈し、断面形は逆「ハ」の字状である。規模は、検出面で長軸0.95m×短軸0.36m、底面では長軸0.72m×短軸0.19m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.14mを測る。

埋　七　埋土は木の根による攪乱の③層を除くと２層に分層出来る。

遺　物　出土した遺物はないが、底面から平たい礫が出土した。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　詳細は第８節に譲るが、ＳＤ－１８に上部を切られていることからＳＤ－１８形成以前の遺構である。



挿図71　ＳＫ－32遺構図

ＳＫ－３３（挿図72）

位　置　土坑は調査地の西端近く、Ｃ－４グリッド南端の標高189.4m付近に位置する。土坑の一部は調査地外に続く。

調査地内部分から判断して、土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交するようである。

本遺構の南側約９mにＳＫ－２７、南東側約３mにＳＫ－２０が位置する。

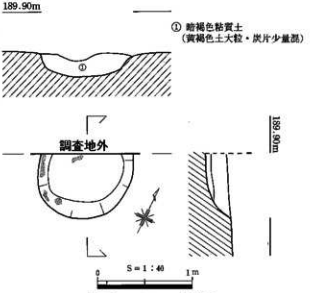
形　態　本遺構は北側部分が調査地外となっているため本来の形態は不明であるが、調査地内部分での平面形は、検出面は半円形状、底面では半楕円形状を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面では長軸1.00m×残存部の短軸0.68m、底面では長軸0.80m×残存部の短軸0.50m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.26mを測る。

埋　土　埋土は暗褐色粘質土の単層である。底面および壁面には焼土痕が残る。

遺　物　遺物の出土は認められなかったが、埋土中に炭片が含まれていた。

性　格　性格を判断することは出来ないが、焼土痕が残り炭片が含まれていることから火を焚いていることが分かる。

時　期　時期を推測する判断材料がなく不明である。



挿図72　SK－33遺構図

ＳＫ－３４（挿図73・105）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド西端の標高187.4m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。

本遺構はＳＸ－０１の盛土除去後に検出されたものだが、切り合い関係を確認することは出来なかった。東側には接するようにしてＳＫ－３５、西側にも接するようにしてＳＤ－１８が位置する。

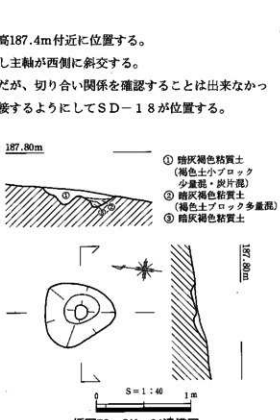
形　態　平面形は、検出面は丸みをもつ隅丸三角形、底面は中央部が盛り上がりその周りが環状に窪む不定形を呈する。断面形は「W」字状である。規模は、検出面では長軸0.74m×短軸0.68m、底面では長軸0.38m×短軸0.30m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.22mを測る。

埋　土　埋土を３層に分層した。いずれも暗灰褐色系の土である。

遺　物　遺物の出土は認められなかった。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　詳細は第８節に譲るが、切り合い関係が不明のため断定は出来ないが、次に述べるＳＫ－３５と同様ＳＸ－０１形成後の遺構の可能性が考えられる。



挿図73　SK－34遺構図

ＳＫ－３５（挿図74・105　図版９）

位　置　土坑は調査地の南東寄り、Ｈ－７グリッド西側で、東側の谷に向けて地形が下り始める地形変換点の標高187.1m付近に位置する。

土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸がほぼ直交する。

本遺構はＳＸ－０１の盛土除去後に検出されたものだが、その切り合い関係は確認することが出来なかった。北側約２mにＳＫ－２８・３０・３２、西側約１mにＳＫ－３４、西側約２mにはＳＤ－１８が位置する。

形　態　平面形は、検出面は北側が拡がったいびつな楕円形、底面は２段状になった不定形を呈し、断面形も不定形である。規模は、検出面で長軸1.07m×短軸0.60m、１段目の底面で長軸0.91m×短軸0.32m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.12m、２段目の検出面で長軸0.40m×短軸0.34m、底面で長軸0.20m×短軸0.15m、最大の深さは0.12mを測る。

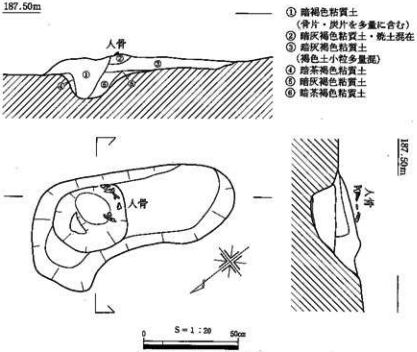
埋　土　埋土を６層に分層した。このうち、土坑中央部の検出面付近から多量の人骨片・炭片・焼土塊が出土した。①層は人骨片・炭片をともに含み、それらは検出面近くに集中しているが底面よりやや浮いた位置からも少量出土した。②層には焼土が混在していたが、検出面では人骨片を半円状に取りまく程度の部分的なものである。

遺　物　検出面付近から人骨片・炭片が多量に出土した。人骨片は焼成を受けており、多くは遺存状態が悪く粉々に砕けた状態であった。鑑定[註(1)]をして頂いた結果では、被葬者の性別は不明であるが成人骨であることが判明した。

性　格　焼成を受けた人骨片と多量の炭片が出土していることから火葬墓の可能性が推測されるが、人骨片・炭片・焼土塊の出土は上方から掘り込まれた形状を呈する①層に集中しており、底面には人骨片・炭片が少量存在していたものの焼土塊は含まれていないことから、他所で茶毘に付してから二次的に埋葬したものと考えられる。

時　期　詳細は第８節に譲るが、人骨の出土状況よりＳＸ－０１形成後の遺構と考えられる。

註　（１）鳥取大学医学部井上貴央教授に鑑定して頂いた。



挿図74　SK－35遺構図

ＳＫ－３６（挿図75　図版９）

位　置　土壙は調査地の東端、Ｊ－４グリッド中央の標高185.3m付近に位置する。
土壙は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が東側に斜交する。
本遺構はＳＳ－０１の穴６を切るように位置する。

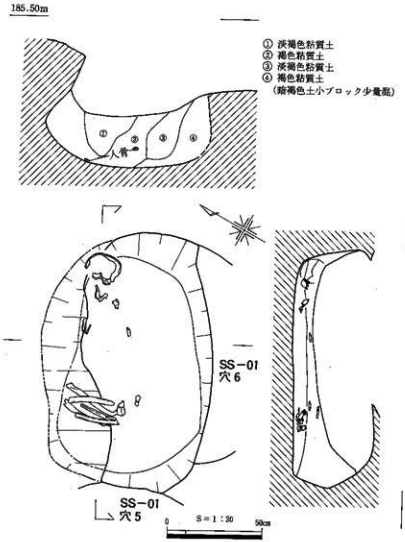
形　態　平面形は、土壙壁面の北西側をやや横に掘り拡げて楕円形状とし、底面はいびつな台形状である。断面形は袋状に近いと考えられる。規模は、土壙最大部分で長軸1.36m×短軸0.90m、底面で長軸1.15m×短軸0.75m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.60mを測る。

埋　土　埋土は４層に分層出来る。いずれも地山土と類似した土である。土壙の南西側にはＳＳ－０１の穴６が位置していることが後に判明したが、両土壙を一体とした土層の分層を行っていないため、この部分の土壙立ち上がりは確実ではない。

遺　物　底面とやや浮いた位置から１体分の人骨が出土した。人骨は土壙の北西側に片寄り、北西側に顔を向け膝を折り曲げた横臥屈葬で、被葬者は成人の女性であった。詳細は附論３の鑑定結果を参照されたい。なお、土壙の形態や底面直上に人骨が位置することから、棺は用いられていないと推測される。

性　格　人骨が出土したことから土壙墓である。

時　期　人骨以外に遺物が出土していないため時期の特定は出来ないが、横臥屈葬という埋葬形態であるという点に注目するならば、確実とはいえないが中世段階まで遡る可能性も考えられる。



挿図75　SK－36遺構図

ＳＫ－３７（挿図76・77　図版９・14）

位　置　土坑は調査地の西端近く、Ｃ－６グリッド南西寄りの標高191.3m付近に位置する。
土坑は南から北東側に向けて下っていく尾根筋に対し主軸が西側に斜交する。
本遺構の北側約１mにＳＫ－２１が位置する。

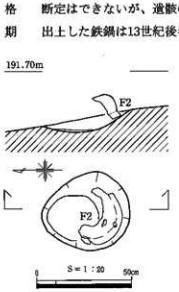
形　態　平面形は、検出面・底面ともに円形を呈し、断面形は皿状である。規模は、検出面で長軸0.47m×短軸0.41m、底面で長軸0.27m×短軸0.24m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.12mを測る。

埋　土　木の根による攪乱を受けた残りの悪い浅い土坑で、埋土を確認していない。

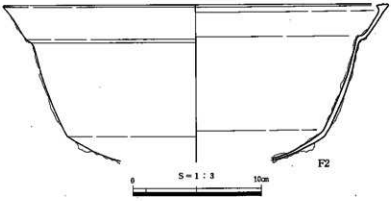
遺　物　鉄製の鋳造鍋Ｆ２が口縁を下にして伏せた状態で出土した。

性　格　断定はできないが、遺骸の頭部を鉄鍋で覆う東北地方などでみられる墓になる可能性も考えられる。

時　期　出土した鉄鍋は13世紀後半から14世紀代のものであることから、それ以後のものである。



挿図76　ＳＫ－37遺構図



挿図77　ＳＫ－37遺物実測図

第４節　溝状遺構

今回の調査で検出できた溝状遺構は25条であった。

ＳＤ－０１（挿図78・80　図版10・14）

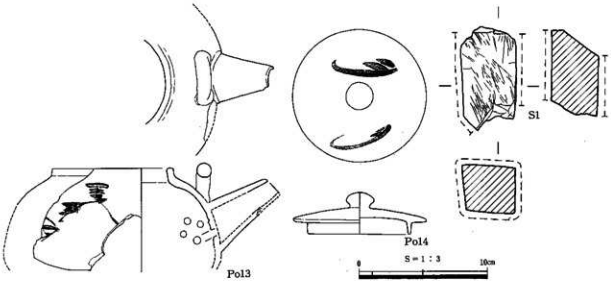
位　置　調査地のほぼ中央部から北側、Ｆ－２～５・Ｇ－１～２グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高185.8m～188.6mにかけて位置する。
遺構は尾根筋に対してほぼ平行で、南端部はＳＤ－０７を直交するように切る。
本遺構の東側約１mに主軸が多少ふれるもののＳＤ－０２、東側約２mにはＳＤ－１１が位置する。

形　態　遺構北側は調査地外に続いており本来の規模は不明である。検出規模は、全長約31.80m、幅0.40m～1.80m、深さは最大0.45mを測る。遺構の走向はＮ－30°－Ｅである。なお、調査開始以前にはすでに溝状に窪んでいた。

埋　土　場所によって異なるが、３～７層に分層できる。本遺構の北側では、部分的な木根による攪乱が多く見られ、埋土のしまりは良くない状況であった。基本となる埋土は、暗褐色粘質土あるいは灰茶褐色粘質土である。

遺　物　出土遺物で図化できたものは、陶器土瓶Po13、陶器土瓶蓋Po14、砥石Ｓ１である。Po13・Po14は浮いた状態での出土であり、Ｓ１はほぼ底面直上での出土である。

時　期　出土した遺物は流れ込みの状況を呈しており、時期を判断する良好な資料とはならないが、埋土の状況から考えても近世段階以降のものと考えられる。



挿図78　SD－01遺物実測図

性　格　　遺構に続く調査地外は溝状に窪んでおり、さらに北側へと続いていたことが予想されることから、薪取り等に使用された山道と考えられる。

ＳＤ－０２（挿図79・80　図版15）

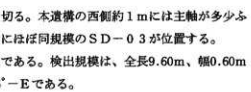
位　置　　調査地の北部、Ｇ－１～２グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高185.4m～186.6m付近に位置する。

遺構は尾根筋に対してほぼ平行で南端部はＳＫ－０５を切る。本遺構の西側約１mには主軸が多少ふれるもののＳＤ－０１、東側約３～４mには平行するようにほぼ同規模のＳＤ－０３が位置する。

形　態　　遺構北側は調査地外に続いているため本来の規模は不明である。検出規模は、全長9.60m、幅0.60m～0.84m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はＮ－36°－Ｅである。

埋　土　　場所によって異なるが、２～４層に分層できる。基本となる埋土は淡黒褐色粘質土である。いずれも流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　　出土遺物で図化できたものは、ＳＫ－０５との切り合い部分から出土した弥生土器Po15である。Po15はやや浮いた状態で出土したため、流れ込みによるものと思われる。



挿図79　SD－02遺物実測図

時　期　　ＳＫ－０５との切り合い関係から、本遺構の方が新しいことが認められる。また、出土遺物は弥生時代中期中葉のものであるが、本遺構自体の時期を表すとは考えにくく、時期は特定できない。

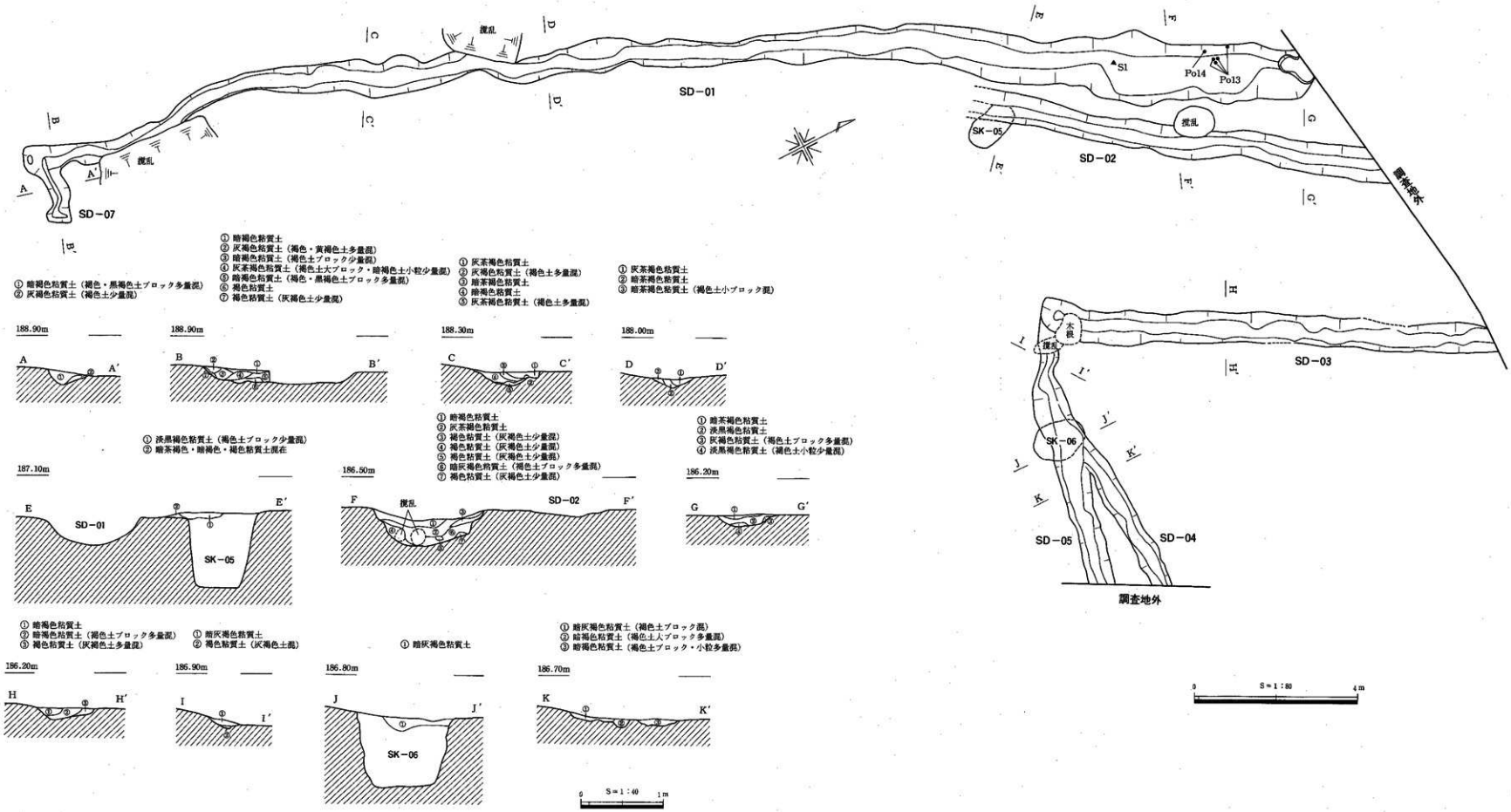
性　格　　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、性格は不明である。

ＳＤ－０３（挿図80）

位　置　　調査地の北部、Ｇ－１～２・Ｈ－１グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高184.6m～186.5m付近に位置する。

遺構は尾根筋に対してほぼ平行で南端部はＳＤ－０５と直交するように交わる。西側約３～４mにほぼ同規模のＳＤ－０２、南側約１mにはＳＫ－１２が位置する。

形　態　　北側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長11.00m、幅0.60m～0.90m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はＮ－30°－Ｅである。



挿図80　SD−01・02・03・04・05・07遺構図

埋　土　場所によって異なるが、3層に分層できる。基本となる埋土は暗褐色粘質土である。いずれも流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　本遺構は南端部でＳＤ－０５と交わっている。木根による攪乱を受けており切り合い関係を確認することは出来なかったが、埋土の土色に相違が認められたため別遺構として扱った。時期差が存在すると考えられるが、時期は特定できない。

性　格　本遺構はＳＤ－０２と規模・深さ・走向が著しく類似しており、またＳＤ－０５と直交しＬ字状を呈することから、形態的には関連性が窺える。しかし、埋土の土色からそれぞれ時期を異にしている可能性も考えられる。遺構相互の関係は不明である。

ＳＤ－０４（挿図80）

位　置　調査地の北部、Ｇ・Ｈ－２グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高186.0m～186.2m付近に位置する。

本遺構は西端をＳＤ－０５に切られている。

形　態　東側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長3.80m、幅0.44m～0.60m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はＮ－87°－Ｗである。

埋　土　埋土は暗褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　遺構西側がＳＤ－０５に切られていることから、本遺構はＳＤ－０５より古いことが認められるが時期は特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は、遺構同士が直交あるいは平行するものが多く、溝状遺構が何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

本遺構は鶴田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がないため、現時点では墓道とは断定できない。

ＳＤ－０５（挿図80）

位　置　調査地の北部、Ｇ・Ｈ－２グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の先端部で、やや斜面が急になる標高186.1m～186.5m付近に位置する。

本遺構は中央部付近でＳＤ－０４、またほぼ同じ位置でＳＫ－０６を切っている。遺構西端はＳＤ－０３の南端部と直交する。

形　態　東側は調査地外に伸びており本来の規模は不明である。検出規模は、全長6.40m、幅0.34m～0.90m、深さは最大0.19mを測る。遺構の走向はＮ－75°－Ｗである。また、ＳＤ－０１同様調査開始以前にすでに溝状に窪む形跡が認められた。

埋　土　場所によって異なるが、１～２層に分層出来る。基本となる埋土は暗灰褐色粘質土である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　本遺構は２ヶ所で他遺構との切り合い関係が認められる。よって、ＳＤ－０４ならびにＳＫ－０６より新しいことが認められるが時期は特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は、遺構同士が直交あるいは平行するものが多く、溝状遺構が何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

本遺構は鶴田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がないため、現時点では墓道とは断定できない。

ＳＤ－０６（挿図81）

位　置　調査地の中央南寄り、Ｆ－５・６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.9m～189.6m付近に位置する。

本遺構の中央南寄り、Ｆ－５・６グリッドにまたがる部分でＳＤ－０８を切っている。南側約1.5mに主軸は多少ふれるもののＳＤ－１０がつながるように位置する。西側約４mには主軸は多少ふれるものの本遺構にほぼ平行してＳＤ－２５が位置する。

形　態　検出規模は、全長7.80m、幅0.30m～0.70m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はＮ－20°－Ｅである。

埋　土　埋土は２層に分層できる。流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　ＳＤ－０８との切り合い関係から、本遺構はＳＤ－０８より新しいことが認められるが、時期は特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－０７（挿図80）

位　置　調査地の中央北西寄り、Ｆ－４グリッドの西側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.5m～188.6m付近に位置する。

本遺構は西端をＳＤ－０１に切られている。北東側約3.5mに主軸は多少ふれるもののＳＤ－１１が位置する。

形　態　検出規模は、全長1.90m、幅0.50m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はＮ－73°－Ｗである。

埋　土　埋土は２層に分層できる。基本となる埋土は暗褐色粘質土で、堆積状況から自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　ＳＤ－０１との切り合い関係から、本遺構はＳＤ－０１より古いことが認められるが、時期は特定できない。

性　格　本遺構とＳＤ－０１が示す形態は、規模は違うもののＳＤ－０３とＳＤ－０５が示すＬ字状の形態に類似し、さらにそれぞれの遺構の走向もほぼ同じである。これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－０８（挿図81）

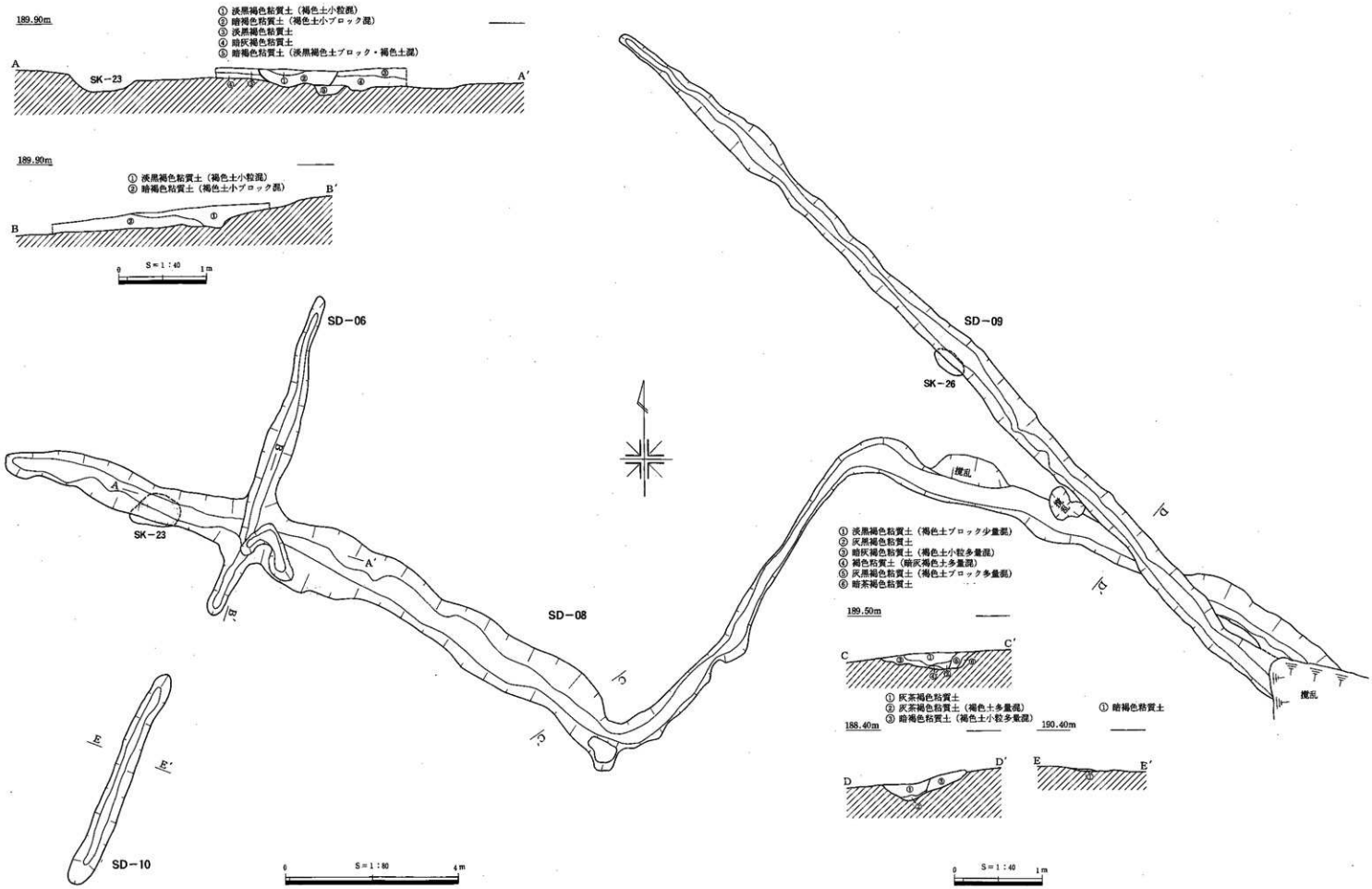
位　置　調査地の中央南西寄りから東側、Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ－５、Ｆ・Ｇ・Ｈ－６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.4m～189.6m付近に位置する。

本遺構の西端、Ｆ－５・６グリッドにまたがる部分でＳＤ－０６に、Ｈ－５・６グリッドにまたがる部分ではＳＤ－０９に切られる。Ｅ・Ｆ－５グリッドにまたがる部分ではＳＫ－２３を切っている。遺構の東寄りでは、主軸は多少ふれるものの北側にＳＤ－１３が平行するように位置する。東端約２mには直交するようにＳＤ－１５が位置する。

形　態　遺構の東端部分が撹乱を受けているために本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長36.0m、幅0.24m～1.60m、深さは最大0.25mを測る。遺構の走向はＮ－67°－ＷからＮ－38°－Ｅに屈曲し、さらにＮ－69°－Ｗに屈曲する。

埋　土　埋土は場所によって異なるが、１～６層に分層できる。基本となる埋土は東側屈曲部周辺で色調が変化し、西側は淡黒褐色粘質土、東側は暗褐色粘質土である。

遺　物　土器の小片が出土したが図化はできなかった。



挿図81　SD－06・08・09・10遺構図

時　期　本遺構は３ヶ所で他遺構との切り合い関係が認められ、ＳＫ－２３より新しく、ＳＤ－０６・０９より古いことが認められるが時期は特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－０９（挿図81）

位　置　調査地の中央部から東側、Ｇ－４・５、Ｈ－５・６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.5m～188.2m付近に位置する。

本遺構の中央部付近でＳＫ－２６と切り合い、東端部はＨ－５・６グリッドにまたがる部分でＳＤ－０８を切る。遺構の東寄りでは主軸は多少ふれるもののＳＤ－１３がほぼ平行するように位置する。東端約２mには直交するようにＳＤ－１５が位置する。

形　態　遺構の東端部分が攪乱を受けているために本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長21.10m、幅0.30m～0.80m、深さは最大0.25mを測る。遺構の走向はＮ－47°－Ｗである。

埋　土　埋土は２層に分層できる。基本となる埋土は灰茶褐色粘質土である。流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　土器の小片が出土したが図化はできなかった。

時　期　ＳＤ－０８との切り合い関係から、本遺構の方が新しいことが認められるが時期は特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－１０（挿図81）

位　置　調査地の中央南寄り、Ｅ・Ｆ－６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.7m～190.2m付近に位置する。

本遺構の北東約1.5mにＳＤ－０６が位置する。ＳＤ－０６は主軸が多少ふれるものの本遺構につながるような位置関係にあり、本来は１つの遺構であった可能性が考えられる。北東側約３mにあるＳＤ－０８は直交するように位置する。

形　態　検出規模は、全長5.30m、幅0.40m～0.50m、深さは最大0.03mを測る。遺構の走向はＮ－24°－Ｅである。

埋　土　埋土は暗褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

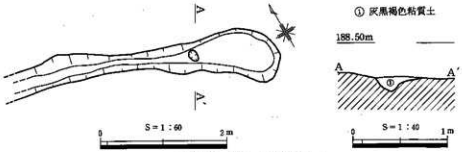
性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－１１（挿図82）

位　置　調査地の中央北寄り、Ｆ－４グリッドの北側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.1m付近に位置する。

本遺構の西側約２mにＳＤ－０１、南西側約3.5mにＳＤ－０７が位置する。主軸は多少ふれるもののＳＤ－０７は本遺構に平行するように位置し、ＳＤ－０１は直交するように位置する。また、北東側約1.5mにＳＩ－０１が位置する。

形　態　検出規模は、全長4.40m、幅0.24m～0.74m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はＮ－67°－Ｗである。



挿図82　SD－11遺構図

埋　土　埋土は灰黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－１２（挿図84）

位　置　調査地の中央北東寄り、Ｇ・Ｈ－４グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.2m～187.5m付近に位置する。

本遺構の北側約２mにＳＢ－０１、西側約３mにＳＩ－０１が位置する。

形　態　検出規模は、全長12.20m、幅0.18m～0.36m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はＮ－68°－Ｗである。

埋　土　埋土は灰黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－１３（挿図83・85　図版15）

位　置　調査地の東側、Ｇ・Ｈ－５、Ｈ－６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.3m～187.9m付近に位置する。

主軸は多少ふれるものの、本遺構の西側に接するようにＳＤ－０９が、また東側に接するようにＳＤ－０８がそれぞれほぼ平行して位置する。東端部より約１m離れて直交するようにＳＤ－１５が位置する。

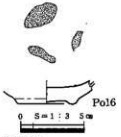
形　態　検出規模は、全長12.30m、幅0.30m～0.90m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はＮ－59°－Ｗである。

埋　土　埋土は灰茶褐色粘質土の単層である。

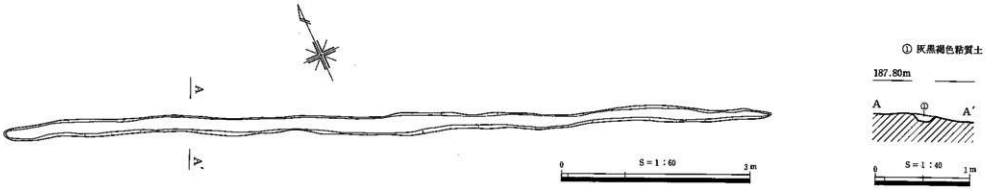
遺　物　出土遺物で図化できたものは、陶器底部Po16である。Po16は底面よりやや浮いた状態で出土した。

時　期　遺物は流れ込みであり、時期を判断する良好な資料とは言えないが、埋土の状況から考えても近世段階以降のものと考えられる。

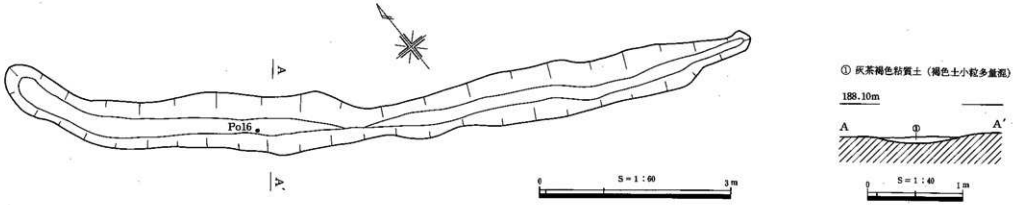
性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、何らかの意図をもって掘り巡らされている可能性は否めないが、その性格は不明である。



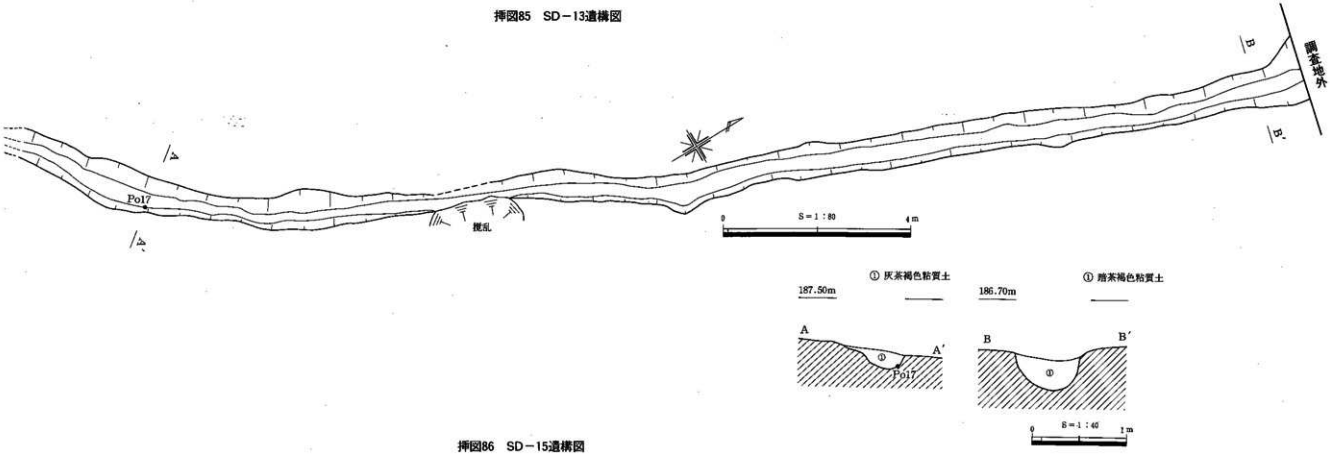
挿図83
SD－13遺物実測図



挿図84　SD－12遺構図



挿図85　SD－13遺構図



挿図86　SD－15遺構図

ＳＤ－１４（挿図87）

位　置　調査地の中央東寄り、Ｇ－５グリッドの西側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高188.4m付近に位置する。

本遺構の東側約３mに主軸は多少ふれるもののＳＤ－０８、北側約３mにはＳＤ－０９が位置する。

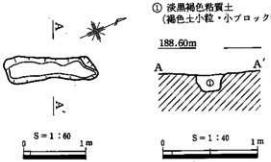
形　態　検出規模は、全長1.46m、幅0.30m～0.42m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はＮ－25°－Ｅである。

埋　土　埋土は淡黒褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。



挿図87　ＳＤ－14遺構図

ＳＤ－１５（挿図86・88　図版10・15）

位　置　調査地の北東端から東側、Ｊ－３・４、Ｉ－４・５・６、Ｈ－６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.2m～187.2m付近に位置する。

本遺構は尾根筋にほぼ直交し、北端部の西側約１mには主軸がほぼ同じであるＳＤ－１６が、東側約２mには人骨が出土した土壙墓ＳＫ－３６とＳＤ－２４を含むＳＳ－０１が位置し、また主軸は多少ふれるものの南端部にはＳＤ－１７がほぼ平行するように位置する。遺構南端部の西側約１～２mには直交するようにＳＤ－０８・０９・１３が位置する。

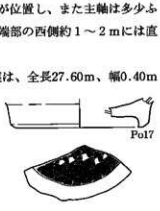
形　態　遺構北側が調査地外に伸びており本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長27.60m、幅0.40m～1.40m、深さは最大0.45mを測る。遺構の走向はＮ－21°－Ｅである。

埋　土　埋土は１層であるが、色調が場所によって異なっている。北端部からＩ－５グリッドのほぼ中央の攪乱部周辺にかけて暗茶褐色粘質土、そこから南端部にかけては灰茶褐色粘質土が堆積している。

遺　物　出土遺物で図化できたのは、陶器底部Po17である。Po17は底面直上からの出土である。

時　期　出土遺物から近世段階のものと考えられる。

性　格　本遺構は鵜田部落の墓地に向けて伸びるため墓道の可能性が考えられるが、墓地と遺構との関連を示唆する直接的な判断材料がなく、現時点では特定できない。



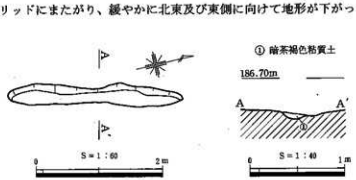
挿図88　ＳＤ－15遺構図

ＳＤ－１６（挿図89）

位　置　調査地の北東端近く、Ｉ－３・４グリッドにまたがり、緩やかに北東及び東側に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.3m付近に位置する。

本遺構の東側約１mには主軸がほぼ同じであるＳＤ－１５が位置する。

形　態　検出規模は、全長2.80m、幅0.20m～0.34m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はＮ－15°－Ｅである。



挿図89　ＳＤ－16遺構図

埋　土　　埋土は暗茶褐色粘質土の単層である。

遺　物　　遺物は出土しなかった。

時　期　　特定できない。

性　格　　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

ＳＤ－１７（挿図90）

位　置　　調査地の東端、Ｉ－５・６グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高186.5m～186.8m付近に位置する。

本遺構は尾根筋にほぼ直交し、西側約１mには主軸は多少ふれるもののＳＤ－１５が平行して位置し、東側約２mには高低差があるもののＳＤ－２３が、また北側約２mにはＳＤ－１８が位置している。

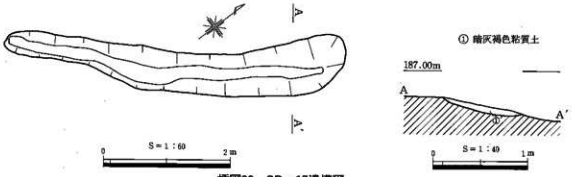
形　態　　検出規模は、全長5.44m、幅0.40m～0.84m、深さは最大0.20mを測る。遺構の走向はＮ－40°－Ｅである。

埋　土　　埋土は暗灰褐色粘質土の単層である。

遺　物　　遺物は出土しなかった。

時　期　　特定できない。

性　格　　埋土から考えてＳＤ－１８周辺の遺構との関連が考えられることから、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。



挿図90　SD－17遺構図

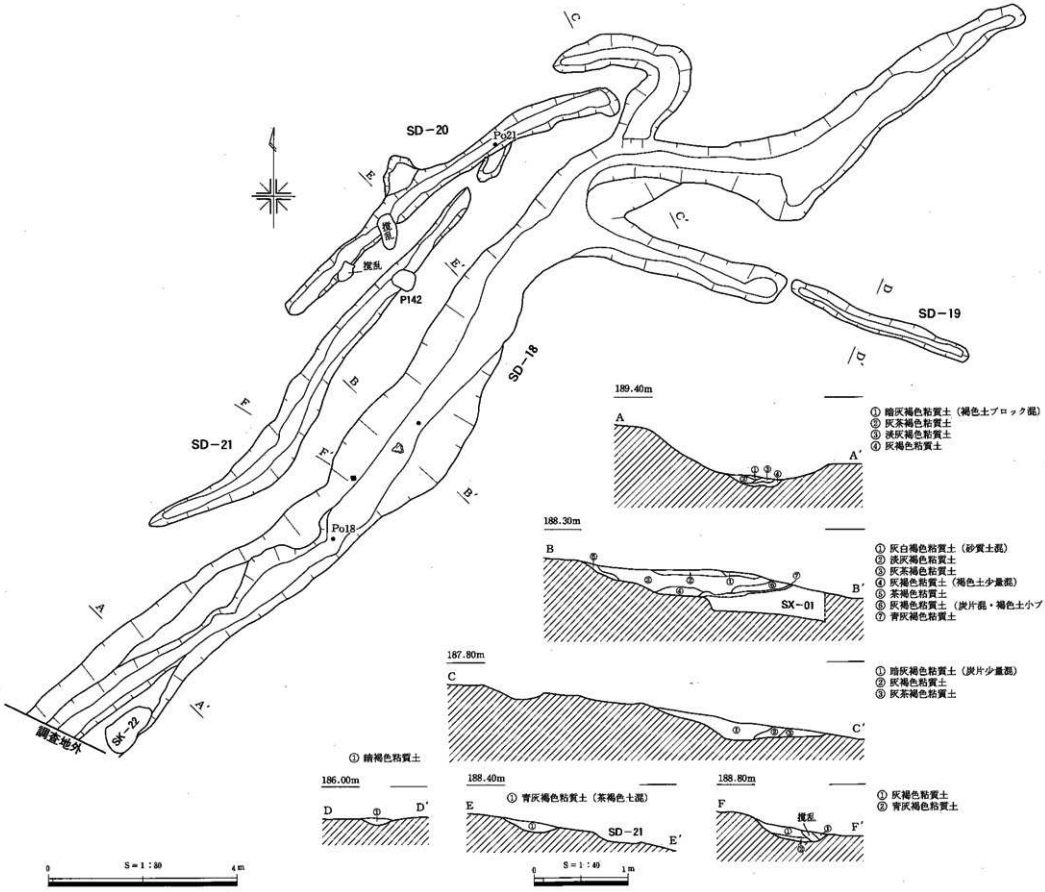
ＳＤ－１８（挿図91・92　図版12・15）

位　置　　調査地の南東寄り、Ｈ・Ｉ－６、Ｇ・Ｈ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がってからさらに傾斜が急になる地形変換地点の標高186.0m～189.3m付近に位置する。

本遺構は中央部付近でＳＸ－０１を切り、さらにＳＫ－２８～３０・３２の土坑群を切り、また南端部はＳＫ－２２と切り合う。本遺構の西側には主軸は多少ふれるもののＳＤ－２０・２１・２２がほぼ平行して位置する。南東側に分岐した部分の延長上にはＳＤ－１９が位置する。

形　態　　遺構南側が調査地外に伸びているため本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長27.0m、幅0.50m～2.10m、深さは最大0.60mを測る。遺構の走向はＮ－55°－Ｅから、Ｈ－６グリッドの南側で三方向に分岐している。それぞれの走向は北方向の部分でＮ－24°－ＥからＥ－Ｗに屈曲し、東方向の部分でＮ－86°－ＷからＮ－55°－Ｅに屈曲する。さらに南東方向の部分ではほぼ斜面に平行で、Ｎ－72°－Ｗに分岐する。また、調査地外が溝状に窪んでいる形跡が認められた。

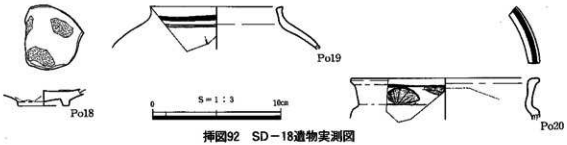
埋　土　　ＳＸ－０１との切り合い部分とそれ以外の場所では埋土が異なった様相を呈している。切り合い部では全体的に大変締まりがよく、基本となる埋土は灰茶褐色粘質土である。⑦層とＳＸ－０１との間には２mm程度の鉄分の層が薄く堆積し、その上を⑦層が覆っている。調査地周辺は鉄分を多く含む土質で



挿図91　SD－18・19・20・21遺構図

あり、降水等により鉄分の沈殿作用が働いた可能性が考えられる。また⑥層には炭片が混じるが、ＳＸ－０１の盛土除去後に検出したＳＫ－３５の埋土中から茶毘に付された人骨片とともに多量の炭片が出土しており、そこからの混入と考えられる。切り合い部以外の場所では、暗灰褐色あるいは灰褐色系の埋土が基本である。

遺　物　出土遺物で図化できたものは、肥前陶器底部Po18と陶器壺Po19、磁器口縁Po20である。Po18は底面からやや浮いた状態で出土し、Po19・Po20は埋土の上面からの出土である。他にも図化はできなかったが、陶磁器片や礫、鉄片、現代に近いと思われる瓦が出土しており、これらの出土位置はＳＸ－０１との切り合い部分に集中している。



挿図92　SD－18遺物実測図

時　期　本遺構との切り合い関係が確認できたのはＳＸ－０１とＳＫ－２８・３２である。相対的な新旧関係は、本遺構の方が他遺構を切っているため新しいといえる。また、出土した遺物の肥前陶器Po18から本遺構は17世紀前半頃以降のものと考えられる。

性　格　遺構に続く調査地外は溝状に窪み、そのまま南側へと伸びていることから、薪取り等に使用された山道と考える。

ＳＤ－１９（挿図91）

位　置　調査地の南東端、Ｈ・Ｉ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根筋の東側斜面の標高184.8m～186.2m付近に位置する。

本遺構はほぼ斜面に平行で、西側のＳＤ－１８の分岐点から南東方向に向かう部分の延長上に位置し、東側約１mに直交するようにＳＤ－２３が位置する。

形　態　検出規模は、全長4.10m、幅0.30m～0.40m、深さは最大0.08mを測る。遺構の走向はＮ－67°－Ｗである。

埋　土　埋土は暗褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　本遺構はＳＤ－１８が分岐点から南東方向に向かう部分の延長上に位置していることから、別遺構として扱ったがＳＤ－１８と同一の遺構である可能性も考えられ、ほぼ同時期の近世段階のものと推測される。

性　格　山道として使用されたと考える。

ＳＤ－２０（挿図91・93　図版15）

位　置　調査地の南東寄り、Ｇ・Ｈ－６、Ｇ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.4m～188.4m付近に位置する。

本遺構の北端部に接するようにＳＤ－１８が、本遺構の中央部付近で分岐している部分の延長上にはＳＤ－２１が、南西側約５mにはＳＤ－２２が位置する。これらは主軸が多少ふれるものの本遺構とほぼ平行するように位置している。

形　態　検出規模は、全長8.40m、幅0.34m～0.60m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はＮ－58°－Ｅ

から中央部付近でN－21°－Eに分岐する。

埋　土　埋土は青灰褐色粘質土の単層である。

遺　物　出土遺物で図化できたものは陶器底部Po21である。Po21は底面直上にあり、分岐している部分からの出土である。

時　期　埋土の土質・走向が、ＳＤ－１８をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することや出土遺物から考えてほぼ同時期の近世段階と考える。

性　格　ＳＤ－１８のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。

挿図93　SD－20遺物実測図

ＳＤ－２１（挿図91）

位　置　調査地の南東寄り、Ｈ－６、Ｇ・Ｈ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高187.7m～188.9m付近に位置する。

本遺構の北端部にはＳＤ－２０の分岐した部分が接するように位置する。主軸が多少ふれるものの、東側約１mにはＳＤ－１８、西側約２mにはＳＤ－２２が本遺構と平行するように位置する。

形　態　検出規模は、全長10.20m、幅0.30m～0.90m、深さは最大0.27mを測る。遺構の走向はN－49°－Eである。

埋　土　埋土は２層に分層できる。基本となる埋土は灰褐色粘質土である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　埋土の土質・走向が、ＳＤ－１８をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することから、ほぼ同時期の近世段階と考える。

性　格　ＳＤ－１８のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。

ＳＤ－２２（挿図94）

位　置　調査地の南端、Ｆ・Ｇ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.1m～189.7m付近に位置する。

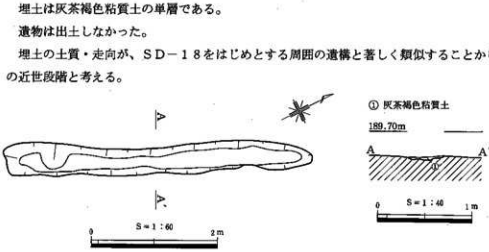
本遺構は尾根筋に対してほぼ平行する。東側約２mにＳＤ－２１が主軸が多少ふれるものの平行するように位置する。

形　態　検出規模は、全長4.90m、幅0.40m～0.52m、深さは最大0.05mを測る。遺構の走向はN－51°－Eである。

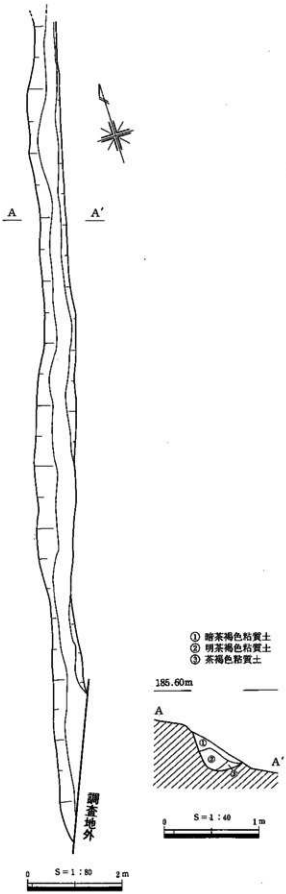
埋　土　埋土は灰茶褐色粘質土の単層である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

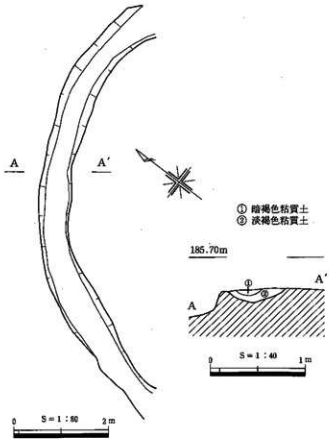
時　期　埋土の土質・走向が、ＳＤ－１８をはじめとする周囲の遺構と著しく類似することから、ほぼ同時期の近世段階と考える。



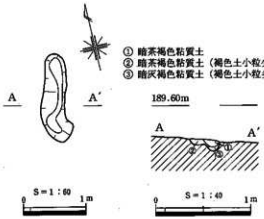
挿図94　SD－22遺構図



挿図95　SD－23遺構図



挿図96　SD－24遺構図



挿図97　SD－25遺構図

性　格　ＳＤ－１８のようなしっかりした掘り込みはないにしても、山道として使用された可能性が推測されるが、判断材料が乏しいため断定は出来ない。

ＳＤ－２３（挿図95）

位　置　調査地の東端から南東端、Ｉ－５～７グリッドにまたがり、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根筋の東側斜面で、標高184.0m～185.5m付近に位置する。

本遺構の西側約２mにＳＤ－１７、西側約１mには直交するようにＳＤ－１９が位置する。

形　態　遺構北端部分が攪乱を受けているため本来の規模は不明であるが、検出規模は、全長15.80m、幅0.40m～0.86m、深さは最大0.42mを測る。遺構の走向はＮ－12°－Ｅである。ほぼ斜面に沿うように掘り込まれており、部分的にテラス状を呈する箇所が見受けられる。

埋　土　埋土は３層に分層できる。流れ込みによる自然堆積が認められる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　調査地の東側は現在使用されている集落の山道が通り、この道で調査地は区切られている。本遺構の南端部はその現在の山道に接しており、地形に沿うような走向を呈しているため、かつての山道として使用された可能性が推測される。

ＳＤ－２４（挿図96）

位　置　調査地の北東端、Ｉ－４グリッドの中央から北西端にかけてにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がっていく標高184.9m～185.7m付近に位置する。

本遺構は土壙墓ＳＫ－３６が検出されたＳＳ－０１内に作られている。西側約2.5mにはＳＤ－１５が位置する。南側約９mには本遺構とつながるような位置関係にＳＤ－２３が位置し、本来は１つの遺構であった可能性が推測される。

形　態　東端部・南端部ともに攪乱を受けているために本来の規模は不明である。検出規模は、全長9.40m、幅0.50m～0.84m、深さは最大0.13mを測る。本遺跡内においては溝状遺構の走向は直線状のものがほとんどであるが、本遺構は弧を描くような平面形である。

埋　土　場所によって異なるが埋土は１～２層に分層できる。本遺構の埋土は暗褐色粘質土が基本である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　本遺構はＳＳ－０１内に作られていることから、同時期のものと考えられるが時期の特定は出来ない。

性　格　断定はできないが、ＳＤ－２３と同じく山道として使用された可能性が推測される。

ＳＤ－２５（挿図97）

位　置　調査地の中央部、Ｅ－５グリッドの東側で、緩やかに北東に向けて地形が下がっていく尾根上の標高189.2m～189.3m付近に位置する。

本遺構の東側約４mに主軸が多少ふれるものの平行してＳＤ－０６が位置し、南側約2.5mには直交するようにＳＤ－０８が位置する。

形　態　検出規模は、全長1.40m、幅0.36m、深さは最大0.15mを測る。遺構の走向はＮ－７°－Ｅである。

埋　土　埋土は３層に分層できる。基本となる埋土は暗茶褐色粘質土である。

遺　物　遺物は出土しなかった。

時　期　特定できない。

性　格　本遺跡の溝状遺構の走向は直交あるいは平行するものが多く、これらが何らかの意図をもって掘り巡らされているという可能性は否めないが、その性格は不明である。

第５節　段状遺構

ＳＳ－０１（挿図98・99　図版11・15）

位　置　調査地の東端、Ｊ－４グリッド南西部を中心とする標高186.0m付近に位置する。

本遺構は、調査地の東側に存在する谷部に向けて地形が下がり始める地形変換点の肩部付近に位置する。

本遺構の北東側約３mにＳＳ－０２、西側約２mにはＳＤ－１５があり、遺構内のテラス部にＳＤ－２４、穴６を切ってＳＫ－３６が位置する。

形　態　平面形は、検出面・底面ともに半円形状を呈し、断面形は「Ｌ」字状である。東側は現在の道を作る時に破壊を受けている。

検出規模は、北東－南西方向10.2m、東西3.4m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.6mを測る。

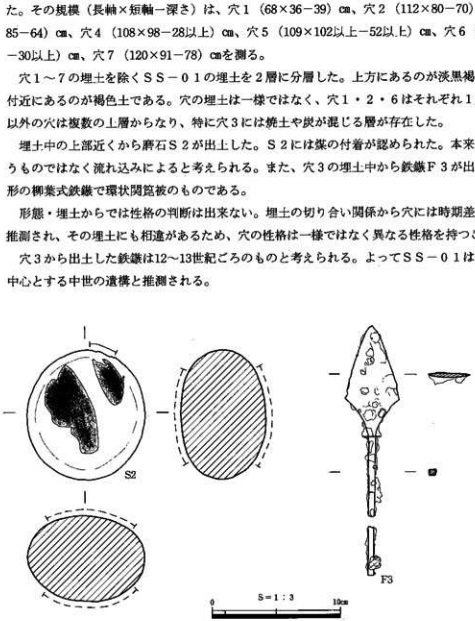
本遺構には西側の壁に沿って７つの穴が存在する。埋土の切り合い関係から、穴の掘り下げには時期差が存在しているが、穴の位置関係には規則的な配列が認められることからＳＳ－０１に伴う穴と考えた。その規模（長軸×短軸－深さ）は、穴１（68×36－39）cm、穴２（112×80－70）cm、穴３（94×85－64）cm、穴４（108×98－28以上）cm、穴５（109×102以上－52以上）cm、穴６（120以上×30以上－30以上）cm、穴７（120×91－78）cmを測る。

埋　土　穴１～７の埋土を除くＳＳ－０１の埋土を２層に分層した。上方にあるのが淡黒褐色土、北東側底部付近にあるのが褐色土である。穴の埋土は一様ではなく、穴１・２・６はそれぞれ１層であるが、それ以外の穴は複数の上層からなり、特に穴３には焼土や炭が混じる層が存在した。

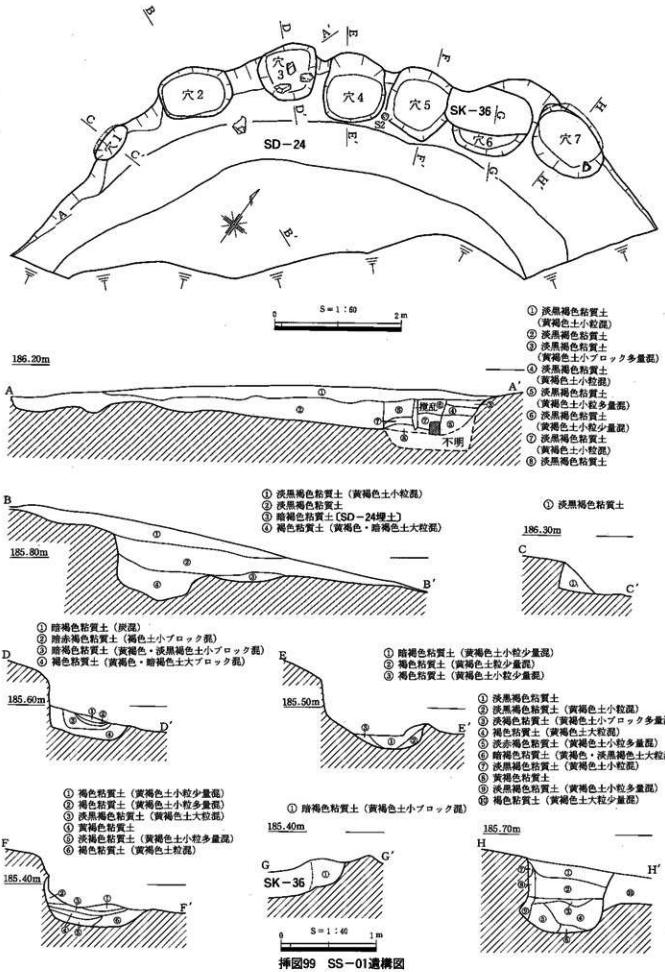
遺　物　埋土中の上部近くから磨石Ｓ２が出土した。Ｓ２には煤の付着が認められた。本来はＳＳ－０１に伴うものではなく流れ込みによると考えられる。また、穴３の埋土中から鉄鏃Ｆ３が出土した。Ｆ３は大形の柳葉式鉄鏃で環状関篦被のものである。

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。埋土の切り合い関係から穴には時期差が存在することが推測され、その埋土にも相違があるため、穴の性格は一様ではなく異なる性格を持つことも考えられる。

時　期　穴３から出土した鉄鏃は12～13世紀ごろのものと考えられる。よってＳＳ－０１は12～13世紀ごろを中心とする中世の遺構と推測される。



挿図98　SS－01遺物実測図



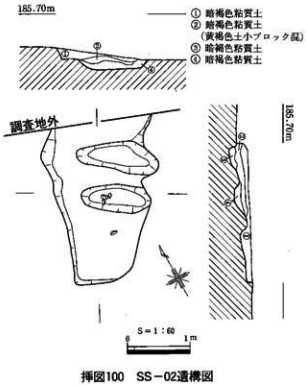
挿図99　SS－01遺構図

ＳＳ－０２（挿図100・101　図版11・15）

位　置　調査地の東端、Ｋ－４グリッド北西隅付近の標高185.2m付近に位置する。遺構の北側は調査地外に続いている。

本遺構は調査地の東側にある谷部に向けて地形が下がりつつある斜面途中にあり、谷に対し主軸が平行する。

本遺構の南西側約３mにはＳＳ－０１、東側約７mにＳＫ－２５が位置する。



挿図100　SS－02遺構図

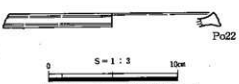
形　態　平面形は、検出面・底面ともにやや不整な長方形状を呈し、断面形は浅い「Ｌ」字状である。底面の西側には不整な起伏が認められる。

検出規模は、南北方向2.80m、東西方向は1.86m、残存する部分での底面までの最大の深さは0.19mを測る。底面には２つの舟底状のくぼみが存在する。その規模（長軸×短軸－深さ）は、北側が（131×50－19）㎝、南側が（109×44－15）㎝である。南側のくぼみ内には３つの石が存在した。

本遺構は、東側に壁体が存在しないため段状遺構と判断したが、遺構の東側は後世の削平を受けて段となっており、そのために土抗状の遺構の東側壁体が削平されている可能性も否定できない。

埋　土　埋土は全体で４層に分層した。このうち、③・④層はくぼみ部分の埋土である。

遺　物　埋土中より弥生土器の壺と推測されるロ縁部Po22が流れ込みの状態で出土した。Po22は表面の風化が激しいものである。



挿図101　SS－02遺物実測図

性　格　形態・埋土からでは性格の判断は出来ない。

時　期　出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉頃のものであるが、流れ込みの状態での出土のため遺構の時期を判断する資料とはならず、時期を特定することは出来ない。

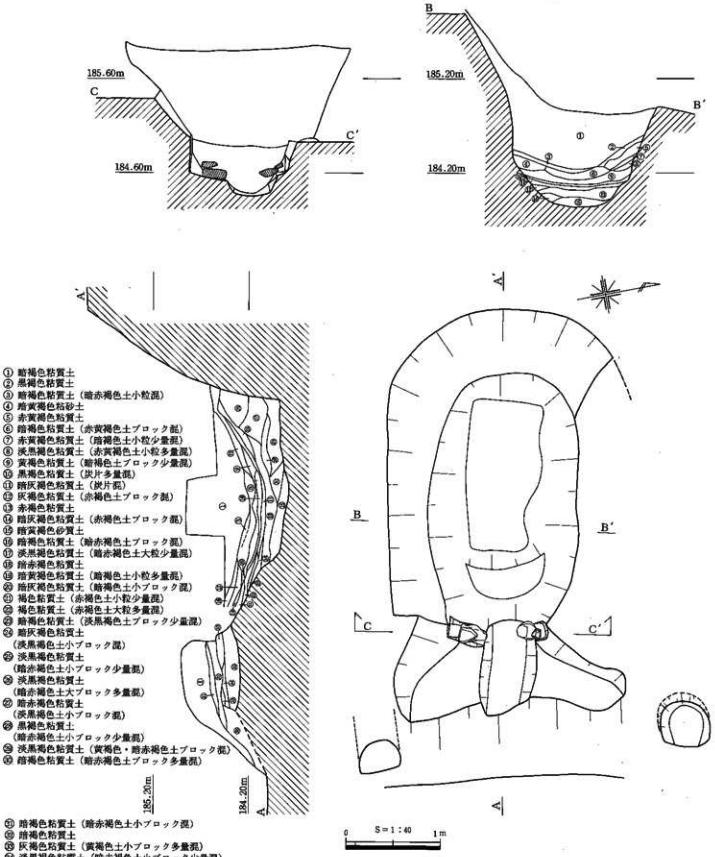
第６節　窯状遺構

窯状遺構（挿図102・103　図版12・16）

位　置　調査地の南東隅、Ｈ－８グリッド東端の標高185.9m付近に位置する。

形　態　窯状遺構は主軸がほぼ東西方向で、等高線に直交する主軸方向である。焚口は谷部に面する東側である。天井部はすでに崩落しており、調査前の遺構部分は窯体部分が窪地となっていて明瞭に識別できる状態であった。遺構北側は「クロボク」と呼ばれる黒褐色土を掘り込んで造られており、当初は土取り跡と考えて地山まで土を除去したため上部を調査することが出来なかった。なお、南側の遺構肩部には板状の石が存在していた。

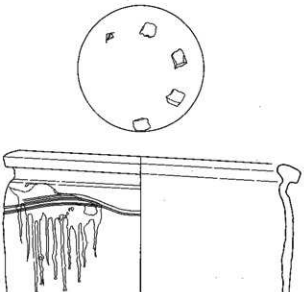
炭化室の形状は、焚口側に三日月形の段を経てほぼ水平な底面となる。底面は長方形であるが、壁体部では楕円形を呈し、炭化室の前面（東側）がすぼまって焚口となる。壁体は、縦横断面に表されるように底部がすぼまる逆「ハ」字状に立ち上がる。焚口の左右には幅約18㎝の「Ｌ」字状に掘り込まれた溝があり、そこでは２段に積まれた石が検出された。これより、焚口は積石で構築されていたものと推



挿図102　竈状遺構遺構図

測される。焚口前面は「ハ」字状に削り出してテラス部となっている。そのテラス部には炭化室に向けて溝状の掘り込みがある。テラス部を挟む南北には径約50cmのピットが１基ずつ存在した。北側のピットはいびつな碗状であったが、南側のピットは横穴状に掘り込まれていた。ともに土器・炭等の遺物は出土しなかった。

規模は、炭化室の最大長は上面3.30m・底面1.58m、最大幅は上面2.00m以上・底面0.80m、最大高は2.16m、焚口部の溝幅1.04m・最大高0.39m。テラス部の最大長0.75m・最大幅2.26m、溝状掘り込みの最大長0.99m・最大幅0.58m・最大高0.15mを測る。



挿図103　窯状遺構遺物実測図

埋　土　埋土を36層に分層した。底面直上の⑮層は細かな砂質土であり、炭化室内の水分を処理するためのものであろう。⑮層直上の⑭層は天井部が陥没したと考えられるもので下方が高熱を受けて赤色化している。両層の間に炭層は認められないが、炭焼き後には炭化室内を清掃したためと考えられ、複数回の使用が推測される。⑱・⑲・㉑・㉒層は流入土と天井崩落土が混じったと考えられる層であり、奥壁側から徐々に天井部の崩壊が進んでいったと推測される。なお、⑭層陥没後も天井部を修築して炭焼きを再開したことが⑨・⑫層からわかるが、⑧層に認められるように２度目に天井部が陥没するに及んでこの遺構は放棄されたものと推測される。

遺　物　埋土上面から甕Po23が出土した。埋土中からは図化はしていないが「大日本麦酒」銘のガラス瓶や陶磁器類が若干出土した。現代のゴミ穴となっていたようである。なお、遺構内ではないが焚口部の前面付近から「寛永通寶」Ｃ１が１点出土した。Ｃ１は裏面に「元」字がある。

時　期　操業年代は不明であるが、地元の方が知る限りではこの窯状遺構が使用されたことはないということであり、少なくとも大正期以前のものである。

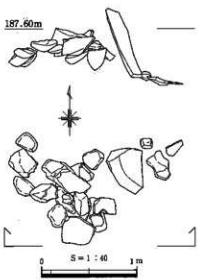
第７節　集石遺構

集石遺構（挿図104）

位　置　調査地の北端、Ｆ－１グリッド南西隅の標高187.6m付近に位置する。

本遺構は南側約１mにＳＫ－０１、西側約２mにＳＫ－１６が位置する。

形　態　集石は山桜の根元部分から検出された。長さ30cm程度のものを中心に20個以上の石が存在した。遺跡地は基本的に石が存在しない所であり、人為的に石が運ばれて来たことが推測される。表面がなめらかな転石もあるが、東側にある立てられた石のよ



挿図104　集石遺構遺構図

うに人為的に面取りされたものや角張るものも存在する。

遺　物　集石遺構からは土器の小片などがわずかに出土したが、図化できたものはない。なお、表土剥ぎ時に集石遺構の周辺から完形に近い陶磁器類が出土しており、関連する可能性がある。

性　格　地元の方によれば、「塞の神さん」と呼んで信仰の対象であったという。本来は石像なども有ったらしいが移転されている。

時　期　集石が形成された時期は不明である。

第８節　不明遺構

今年度の調査で不明遺構として扱った遺構は１基である。本遺構はマウンド状に盛土が施されたもので、その下からＳＫ－２８をはじめとする土坑が６基検出された。ここでは土坑群についても触れながら報告する。

ＳＸ－０１（挿図105　図版12）

位　置　調査地の南西端近く、Ｇ・Ｈ－７グリッドにまたがり、緩やかに北東から東に向けて地形が下がってからさらに傾斜が急になる地形変換地点の標高187.1m～188.1m付近に位置する。本遺構は北西半分をＳＤ－１８に切られている。またＳＫ－２８～３０・３２・３４・３５の土坑群を本遺構の下から検出した。

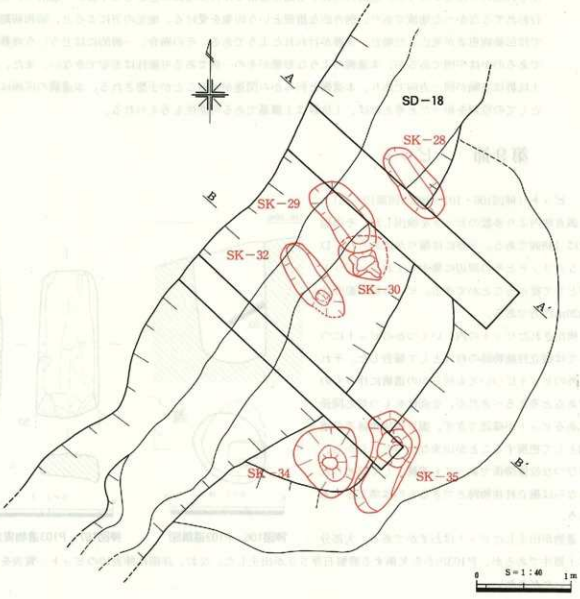
形　態　緩斜面から急斜面になる地形変換点にマウンド状の盛り土を施し、頂部をテラス状に造り出している。本遺構をＳＤ－１８が切っているため、本来の形態は確認できなかったが、検出面では楕円形を呈すると考えられる。規模は長軸5.50m×短軸3.67mであり、主軸はＮ－49°－Ｅである。

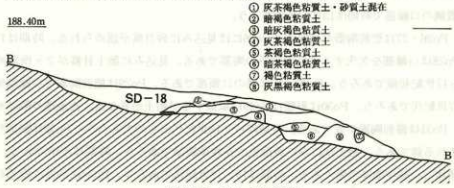
埋　土　ＳＤ－１８との切り合い部分を除くと、４～８層に分層できる。断面Ｂより、斜面に堆積している黒褐色系の土が本遺構の場合最下層に位置しており、その上に暗灰褐色粘質土あるいは灰褐色系の土が堆積している。これは土を盛って造り出されたことを示している。また断面Ａの①層はＳＫ－２８の埋土で、本遺構を切っていることが認められる。断面Ｂでは②層がＳＫ－３２の埋土にあたり、本遺構を部分的に切っていることが認められ、さらに砂質土が混在する①層が覆っている。付近の他遺構の埋土やいわゆる地山の性質から考えても砂質土は見受けられないことから、①層は人為的に盛られたものと考えられる。

遺　物　検出後と掘り下げ中に陶磁器の小片・鉄製品が出土したが図化することはできなかった。また人骨片が少量出土した。

時　期　本遺構に内包される土坑群の時期を含めて考えると、本遺構と切り合い関係が認められたのはＳＫ－２８とＳＫ－３２である。断面Ｂの①層が人為的に盛られたとするならば、本遺構の築造過程は二時期にわたることが考えられる。本遺構は、最初に盛土が施され、その後にＳＫ－３２が掘り込まれ、最後に断面Ｂ①層が盛られたと考えられる。それぞれの相対的な新旧関係は、ＳＫ－２８・２９・３０は主軸がほぼ同一方向であることからＳＫ－３２と同時期、ＳＫ－３４は盛土が施される以前、ＳＫ－３５はその検出が断面Ｂ①層除去後であるから、ＳＫ－３２等と時期は前後するだろうがほぼ同時期と考えられる。そして、本遺構は近世初頭に位置付けられるＳＤ－１８に切られることから、本遺構と土坑群はそれ以前の遺構ということができる。しかし、埋土の土質が周囲の溝状遺構と類似していることから、特定はできないが時期は近世初頭からそれほど遡らないと考えられる。

性　格　ＳＫ－３５出土の人骨片は、他所で茶毘に付してから二次的に埋納されたものとすでに考えたが、ＳＤ－１８の埋土中に炭片が混じる層が認められ、また本遺構内でも人骨片が少量出土していることから、本遺構内で茶毘に付された可能性が考えられる。盛土は二時期にわたると考えたが、最初の盛土の後に遺体を茶毘に付し、二度目の盛土は砂質土を含む土質から考えて、清める意味を込めて砂をまくことが





挿図105　SX－01遺構図

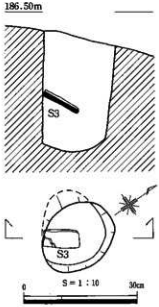
なされたのではなかろうか。遺跡の所在する鵜田部落では古来埋葬形態として土葬が一般的で、火葬は行われてこなかった地域であり、例外的な措置という印象を受ける。地元の方によると、昭和初期頃までは伝染病患者が死亡した場合、火葬が行われたようである。その場合、一般的にはどういう埋葬形態であるのかは不明であるが、本遺構のような形態がその一例である可能性は否定できない。また、他の土抗群は主軸が同一方向であり、本遺構と何らかの関連があることが予想される。本遺構の区画は墓域としての役割を担ったと考えれば、土抗群は土壙墓である可能性も考えられる。

第9節　　ピット

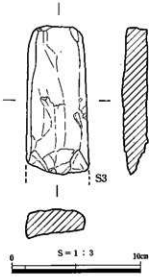
ピット（挿図106・107・108　図版12・16）

調査地内より多数のピットを検出した。その総数は 148個である。分布には偏りが認められ、D－5グリッドとその周辺に集中しており、ピット群として捉えることができる。ピット群の範囲は約20m四方である。

検出されたピットの内、いくつかのピットについては掘立柱建物跡の柱穴として報告した。それ以外のピットについても何らかの遺構に伴うものであると考えるべきだが、企画性をもつ対応関係にあるピットが確認できず、掘立柱建物跡等の遺構として把握することが出来なかった。しかし、いびつな位置関係であっても遺構として認められるならば掘立柱建物跡とできるものは増えるであろう。



挿図106　P103遺構図



挿図107　P103遺物実測図

遺物が出土したピットはわずかである。大部分は土器片であるが、P103内から欠損する磨製石斧S３が出土した。なお、詳細は挿表10のピット一覧表を参照していただきたい。

第10節　遺構外の遺物

遺構外出土遺物（挿図109・110・111　図版16・17・18）

個々の遺物の詳細は挿表11～13の遺物観察表に譲り、ここでは概略について述べる。

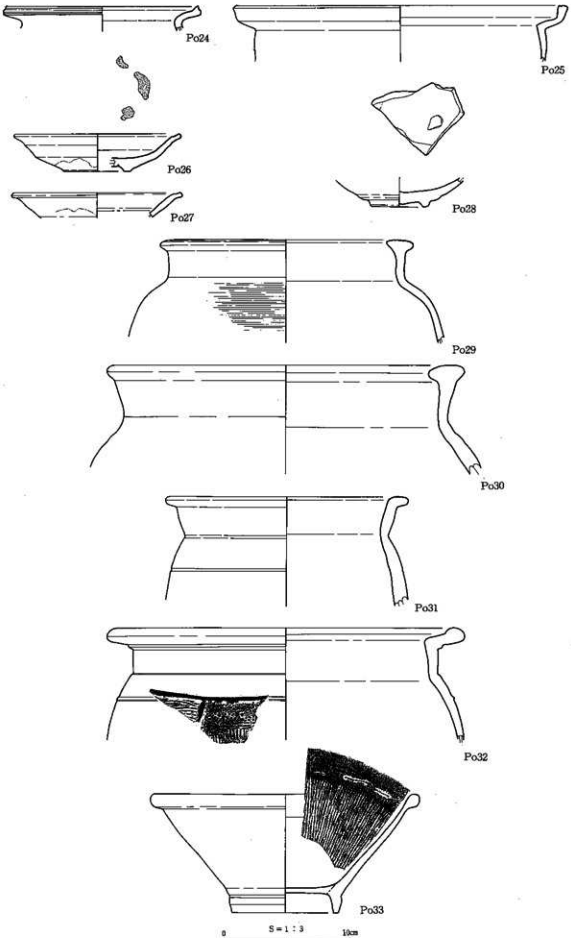
出土遺物の量は多くなく、大部分が近世から近代ごろを中心とする陶磁器である。

Po24は弥生土器の口縁部で時期は弥生時代中期中葉である。

Po25は瓦質鍋の口縁部で時期は13世紀代であろう。

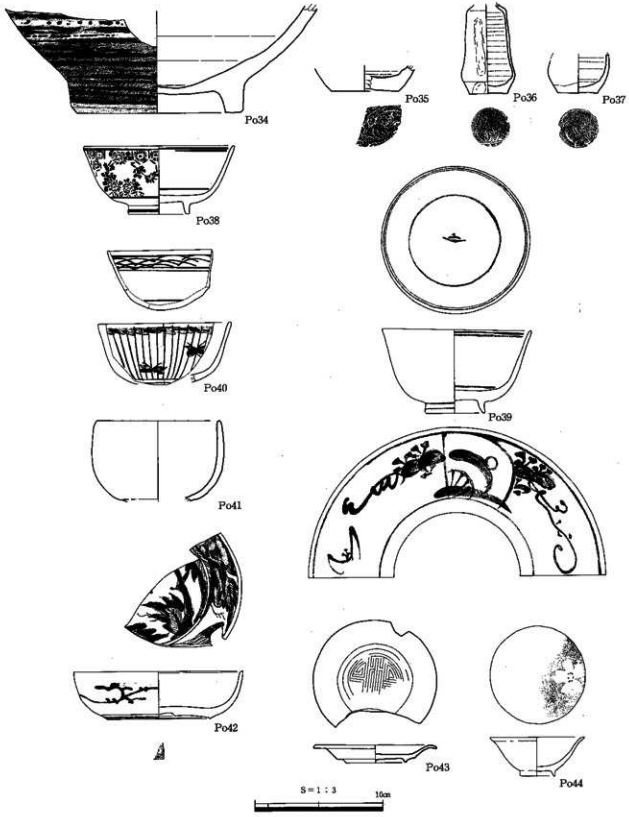
陶器では、Po26・27は肥前陶器の溝縁皿でPo26には見込みに砂目痕が認められる。時期は17世紀前半代と考えられる。Po28は口縁部を欠失する皿で肥前系の陶器である。見込みに胎土目痕が２ヶ所認められる。時期は16世紀末から17世紀初頭であろう。Po29・30は甕の口頸部である。Po29は肥前陶器で口縁端部を内外に拡張する。時期は17世紀代であろう。Po30は形態はPo29に類似するが胎土が異なる。在地窯の製品か。時期は17世紀代であろう。Po31は備前陶器の壺である。時期は17～18世紀代のものであろう。Po32は胴部外面に型押しによる文様が施される鉢である。胎土はにぶい黄橙色で在地窯製品であろう。時期は不明である。Po33は密な鉢目が施される擂鉢で、製作地は不明である。時期は18～19世紀代であろう。Po34は外面に刷毛目状の白色釉が施

挿図108　ピット位置図



挿図109　遺構外出土遺物実測図(1)

された大鉢の底部である。製作地は不明で、時期は18～19世紀代であろう。Po35は回転糸切り痕が残る平底の底部である。肥前陶器であり、時期は18～19世紀代か。Po36・37は陶器製の茶入れである。ともに底部は回転糸切りされている。江戸時代のものである。

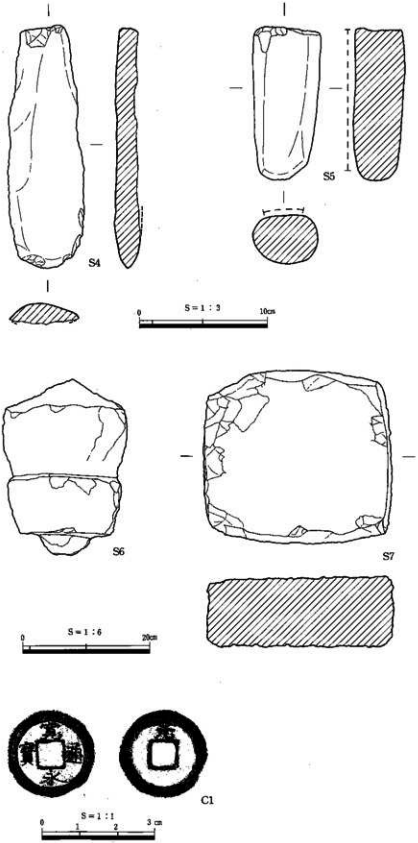


挿図110　遺構外出土遺物実測図(2)

磁器では、Po38～41は碗である。Po38は外面の文様の草花を型紙摺りによって描き、見込みは蛇ノ目釉剝ぎされる。肥前磁器の染付で17世紀末～18世紀代のものであろう。Po39は外面に扇と草花を描くものである。多くは線書きであるが一部に淡みが使用される。肥前磁器の染付で18～19世紀のものであろう。Po40は外面に蝶らしき文様を描く。肥前系の陶胎染付で18世紀以降のものであろう。Po41は口縁部が直立するものである。肥前系の陶胎青磁で18世紀代のものであろう。Po42は五寸皿で、口縁部が短く直立気味になるものである。内面の意匠は良く分からないが枝葉状のものがかなり密に描かれる。外面にはやや退化した唐草文を巡らせる。高台は蛇ノ目凹形高台で、高台内の裏銘は二重方形枠内に「福」、いわゆる渦福である。時期は18世紀代であろう。Po43は見込みに雷文状の陰刻が施されている。肥前系の陶胎白磁で、18～19世紀代のものであろう。Po44は内面に吹墨により桜の花を描く猪口である。肥前磁器で17世紀前半のものであろう。

Ｓ４は剝離の認められる磨製石斧である。刃部は残るが調整は粗い。Ｓ５は折れた磨石である。擦り面は平滑で明瞭である。Ｓ６・７は集石遺構の近くにあった五輪塔である。Ｓ６は空風輪部である。空輪・風輪はその側面が直線状であるが、空輪部上方のとがりは大きくないことから室町時代後期～末のものであろう。Ｓ７の地輪は幅に対して高さが低い古い要素があり、室町時代後期でも早い段階のものであろう。よってＳ６・７は時期が異なる可能性がある。

Ｃ１は1741年を初鋳年とする寛永通寶である。



挿図111　遺構外遺物実測図(3)

第11節　まとめ

鵜田中峯山遺跡から出土した遺物は多くはないが、注目すべき特徴的な遺物が遺構に伴って数点出土している。遺物については各遺構本文中でも触れているが、ここで改めて触れておきたい。

ＳＫ－２１から土師質土器の碗Po８が出土している。ＳＫ－２１は土壙墓の可能性を考えていたが、リン・カルシウム分析の結果ではその可能性がほぼ否定された土坑である。鳥取県における古代・中世の土器の様相は明確ではなく、県内の編年も確立していない。そのため、出土したPo８についても時期を明確に出来ないが、日本海側で土器様相が類似するとの指摘[1]がある。そこで、石川県立埋蔵文化財センターが調査・報告されている漆町遺跡の編年を援用することにする。Po８は口径16.4cm、底部径6.6cm、器高5.4cmを測る。形態は、口縁部が内湾することなく直線的に外方に伸びるもので、底部は静止糸切りである。この土器は漆町遺跡編年で「D2タイプ」とされているものに該当[2]する。このD2タイプは10世紀前半から11世紀前後にかけてに時期が限定されるとの年代観が与えられており、鵜田中峯山遺跡出土のPo８は形態が小型化していないことから10世紀でも中葉頃を中心とする土器と推測される。この時期は伯耆国庁跡の第３段階[3]に継続する時期に当たる。しかし、伯耆国庁跡の第３段階では、「法量が小さくなり、口縁部の形態は丸みを増して[3]」いく傾向が指摘されており、Po８とは様相を異にしている。よって、この上器は律令期の上師質上器生産とは系譜が異なるのではなかろうか。

ＳＫ－２０から鉄製の鎌Ｆ１が出土した。Ｆ１は土坑底面直上に刃先を南に向けて置かれていた。遺構本文中でも触れたが、この鉄鎌は墓に伴うと考えられるものである。類例としては長瀬高浜遺跡のＳＸ′15で底面直上から鉄鎌や鉄釘に伴って人骨や歯が出土している例があり、時期は中世期と考えられている。[4]

古墳時代の鉄製品については、古墳出土の鉄製品を中心として多くの資料があり、数多くの研究が発表されている。しかし、古代以降の鉄製品については必ずしも十分な研究が行われているとは言い難く、古代以降の鉄鎌についてもその形式分類・編年が東日本で精力的に進められている[5]ものの、西日本では資料的制約もあり十分な検討は加えられていない。鉄鎌においては、刃部が破損しても研ぎ直して再利用されるため出土した時点の形態は製作時の形態とは異なる可能性を考慮する必要があり、形式分類には一層の注意が必要である。

古代の鉄鎌は、鍛造で無茎、茎部折返しを有するもので、有茎鎌は平安時代に至ってもまだ一般的ではなかったらしい。[6]中世以降の鉄鎌については、断片的な資料は存在するものの良好な資料が少なく、十分な検討がなされているとは言えないのが現状であり、「中世になるとほぼ今日の鎌の原型が完成した[6]」ため、その形式分類は困難となっている。鵜田中峯山遺跡出土の鉄鎌も形態から中世以降の遺物であると推測されるが、時期がいつまで下がるのか不明である。

ＳＫ－３７から鋳造の鉄鍋Ｆ２が出土した。口径は推定31.2cm、残存する器高は12.5cmである。この遺物は検出・取り上げまでは良好な状態を保っていたのであるが、取り上げ後急激に腐食が進み、破片の多くが径１cm前後の粒状に割れてしまった。

Ｆ２は口縁部に屈曲が付くものであるが底部は残っていない。河内型鉄鍋で五十川伸矢氏の分類の鍋Ａ[7]に当たる。時期は13世紀後半から14世紀にかけての幅で捉えられる[8]ものであるが、口縁部の形態は古い形態を呈する。鉄鍋は破損した場合には回収されて素材として再利用されたため遺存資料が少なく、そのうち全体形が判明するものはさらに限られる。類例は西日本に散発的に存在するようであるが、鳥取県内には管見の限りでは見当たらないようであり、本例が県内唯一の例であろう。島根県では富田川河床遺跡の建物跡ＳＢ031から鍋Ａが１点・鍋Ｂが２点まとまって出土[9]している。富田川河床遺跡から出土した鍋Ａは、口縁部の屈曲がほとんど無くなっているもので、鵜田中峯山遺跡出土のＦ２よりも時期の下るものであり、このＦ２は山陰地方に搬入された鉄鍋の初期の遺物の１例であろう。

ＳＳ－０１の穴３から鉄鎌Ｆ３が出土した。西日本においては、鉄鎌の研究は古墳出土の鉄鎌を対象とするものがほとんどで、古代以降の鉄鎌を対象とした検討はほとんどなされていない。古代以降の鉄鎌については、関東地方を中心に集落跡から出土したまとまった資料に基づいた型式分類・編年案が提示[10]されている。しかし、中

世の鉄鎌は資料数が少なく、[11]型式分類・編年は十分なものとはなっていない。そのうえ、関東地方を中心とする東日本の編年をそのまま西日本にも適用できるのかについては検討が必要である。

本例については鎌身部が大型であり、茎部が長くなっていること、篦被が環台形を呈することから鎌倉時代以降の遺物と推測されるが明確にはできない。

註

（1）橋本久和「各地の土器様相　山陰」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995

（2）田嶋明人「９世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『諏町遺跡 Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター　1986

（3）『伯耆国庁跡発掘調査概報（第５・６次）』倉吉市教育委員会　1979

（4）『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 Ⅳ』財団法人鳥取県教育文化財団　1982

（5）山口直樹「関東地方土師時代後・晩Ⅰ・晩Ⅱ期における農具について」『駿台史學 45』　1978
鶴間正昭「武蔵国における鉄鎌の形式分類とその編年的予察」『法政考古学 10』　1985
古庄浩明「古代における鉄製農工具の所有形態」『考古学雑誌 79－3』　1995

（6）松井和幸「鉄鎌について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会編　1993

（7）五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告 第46集』　1992

（8）菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告 第19集』　1989

（9）五十川伸矢氏の御教示による
『富田川河床遺跡発掘調査報告書 Ⅲ』島根県教育委員会　1983

（10）平野修「奈良・平安時代集落出土の鉄鎌をめぐる若干の問題」
『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第１集』　1989
津野仁「古代・中世の鉄鎌」『物質文化 54』　1990
松崎元樹「丘陵地における古代鉄器生産の諸問題」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 Ⅷ』　1990
飯塚武司「鉄鎌」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 Ⅹ』　1991

（11）類例の存在を知った。鳥取市にある渡辺美術館に、出土地不明であるが形態・規模がよく類似する鉄鎌が１点所蔵されている。

挿表６　竪穴住居跡一覧表

（　）推定値

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	形態	規模（m）	床面積（㎡）	残存壁高（m）	主柱穴（本）	遺物	時期
SI－01　A	26・27	5・13	F－3・4 G－3・4	円形	(6.8)×(6.8)	36.2	0.08	6	弥生底部	
SI－01　B								6		
SI－02　A	28・29	5・13	F・G－3	円形	(7.1)×(6.8)	37.8		6	弥生甕	弥生中期中葉
SI－02　B								4	土器片	

挿表７　掘立柱建物跡一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	桁×梁（間）	規模（桁）（m）		規模（梁）（m）		主軸方向	遺物	時期
SB－01	30	6	G・H－3	1×1	4.3	4.1	3.9	3.8	N－24°－E	土器片	弥生時代？
SB－02	31	6	E・F－2	3×1	4.2	4.1	2.3	2.1	N－19°－E	土器片	弥生時代？
SB－03	32	6	D・E－2	3×1	7.7		3.7		N－40°－E		

挿表8　土坑・土壙墓一覧表

（　）残存値

遺構名	挿図番号	図版番号	グリッド	平面形	規模(長軸−短軸)cm 検出面	規模(長軸−短軸)cm 底面	深さ(cm)	長軸方向	遺物	備考
SK−01	33		F−2	楕円形	90−41	45−25	75	N−42°−E		落し穴
SK−02	34		F−2	隅丸長方形	95−47	75−36	97	N−36°−E		落し穴
SK−03	35		E−2	不整な楕円形	107−54	90−25	20	N−81°−E		
SK−04	36		E−2・3	隅丸長台形	114−54	107−48	32	N−25°−E		土壙墓
SK−05	37	7	G−2	隅丸長方形	130−70	100−45	102	N−15°−W		落し穴
SK−06	38		G−2	楕円形	127−93	91−78	92	N−13°−E		土壙墓
SK−07	39		F−3	隅丸長方形	65−52	50−38	31	N−32°−E		
SK−08	40	7	F−5	隅丸長方形	114−87	92−64	107	N−38°−E		落し穴
SK−09	41・42	7・13	F−2	楕円形	99−63	87−61	35	N−70°−W	陶器皿	土壙墓
SK−10	43		G−2	楕円形	116−86	84−56	25	N−S	土器片	
SK−11	44・45	13	G−3	不整形	134−99	117−65	20	N−27°−E	弥生甕	
SK−12	46・47	8・13	G−2	不整な楕円形	177−57	145−36	29	N−68°−W	弥生甕・壺	
SK−13	48		H−6	隅丸長方形	128−95	94−62	108	N−46°−E	土器片	落し穴
SK−14	49		D−4	楕円形	74−60	40−34	19	N−19°−E		
SK−15	50		F−2	隅丸長方形	68−50	55−32	32	N−11°−W		
SK−16	51		F−2	隅丸長方形	95−68	73−56	40	N−55°−E		
SK−17	52		F−7	隅丸長方形	97−64	87−48	14	N−24°−W		
SK−18	53		G−6	楕円形	81−68	45−35	38	N−72°−W		
SK−19	54		F−2	楕円形	50−39	33−24	16	N−S		
SK−20	55・56	8・13	C・D−5	隅丸長方形	119−80	94−57	30	N−17°−E	鉄鎌	土壙墓
SK−21	57・58	8・14	C−6	隅丸三角形	81−68	61−52	43	N−35°−W	土師質土器碗	
SK−22	59		G−7・8	楕円形	117−59	84−22	42	N−50°−E		
SK−23	60		E・F−5	隅丸長方形	110−64	66−48	35	N−78°−W		
SK−24	61・62	14	K−4	隅丸長方形	96−65		45	N−57°−W	土人形、陶器灯明皿 陶器・磁器片	
SK−25	63・64	14	K−4	隅丸長方形	104−68		42	N−46°−W	陶器油壺 陶器・磁器片	
SK−26	65		G−5	楕円形	83−41	54−21	28	N−50°−W		
SK−27	66		C−5	楕円形	108−90	90−71	36	N−64°−W		
SK−28	67・105		H−7	楕円形	88−40	67−18	14	N−33°−W		
SK−29	68・105		H−7	楕円形	86−46	63−25	23	N−35°−W		
SK−30	69・105		H−7	円形	59−(47)	23−13	33	N−60°−W		
SK−31	70		G−2	楕円形	75−57	55−31	24	N−S		
SK−32	71・105		H−7	楕円形	95−36	72−19	14	N−39°−W		
SK−33	72		C−4	半円形	100−(68)	80−(50)	26	N−66°−E		
SK−34	73・105		H−7	隅丸三角形	74−68	38−30	22	N−6°−W		
SK−35	74・105	9	H−7	いびつな楕円形	107−60	91−32	24	N−29°−E	人骨	
SK−36	75	9	J−4	楕円形	136−90	115−75	60	N−65°−E	人骨	土壙墓
SK−37	76・77	9・14	C−6	円形	47−41	27−24	12	N−S	鉄鍋	

挿表9　溝状遺構一覧表

遺構名	挿図番号	図版番号	規模（m）全長×幅－深さ	主軸方向	遺物	時期
SD－01	78・80	10・14	31.80×0.40～1.80－0.45	N－30°－E	陶器土瓶・陶器土瓶蓋・砥石	近世
SD－02	79・80	15	9.60×0.60～0.84－0.15	N－36°－E	弥生壷	
SD－03	80		11.00×0.60～0.90－0.15	N－30°－E		
SD－04	80		3.80×0.44～0.60－0.08	N－87°－W		
SD－05	80		6.40×0.34～0.90－0.19	N－75°－W		
SD－06	81		7.80×0.30～0.70－0.20	N－20°－E		
SD－07	80		1.90×0.50　－0.20	N－73°－W		
SD－08	81		36.00×0.24～1.60－0.25	N－67°－W N－38°－E	土器片	
SD－09	81		21.10×0.30～0.80－0.25	N－47°－W	土器片	
SD－10	81		5.30×0.40～0.50－0.03	N－24°－E		
SD－11	82		4.40×0.24～0.74－0.15	N－67°－W		
SD－12	84		12.20×0.18～0.36－0.08	N－68°－W		
SD－13	83・85	15	12.30×0.30～0.90－0.08	N－59°－W	陶器	近世
SD－14	87		1.46×0.30～0.42－0.20	N－25°－E		
SD－15	86・88	10・15	27.60×0.40～1.40－0.45	N－21°－E	陶器	近世
SD－16	89		2.80×0.20～0.34－0.08	N－15°－E		
SD－17	90		5.44×0.40～0.84－0.20	N－40°－E		
SD－18	91・92	12・15	27.00×0.50～2.10－0.60	N－55°－E	肥前陶器・陶器壷・磁器・鉄片	近世
SD－19	91		4.10×0.30～0.40－0.08	N－67°－W		近世
SD－20	91・93	15	8.40×0.34～0.60－0.15	N－58°－E	陶器	近世
SD－21	91		10.20×0.30～0.90－0.27	N－49°－E		近世
SD－22	94		4.90×0.40～0.52－0.05	N－51°－E		近世
SD－23	95		15.80×0.40～0.86－0.42	N－12°－E		
SD－24	96		9.40×0.50～0.84－0.13	弧状		
SD－25	97		1.40×0.36　－0.15	N－7°－E		

挿表10　ピット一覧表

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土色・土質	柱根有無	備考
1	C－5	19×18－25	1	暗褐色粘質土（黄褐色土小粒混）	×	
2	C－5	16×15－13	1	淡黒褐色粘質土（黄褐色土小粒混）	×	
3	C－5	24×22－17	1	淡黒褐色粘質土（褐色土小ブロック少量混）	×	
4	C－6	21×18－28	1	黒褐色粘質土	×	
5	C－6	35×24－33	1	黒褐色粘質土	×	
6	C－6	21×19－21	1	黒褐色粘質土	×	
7	C－6	20×19－23	1	黒褐色粘質土	×	
8	C－6	31×23－40	1	褐色粘質土	×	
9	C－6	28×25－13	1	暗褐色粘質土（黄褐色・淡黒褐色土小ブロック混）	×	
10	C－6	22×18－22	3	①黒褐色粘質土 ②黄褐色粘質土 ③黒褐色粘質土	×	
11	C－8	23×21－17	1	黒褐色粘質土	×	
12	C－8	25×22－25	1	黒褐色粘質土	×	
13	C－8	25×20－32	1	黒褐色粘質土	×	
14	C－8	25×20－30	1	黒褐色粘質土	×	

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土色・土質	柱根有無	備考
15	D－2	29×24－20	1	黒褐色粘質土	×	
16	D－2	22×21－21	1	暗褐色粘質土	×	
17	D－2	37×35－60	1	暗褐色粘質土	×	
18	D－3	27×24－60	2	①黄褐色粘質土 ②暗褐色粘質土	×	
19	D－3	15×14－15	1	淡黒褐色粘質土	×	
20	D－3	17×15－16	1	淡黒褐色粘質土	×	
21	D－4	21×19－18	1	黒褐色粘質土	×	
22	D－4	35×21－24	3	①淡黒褐色粘質土 ②淡褐色粘質土 ③淡黒褐色粘質土	×	
23	D－5	26×22－19	1	暗褐色粘質土	×	
24	D－5	25×25－29	1	黒褐色粘質土（暗褐色土小ブロック少量混）	×	
25	D－5	21×20－21	1	暗褐色粘質土（褐色土大粒混）	×	
26	D－5	24×21－19	1	黒褐色粘質土（黄褐色土小粒少量混）	×	
27	D－5	21×19－16	1	淡黒褐色粘質土	×	
28	D－5	22×20－16	1	暗褐色粘質土	×	
29	D－5	23×19－27	1	黒褐色粘質土	×	
30	D－5	24×18－23	1	黒褐色粘質土	×	
31	D－5	22×18－18	1	淡黒褐色粘質土（黄褐色土粒少量混）	×	
32	D－5	25×19－26	1	黒褐色粘質土（黄褐色土小ブロック少量混）	×	
33	D－5	25×20－22	1	淡黒褐色粘質土（暗褐色土ブロック混）	×	
34	D－5	23×20－23	1	黒褐色粘質土	×	
35	D－5	22×16－18	1	黒褐色粘質土	×	
36	D－5	19×18－22	1	黒褐色粘質土	×	
37	D－5	21×20－14	1	黒褐色粘質土	×	
38	D－5	22×19－29	1	黒褐色粘質土（黄褐色土小粒混）	×	
39	D－5	22×20－20	1	淡黒褐色粘質土	×	
40	D－5	18×16－20	1	暗褐色粘質土	×	
41	D－5	27×26－17	1	淡黒褐色粘質土	×	
42	D－6	22×20－25	1	黒褐色粘質土	×	
43	D－6	28×21－31	1	淡黒褐色粘質土	×	
44	D－6	20×20－20	1	暗褐色粘質土	×	
45	D－6	24×20－19	1	黒褐色粘質土	×	
46	D－6	19×15－16	2	①淡黒褐色粘質土 ②暗褐色粘質土（黄褐色土小粒多量混）	×	
47	D－6	30×22－31	1	黒褐色粘質土	×	
48	D－6	20×20－27	1	黒褐色粘質土	×	
49	D－6	20×19－15	1	黒褐色粘質土	×	
50	D－6	21×17－28	1	黒褐色粘質土	×	
51	D－6	19×17－24	1	淡黒褐色粘質土	×	
52	D－6	25×20－19	1	淡黒褐色粘質土（黄褐色土大粒少量混）	×	
53	D－6	26×25－33	1	黒褐色粘質土	×	
54	D－6	24×19－15	1	淡黒褐色粘質土	×	
55	D－6	35×33－30	1	黒褐色粘質土	×	
56	D－6	24×18－19	1	褐色粘質土	×	
57	D－6	22×17－16	1	暗褐色粘質土（黄褐色土粒少量混）	×	
58	D－6	22×20－12	1	暗褐色粘質土	×	
59	D－6	31×30－28	1	褐色粘質土（淡褐色土小ブロック少量混）	×	
60	D－6	24×21－24	1	黒褐色粘質土	×	
61	D－7	32×25－16	1	暗褐色粘質土	×	

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径－深さ	層	土　色・土　質	柱根 有無	備考
62	D－7	22×21－20	1	黒褐色粘質土	×	
63	D－7	30×24－28	1	黒褐色粘質土	×	
64	D－8	22×19－27	1	黒褐色粘質土	×	
65	D－8	16×14－16	1	黒褐色粘質土	×	
66	D－8	17×15－19	1	黒褐色粘質土	×	
67	E－2	18×15－13	1	暗褐色粘質土	×	
68	E－2	31×26－42	1	暗褐色粘質土（褐色土混）	×	
69	E－2	20×19－20	1	暗褐色粘質土（黄褐色土小ブロック少量混）	×	
70	E－2	26×22－13	1	暗茶褐色粘質土	×	
71	E－3	18×17－28	1	淡黒褐色粘質土	×	
72	E－4	22×22－17	1	淡黒褐色粘質土	×	
73	E－4	16×14－13	1	暗褐色粘質土	×	
74	E－4	28×21－30	1	黒褐色粘質土（黄褐色土ブロック少量混）	×	
75	E－4	18×17－23	1	淡黒褐色粘質土	×	
76	E－4	16×16－23	1	黒褐色粘質土	×	
77	E－4	22×18－25	2	①黒褐色粘質土 ②暗褐色粘質土（褐色土粒混）	×	
78	E－5	16×16－20	1	暗褐色粘質土	×	
79	E－5	29×27－28	1	淡黒褐色粘質土	×	
80	E－5	25×23－20	1	淡黒褐色粘質土	×	
81	E－5	20×18－26	1	黒褐色粘質土	×	
82	E－5	21×20－19	1	暗褐色粘質土	×	
83	E－5	21×19－33	1	黒褐色粘質土	×	
84	E－5	25×25－22	1	黒褐色粘質土	×	
85	E－5	20×18－38	1	黒褐色粘質土	×	
86	E－5	25×21－31	1	黒褐色粘質土（暗茶褐色土小ブロック少量混）	×	
87	E－5	23×19－28	1	淡黒褐色粘質土	×	
88	E－5	23×16－23	1	淡黒褐色粘質土	×	
89	E－5	17×16－15	1	暗褐色粘質土	×	
90	E－5	22×22－29	1	暗褐色粘質土	×	
91	E－5	22×21－29	1	暗褐色粘質土	×	
92	E－6	20×19－11	1	暗褐色粘質土	×	
93	E－6	18×18－28	1	黒褐色粘質土	×	
94	E－6	14×13－15	1	淡黒褐色粘質土	×	
95	E－6	21×16－23	1	黒褐色粘質土	×	
96	E－6	20×16－18	1	黒褐色粘質土	×	
97	E－6	34×31－22	1	褐色粘質土	×	
98	E－7	22×18－23	1	黒褐色粘質土	×	
99	E－7	20×18－19	1	黒褐色粘質土	×	
100	E－7	22×21－27	1	黒褐色粘質土	×	
101	F－1	24×20－30	1	黒褐色粘質土	×	
102	F－2	22×18－33	1	暗褐色粘質土	×	
103	F－2	20×18－29	1	黒褐色粘質土	×	
104	F－2	20×18－23	1	暗褐色粘質土	×	
105	F－2	19×18－22	1	黒褐色粘質土	×	
106	F－2	30×27－21	1	暗灰褐色粘質土	×	
107	F－2	22×20－10	1	暗灰褐色粘質土	×	
108	F－2	23×20－15	1	暗褐色粘質土	×	
109	F－3	14×13－16	1	淡黒褐色粘質土	×	
110	F－4	23×21－17	1	暗褐色粘質土（黒褐色・黄褐色土小ブロック混）	×	
111	F－4	28×24－45	1	黒褐色粘質土	×	

柱穴番号	グリッド	規模 cm 長径×短径−深さ	層	土色・土質	柱根 有無	備考
112	E−5	20×19−27	1	暗褐色粘質土	×	
113	F−6	21×16−14	1	淡黒褐色粘質土	×	
114	F−7	19×16−18	1	淡黒褐色粘質土	×	
115	G−1	20×19−13	1	暗褐色粘質土	×	
116	G−1	27×23−23	1	黒褐色粘質土	×	
117	G−1	19×17−28	1	黒褐色粘質土	×	
118	G−2	31×31−34	1	黒褐色粘質土（褐色土小ブロック多量混）	×	
119	G−2	29×23−62	1	暗褐色粘質土	×	
120	G−3	18×17−20	1	暗褐色粘質土	×	
121	G−3	19×19−18	1	淡黒褐色粘質土	×	
122	G−3	24×21−13	1	暗褐色粘質土	×	
123	G−3	23×15−21	1	暗褐色粘質土	×	
124	G−3	28×21−11	1	褐色粘質土	×	
125	G−3	24×22−16	1	暗褐色粘質土	×	
126	G−4	22×19−9	1	黒褐色粘質土	×	
127	G−4	22×19−15	1	暗褐色粘質土（黄褐色土小ブロック少量混）	×	
128	G−4	28×24−24	1	淡黒褐色粘質土	×	
129	G−5	29×24−19	1	黒褐色粘質土	×	
130	G−5	21×20−35	1	黒褐色粘質土（黄褐色土ブロック少量混）	×	
131	G−5	21×21−20	1	淡黒褐色粘質土	×	
132	G−7	23×20−17	1	黒褐色粘質土	×	
133	H−1	21×16−20	1	黒褐色粘質土	×	
134	H−1	27×22−17	1	黒褐色粘質土	×	
135	H−2	23×19−13	1	暗褐色粘質土	×	
136	H−2	26×25−24	1	黒褐色粘質土	×	
137	H−3	27×20−19	1	淡黒褐色粘質土	×	
138	H−3	22×19−15	1	淡黒褐色粘質土	×	
139	H−3	22×22−27	1	淡黒褐色粘質土（黄褐色土小粒少量混）	×	
140	H−4	20×19−13	1	暗褐色粘質土	×	
141	H−6	20×19−15	1	黒褐色粘質土	×	
142	H−7	50×40−27	2	①褐色粘質土（暗灰褐色土混） ②暗灰褐色粘質土	×	
143	I−4	21×17−17	1	淡黒褐色粘質土	×	
144	I−4	27×23−23	1	淡黒褐色粘質土	×	
145	I−4	23×23−48	1	淡黒褐色粘質土	×	
146	I−5	20×15−15	1	淡黒褐色粘質土	×	
147	J−3	22×22−14	1	暗褐色粘質土	×	
148	J−4	21×21−28	1	暗褐色粘質土（褐色土小ブロック多量混）	×	

挿表11　土器・土製品観察表

SI−01

遺物番号 検出番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1 26 13	156	弥生土器 底部	⑥ 5.6△ ⑤ 4.8底	平底。	内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗 細砂粒含む	良	内面暗灰黄色 外面明褐色	表−9

SI−02

遺物番号 検出番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2 29 13	170	弥生土器 甕	⑥16.8底 ⑤ 1.0△	口縁端部を上方に拡張し、外面に1条の凹線と刻み目を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに褐色	外面スス付着 表−7

SK－09

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3 42 13	125	縄文時代 鉢	①13.5 ③3.0 ④4.5	口縁端部近くで段をもつ構造。内面底部3ヶ所に砂目痕が残る。	内面—回転ナデ。施釉。 外面—回転ナデ。高台付近まで施釉。高台左回転での削り出し。	密	良好	内外面ともに明赤褐色	清水－4

SK－11

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4 45 13	119 130	弥生土器 壺	①16.7欠 ⑤5.2△	「く」の字状に屈曲する口縁。端部はやや肥厚し、1条の凹線を施す。	内面—ナデ。 外面—口縁部ヨコナデ。胴部タテハケ。	密 細砂粒少量含む	良好	内外面ともににぶい橙色	表－4

SK－12

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
5 47 13	132	弥生土器 壺	①17.6欠 ⑤3.9△	「く」の字状に屈曲する口縁。口縁端部はわずかに上方に拡張する。	内面—口縁部ヨコナデ。胴部タテハケ。 外面—口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケ。	密 1～2mmの石英を少量含む	良好	内外面ともに橙色	南壁－5
6 47 13	132	弥生土器 壺	①20.3欠 ③1.6△	大きく開くD縁部。D縁端部に3条の凹線と刻み目を施す。残存部に3つの円形浮文が認められる。	内面—ヨコ・ナナメヘラミガキ。 外面—ナデ。	密	良好	内外面ともに明黄褐色	表－10
7 47	132	弥生土器 底部	②3.1△ ③5.6欠	平底。	内面—胴部タテナデ。底部不整方向ナデ。 外面—胴部タテヘラミガキ。底部不整方向ナデ。	密 細砂粒少量含む	良好	内面にぶい褐色 外面橙色	表－1

SK－21

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
8 58 14	204	土師質 土器 椀	①16.4 ②5.4 ③6.6	口縁部は内湾することなしに直線的に外方に伸びるもので器壁は薄い。底部は静止糸切り。	内面—底部不整方向ナデ。外は回転ナデ。 外面—回転ナデ。	密	良	内外面ともに浅黄橙色	ずし－6

SK－24

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9 62 14	68 107	陶器 灯明皿 受け皿	①11.7欠 ②2.1 ③4.2	皿の内面に上皿を重ねるための低い突起が通り、その一種に指押えによるくぼみをつくる。	内面—施釉。 外面—上下回転ナデ。他は回転ヘラケズリ。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	トウサン式 清水－11
10 62 14	110	土製品 土人形 (脚)	② 9.8△	「泥天神」と呼ばれる土人形の脚。2次的に火を受ける。		密	良	外面橙色	清水－10
11 62 14	110	土製品 土人形 (体部)	③ 8.6△	土人形の体部。武者人形か。		密	良好	内外面ともに橙色	清水－9

SK－25

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12 64 14	61 64 100 142	陶器 油壺	①18.2△ ③10.4欠	平底。胴部最大幅部を挟んで2条の沈線を施す。	内外面ともに回転ナデ。	1～2mmの石英を少量含む	良好	内面オリーブ黒色・高色 外面暗赤褐色	鶴前焼 南壁－3

SD－01

遺物番号 検図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13 78 14	136	陶器 土瓶	①9.6 ③8.1	胴部中央付近に最大幅を持つ土瓶。一方に口がつき、その上に耳がつく。相対する側にも耳があったと思われる。口縁立ち上り部内面の粉は刷毛取られる。	内面—回転ナデ。口縁立ち上り部黄白色釉刷毛取り後、胴部周付近まで透明釉。口縁端部釉刷毛取り。 外面—施釉。	密	良好	内外面ともにに ぶい黄褐色	清水－7
14 78 14	136	陶器 土瓶蓋	①10.4 ③2.4	宝珠状のつまみを持つ土瓶蓋。外周に草模の文様を施す。	内面—回転ナデ。 外面—施釉。	密	良好	内外面ともにに ぶい黄褐色	清水－6

SD－02

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15 79 15	123	弥生土器 壺	①18.4※ ②1.4△	大きく開く口縁部。口縁端部に3条の凹線と思い結み目を施す。残存部に2つの円形浮文が認められる。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい橙色	表－11

SD－13

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16 83 15	160	陶器 底部	②1.9△ ④4.9	高台を削り出す底部。内面底部に3つの砂土目が残る。2ケ所に高台部が触れる。	内面…施釉。 外面…上端部回転ナデ。他はケズリ。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面にぶい黄橙色	チリメン高台 南様－12

SD－15

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
17 88 15	162	陶器 底部	②2.3△ ④10.3※	高台の付く底部。高台内面に工具痕が残る。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内面底釉部淡黄色、露胎部にぶい黄橙色 外面にぶい赤褐色	南様－14

SD－18

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18 92 15	153	肥前陶器 底部	②1.3△ ④4.1	高台を削り出す底部。内面底部に3つの砂土目が残る。	内面…施釉。 外面…回転ナデ。高台内ケズリ。一部に釉がたれる。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面明青灰色	南様－11
19 92 15	165	陶器 壺	①7.0※ ②2.3△	口縁部はほぼ直立し、端部は平坦面をなす。	内面…露胎。 外面…施釉。	緻密	良好	内面淡黄灰色 外面淡黄色	南様－10
20 92 15	165	磁器 口縁	①10.0※ ②2.2△	口縁端部は外側に肥厚する。	内面…口縁端部施釉。他は露胎。 外面…施釉後色絵。	緻密	良好	内面灰白色 外面淡黄灰色	南様－18

SD－20

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
21 93 15	138	陶器 底部	②2.4△ ④8.2※	平底。外面には白濁の釉が被状に施される。	内面…回転ナデ。 外面…施釉。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面褐色	南様－15

SS－02

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
22 101 15	141	弥生土器 壺	①16.6※ ②1.1△	口縁端部を上下にやや拡張し面を持つ。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともににぶい橙色	表－6

窯状遺構

遺物番号 掲図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23 103 16	31 47 103	陶器 大甕	①41.4※ ②40.7 ③21.0	口縁端部を内外に肥厚する。胴部下半に厚い粘土を持つ。内面底部に方形の粘土目が残存で5つ認められる。胴部内に1条の波状のハケ目を施す。2つ以上の焼し釉が認められる。	内面…回転ナデ。 外面…施釉。	密	良好	内面灰色 外面暗赤褐色	南ボ－5

遺構外

遺物番号 遺構番号 図版番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
24 109 16	6	弥生土器 甕	①15.7※ ④ 1.9△	「く」の字状に屈曲する口縁。口縁端部を上方に拡張して面を持ち、2条の凹線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに赤ぶい橙色	表－8
25 109 16	119	瓦質土器 鍋	①27.2※ ④ 4.5△	口縁上半部の屈曲が受口状を呈する。	内面…ヨコナデ。 外面…上端と中央ヨコナデ。下半部はヨコナデ後指押えか？	密	やや良	内面暗青灰色 外面明灰色	外面スス付着 表－5
26 109 16	46	肥前陶器 皿	①13.4※ ③0.05△ ④ 5.4※	口縁端部近くで段をもつ薄手皿。内面底部に砂目板が残る。	内面…回転ナデ。施釉。 外面…回転ナデ。中程付近まで施釉。高台削り出し。	密	良好	内外面ともに赤ぶい黄褐色	前水－3
27 109 16	98	肥前陶器 皿	① 9.9※ ③ 2.0△	口縁端部近くで段を持つ薄手皿。	内面…施釉。 外面…上半部施釉。胴部下端ケズリ。他は回転ナデ。	密	良好	内外面ともに浅黄色	南後－6
28 109 16	82	陶器 底部	③ 2.4△ ④ 4.4	高台を貼り付けた底部。内面底部に2つの胎土目が残る。	内面…施釉。 外面…回転ナデ。	緻密	良好	内面オリーブ灰色 外面に赤ぶい黄褐色	南後－7
29 109 16	99 100	肥前陶器 壺	①20.6※ ③ 8.2△	口縁端部を内外に拡張し、上部に平坦面をつくり、5条の凹線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに暗褐色	表－17
30 109 16	63	陶器 徳	①28.6※ ③ 8.6△	口縁端部を内外に拡張し、上部を平坦状にする。	内外面ともにナデ。	緻密	良好	内外面ともに暗赤灰色	南後－13
31 109 16	61 99 109 110	唐津陶器 徳帷	①17.4※ ③ 8.9△	口縁端部を外側へ水平方向に張り出し、丸くおさめる。頸部と胴部に沈線を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに暗赤褐色	清水－1
32 109 16	59 62	陶器 鉢	①29.0※ ③ 9.0△	「く」の字状に開く口縁部。胴胴部には竪押しの文様を施す。	内外面ともにナデ。	密	良好	内外面ともに赤ぶい黄褐色	南後－1
33 109 17	100 108	陶器 擂鉢	①22.0※ ④ 8.6※	口縁端部は外方に肥厚し、底部には高台が付く。おろし目は密に施される。内外面に鉄釉を施す。	内面…施釉。 外面…高台部施釉。他は施釉。	緻密	良好	内外面ともに暗赤褐色	南後－2
34 110 17	32	陶器 大鉢	③ 8.6△ ④13.2	高台をもつ底部。	内外面ともに回転ナデ。外面には粗いヘケ目の白色釉が施される。	密	良好	内外面ともに赤ぶい赤褐色	表－3
35 110 17	23	肥前陶器 底部	③ 2.1△ ④ 5.4※	平底。	内面…回転ナデ。 外面…胴部回転ナデ。底部回転糸切り。	密 砂粒を含む	良好	内外面ともに赤ぶい赤褐色	表－2
36 110 17	21	陶器 茶入れ	① 7.1△ ③ 3.1	胴部の3ヶ所をナデてくぼませる。	内面…回転ナデ。鉄釉。 外面…胴部回転ナデ。上下部鉄釉。底部回転糸切り。	緻密	良好	内面暗赤褐色 外面施釉部暗赤褐色、露胎部淡黄色	南後－9
37 110 17	21	陶器 茶入れ	① 3.1△ ③ 3.2	胴部の3ヶ所をナデてくぼませる。	内面…回転ナデ。鉄釉。 外面…胴部回転ナデ。上半部鉄釉。底部回転糸切り。	緻密	良好	内面暗赤褐色 外面施釉部暗赤褐色、露胎部灰色	南後－8
38 110 17	28	肥前磁器 染付碗	①11.8※ ③ 5.5 ④ 4.8※	底部的に外傾し、端部を丸くおさめる。底部に高台を貼り付ける。内面は蛇ノ目釉剥ぎを行う。文様は濃紺顔料による。	内面…施釉。底部は蛇ノ目釉剥ぎ。 外面…施釉。型押し。	緻密	良好	内面…明青灰色 外面…灰オリーブ色	陶前磁器 南後－20
39 110 17	34	磁器 碗	①11.8 ③ 6.9 ④ 4.7	底部的に外傾し、端部を丸くおさめる。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	ずし－9
40 110 17	68 84	肥前磁器 染付碗	①10.6※ ③ 4.3△	底部的にやや外傾する口縁部。端部は丸くおさめる。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰色	陶前染付 南後－17
41 110 17	95	肥前磁器 碗	① 9.7※ ③ 6.7△	口縁部はほぼ直立して端部にいたり、丸くおさめる。	内外面ともに施釉。外面下端に露胎部。	密	良好	内外面ともに青灰色	陶前青磁 清水－2

遺構外

遺物番号 挿図番号 図版番号	取上番号	種類 器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
42 110 17	68	肥前磁器 五寸皿	①13.4底 ②3.8 ④8.2底	内腔する口縁部。端部は内反する丸みをもつ平坦状になる。底部外面は絞ノ目釉剥ぎされる。底部は、一重方形枠内に草書体の「福」字さえる。	内面…施釉。 外面…底部絞ノ目釉剥ぎ。他は施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	絞ノ目凹形高台 表－14
43 110 18	19	肥前磁器 小皿	①9.9 ③1.5 ④4.9	口縁部は大きく外反する。内面底部には不鮮明ではあるが、蘭文状の施刻が施される。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	陶胎白磁 表－12
44 110 18	73	磁器 碗口	①7.5 ③3.1 ⑤2.8	内面に吹墨技法によって桜の花を表現する。	内外面ともに施釉。	緻密	良好	内外面ともに灰白色	吹墨技法 南検－16

挿表12　石製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
S 1	78	14	137	SD－01	砥石	硬砂岩	8.2△	4.5	3.7	220	ずし－1
S 2	98	15	194	SS－01	磨石	角閃石安山岩	10.4	9.5	6.9	945	ずし－2
S 3	107	16	135	P103	磨製石斧	花崗閃緑岩	11.8△	5.0	2.1△	235	ずし－4
S 4	111	18	70	遺構外	磨製石斧	石英質緑色片岩	19.7△	6.1△	1.9△	343	ずし－5
S 5	111	18	50	遺構外	磨石	閃緑岩	12.2△	5.5	4.0	480	ずし－3
S 6	111	18	203	遺構外	五輪塔空風輪	花崗斑岩	28.6	19.3		7560	表－15
S 7	111	18	202	遺構外	五輪塔地輪	角閃石黒雲母石英安山岩	27.9	28.8	11.5	14320	ずし－8

挿表13　鉄製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土位置	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
F1	56	13	134	SK－20	鉄鎌	25.9	3.7	1.9	南鉄－19
F2	77	14	200	SK－37	鉄鍋	12.5△	31.2底	0.4	清水－8
F3	98	15	193	SS－01 穴3	鉄鎌	19.5△	4.3	0.5	表－3